

〈翻訳〉

リーディングのレトリック (2)
—— C. S. ルイスによる西洋リテラシーの弁護 ——

Dr. ブルース・L・エドワーズ, Jr.
湯 浅 恭 子 訳

第二章

ルイスの認識論とテキストのインテグリティ

「ぼくたちの世界では」とユースチスは言った。「星は、燃える気体のボールだよ。」
「息子よ。今のことばは、星とは何かの答えではなく、星は何からできているのかの説明にすぎない。おまえの世界でも同じだよ。」(「朝びらき丸 東の海へ」138)

I

現代のリテラシー観の動向を検証した結果、C. S. ルイスの認識論を詳細に検討し、リーディング・プロセスとライティング・プロセス間の関係に対するルイスの見解を全体的視点から得ることができた。「リーディング (読解)」と「クリティシズム (批評)」の所業は、ルイスにとっては当然すぎる作業であった。これは、「良い読者」(ルイスが頻繁に使用した名称)が「偶然生まれる」ので訓練や成長は必要ないと言っているのではなく、むしろテキストに対する効果的な応答に必要な可能性や能力は、各人が人間である限り必ず各々に存在するという意味である。理解、理性、想像力は、全ての人間や機関に共通に存在するので、秩序のなかにいったん置かれると、息をするように意図せず自然に可能となる。

しかし、現代生活の混乱に関する、伝統的西洋人の大問題について、ルイスは「歴史上の時代区分について (DE DESCRIPTIONE TEMPORUM)」で、間接的に言及している。

新しい認識論と解釈学の付随者は人間から異なる種類の生物を作り出した。ルイスの見解では、過去二世紀の産業技術革命から進化した近代の大激変は、人間であることに不安を感じる人間、思考としての思考に不満を感じる人間へと、西洋社会を変化させた。ルイスは、最近「ポストモダン」に批判的な詩人のカール・シャピロと、間違いなく意見を共有している。「ポストモダン」は「個人的、自己中心主義、唯我論的だけでなく、部族的、反家族的、反自然的エトスに対する陳謝を表明したが、原始的、神秘的な知恵から引き出されたものだ。」(209)

現代的リテラシー観に関する「新学問」は、「無知」へと入れ替わり、以前に深く掘られた塹壕として変ぼうしていった。反対に、新学問が直面した時、実際にテキストを構成するのは何か、読者がリーディング時に何をするのか、誰が著者と呼ばれる資格を有するのかに関する争いは起きなかった。リーディング・プロセスとライティング・プロセスの初歩的要素を問題化し、プロセスの問題点と曖昧性を理想化することによって、現代の理論家は論争の性質やカテゴリーを防止することに成功した。著者、テキスト、読者の各役割を区別し擁護する者は、古典的名著「正当性について (Orthodoxy)」において、G. K. チェスタトンが語った立場に立つと言える。

自分が固く確信している内容の擁護は困難な作業だ。部分的に単純に確信している時は比較的簡単だ。部分的に確信しているのは、その事の色々な証拠を見つけたからだ。彼はそれについて説明することができる。しかし人は何かをそれを証明することを知っても、哲学的理論をほんとうは確信することができない。彼は、全てがそれを証明するときに真に確信することができる。……このように、もし普通の知性的な人に突然、「なぜあなたは野蛮よりも文明を好むのか？」と問うたとしたら、彼は次々といろんな物に目を乱暴に向ける事であろう。「なぜって、本箱があるし、石炭箱には石炭があるし、ピアノ、警察官」だから、全ての完全な確信には一抹の巨大な無力感が横たわる。その信念があまりにも強すぎて行動に移るには長い時間がかかる。(83)

著者、テキスト、読者の各者の区別には各々に明確な役割や責任の割り当てがあるが、それは広く是認されている「規定」の前提となっている。その結果、近代的読者が懐疑主義を奮い起こし、これらのカテゴリーを疑問視することは困難である。このような疑問視の危険性は合理性そのものであり、難解な文学理論だけによるのではない、とルイスは我々に語ることであろう。ルイスは、脱構築主義批評家が「存在の形而上学」を容易に発見するように、還元主義の微小な形をも嗅ぎ付けるであろう。ルイスは我々に次のように

思い起こさせる。「エマソンの言葉だと思うが、私たちが存在していることを発見しその事実を知ったことは大変不幸なことです。つまり、ただバラに注意を傾けているだけではなく、ある型の心とある型の目でバラを見ている自分たちをも否応なく意識するようになれば、それは不幸なのです。不幸なのは、もし私たちが非常に注意深くしなければ、バラの色は私たちの視神経のせいにされ、香りは鼻のせいにされ、遂にバラは何も残らなくなってしまうからです。」このような種類の分析は「悲惨である。なぜならば、もしあなたが非常に注意深くない人であるなら、薔薇の色は、我々の視覚神経に、薔薇の香りは我々の鼻へと還元され、最終的には、薔薇はどこにも残されていない。」(被告席に立つ神271) ルイスの類推を敷衍すると、「リーディング」に関する最近の発見は、自然にテキストとしてのテキストの損失に不注意にも到達してしまうことだ。

ルイスは、この種の思考のあり方を「バルバリズム」と呼んだ。この用語は、ルイスがバルバリズムの最初の犠牲者エゼキエル・バルバーの想像上の「伝記」を書くために発明した名称である。「彼の運命は、彼が5歳の時に、母親が父親に言った言葉で決まりました。彼の父が、三角形の二辺の和は他の一辺よりも大きいと述べた時、母親は『ああ、あなたがそう言うのはね、あなたが男だからよ。』と言ったのです。」(273) ルイスは、この教義を擬人化するためにバルバーを作り出した。この教義は、「なぜ間違っているのかを説明する前に、ある人が間違っている」と示すかわりに、「議論もせずにもまずその人が誤っていると前提し、なぜその人がそれほど愚かになったのかを忙しく説明することで、この(唯一まことの)問題から当人の注意をそらすのです。」(273) ルイスは宗教上の議論を通して痛ましいほどにこの20世紀の現象の証拠を彼の身近から見つけた。「キリスト教が間違いだと考えても、まず布教する動機がある人がいることに、私は十分早くから気づいていました。『現代人には、自分が拒否している道徳には永遠の拘束力は何もないと自分自身を納得させたがる、あらゆる理由がある』と安易に語り、ゲームを逆にして興じることもできると分かりました」(273) とルイスは語る。言語が単にそれ自体についてのものであり「超越的なシニフィエ」ではないと考える(デリダのような)主張や、テキストは客観的な存在(オブジェクティブ・エンティティ)ではない、それは見る者の目の中にあると説く(ホランド、ブライヒ、フィッシュのような)見解は、「単なる真実の出来事」の発生を阻害する。もし確固たる前提を初めから想定するのなら、代替物を論駁する必要性がない。しかし、ルイスは次のように力説する。「理性の信憑性を奪う力は、それ自体、理性的議論に依存しています。バルバリズムをするために、理屈を論じなければならないのです。もしそれに失敗すれば失敗です。もし成功すれば、余計に失敗することになるのです。——なぜならば、あらゆる証拠は無価値であるという証拠は、それ自体無価値に違

いないからです。」(274) この種の絶対主義に代わる唯一の物を、ルイスは次のように提案する。「我々の論理力への不屈の信念」(272) これこそが、ルイスの切札である。「もし私たちの理論が、真理への真の洞察を与えてくれるものでないならば、私たちは何も知ることができません。私たちの思考が洞察であるということを否定するような理論や、私たちの知識を説明できない理論は、受け入れることができません。」(275)

バルバリズムという教義は、ルイスが名付けた「年代順の俗物」の好例である。「自分の時代に共通する知的雰囲気は無批判に受け入れること、時代遅れは確実に評判を落とすという想定」を意味する。(喜びに驚いて 207) 20世紀の「発見」や「造語」というだけで真実だと想定するのなら、それは「木曜の午後だからそれは正しいのだ」というチェスタトンの言い回しをそのまま信じるようなものだ。ルイスはこのような偏った考え方を認めない。それが、いかに、なぜ、時代遅れなのか、その理由を見つけださなければならぬ。「我々の年代の中にも『期間 (period)』がある。全ての期間がそうであるように、我々の時代にも時代特有の幻想がある。」ルイスのスタンス (立つ位置) は、文学、宗教を問わずどのような分野であっても、「人間の本質」を見る見方があり、他人、宇宙、神との関係の中に自分の存在を見る人生観、様々な文明を超えて存在する見方があるのだという事実に基づいている。ルイスが「キリスト教の精髓」について語る時(「精髓」という言葉にルイスは「全ての場所で、いつも、全ての人によって、信じられてきた」という意味をこめている)、全ての人間にとって普遍性のある、人生で出会う人々に応答する方法や考え方の明確化を試みた。

ルイスは、これに「タオ」という呼称を使用した。それは、「自然法」という先入観を与える言葉を何としても避けるためであった。ルイス著「人間の廃絶」は、この「タオ」の解説書である。近代社会の特に教育の場における「タオ」の排除について語っている。「タオ」は検証に値するテーマである。ルイスの人間観、リテラシー観を知る鍵である。ルイスは、実在の著者や本のタイトルを匿名に伏せるために、「人間の廃絶」の書き始めに、ある作文の教科書に「緑の本」というタイトルをつける。ルイスはこのテキストの主題全体を表す、ある特定の部分に焦点をあてる。この教科書の作家にルイスは「ガイウス」と「タイタウス」という仮の名前を付ける。二人の作家は、コルリッジが滝を見た時の有名な話に言及した。ルイスは、その話を回想する。「二人の旅行者がいて、一人は(その滝を)『崇高』、二人目は『美しい』と形容した。コルリッジは、気持的には最初の叙述に賛成し、二番目に嫌悪感から拒絶した。」(14)

ルイスは、ガイウスとタイタウスの言葉を次のように説明する。

「あれは崇高だ」と人が述べるなら、彼はその滝について述べているように思えるかもしれないが……実際は……彼は滝について述べているのではなく、彼自身の感情について述べている。彼が語る言葉は、「崇高」という言葉を連想させる感情を心のなかに持っている、すなわち、私には、崇高な感情がある。

さらに彼等はこのように語る。「この混乱は、我々が使用する言語の中に常に存在する。我々は、何かについて重要なことを語っているように思う。すると実際には、自分の感情について語っている。」これに対してルイスは、次のように反論する。この文を読んだ学生は、価値を表す言葉が、それを書いた著者の感情を叙述したものに過ぎないと確信する。さらに深刻なのは、このような叙述は全てばかりしいのだと断定するようになる。それは、ガイウスとタイタウスの陳述に「のみ」存在する言葉の力である。それが特にルイスを怒らせる。それが、ある命題を後で手放して拒否するように読者を条件つけるからである。「彼等が読者の心に入れたのは理論ではなく、想定である。10年後にはその原典が忘れ去られ、その存在すら意識にのぼらなくなる。その結果、読者は、ある議論の一方に組するように条件づけられる。これを問題だとは全く感じないようになる。」(16-17)

ガイウスとタイタウスが、知らず知らずのうちに「英語教育の下にまぎれて」実行していることが、「彼等の思想」の宣伝だった。彼等の思想とは、生来は主観的な、ある程度は、独我論的な思想である。彼等のテキストとその底を流れる想定の中に、ルイスは、近代社会特有の人間観を発見する。

近代社会が訪れるまでは、全ての教師を含む全ての人が、宇宙はこのような存在であるという見方を持っていたので、我々の側のある種の感情的反応が、その宇宙に対して適合か、不適合かの判断ができると信じた、実際のところ、オブジェクト（客体）は受身の存在ではなく、我々の承認不承認、恐れ、恥辱を受けるに値する。(25)

サブジェクト（主体）とオブジェクト（客体）の距離が、新しいサブジェクト制の元でわずかに短くなった。人間のオブジェクト観は、オブジェクトそれ自体と分離不可能であり、実は、オブジェクトそのものを構成している。人間は、外側の行動基準に対して、なんらかの説明責任があると考え、命題、信念、真実は、根拠を失う。価値観は、「そちらの外側」¹ではない、不透明な何かに無理に押しつけた、内側（internal）の何かであると考えられている。

このかなり個人的な認識論は、近代前の全人類の歴史的経験と行動を沈黙させてしまう

と、ルイスは指摘する。それ以前に独我論者や主観主義者がいなかったというわけではない。つまり、彼等の存在がその姿のまま、飾らない本質のままに、独我論者や主観主義者として明らかに認識された。そのような認識を持つようになった動機が「タオ」である。この価値観は、普遍的かつ客観的でオブジェクト的な価値や、行動、正義、正当に関する自分の外側に基準を持つ生き方である。タオの考え方が、プラトン哲学、アリストテレス主義、ストア派、ユダヤ・キリスト教、東洋文明にも同様に、各々の道德制度の中にあると、ルイスは考える。我々がそれに対して応答する意図のあるなしにかかわらず、ある特定の概念がタオの内側から要求し、ある特定の反応を我々に要求するという判断のあり方を、ルイスは固く信じている。

D. E. ハーディング (D. E. Harding) の「天地の位階 (The Hierarchy of Heaven and Earth)」の序文においてルイスは次のように語る。価値観と客観的知識が「価値判断の主観的部分へと変化した時」主観は「貪り食われ、膨張し、客観を犠牲にする。世界を空にした方法が、同じく我々をも空にする。」その結果、「『人の心』や『意識』は、その人の行動について、立証することのできる、事実のシンボリックなある特定の省略記号となる。つまり、ある事柄に間違えられたシンボルである。イメージや個人的経験、全ての失われた神々、色、概念として中に入れることのできる『意識』はない。」(「天地の位階」への序文 9-10) 主観サブジェクトと客観オブジェクトの合併が起こり、人間は排他的になる。つまり、「自分」になろうとして、ナルシズムにますます落ち込んで行く危機の中に入る。全てを自分の主観的はずみ (衝撃) による計測や、外側の価値観や判断による抑制をはずし、自分の人生、自分の思考、自分の抑制された人間関係や、自分の読書行為の全てが、「絶え間ない自伝」として浮かび上がる。ここに、一人の人間になることを意図した生き物がいる。しかし、その生き物は、知 (minds) が出会うことのできる客観的世界に対して、「主観としての自分自身」から「外に出る」ことはできない。

ルイスにとって、このような主観的意見は、貧困な読者や作者の終焉と結びつく。テキストの中の作者が邪魔な存在になっている。読者志望者がテキストに対面した時、テキストの中に、自分自身の意識の鏡を見つける。感情や情操のリトマス試験紙が、自分の感情を確認し、再肯定するが、それにチャレンジを与えたり、別の物に取って代わることは決して行わない。反対に、ルイスは、文学を、トーマス・ハワード (Tomas Howard) の言葉を拝借し、「読者を窓に導く」ための手段であると考えた。「読者はその窓から近代という暗く行き詰まるような部屋から外を見ることが出来る。よろい戸を (思いっきり) 明けると、我々を閉じ込めていた部屋から遥か遠くの方の、遠大な眺めへと我々を導く。」(13)

読者がこれらの眺めを目にすることが出来るように、客観的なテキストとしてのステー

タス（身分）が、ディスコースになければならない。読者は、彼自身の意識を「鏡のように反映」できるように、彼の感情が確認できるテキストを選ぶのは当然である。その要求に適合するテキストは存在する。ナルシスティックなテキストを好んで読む事と、読者が偶然遭遇するテキストがこの機能を果たす事とは全く次元の異なる行為であり、テキストがテキストであり、読者が読者であるからと言って、同じように考えることはできない。この場合の読者は、テキストが本人の意識から分離しているために、こういった彼のし好を反映する要素を含んでいることを客観的に見極める。その一方で、病的な何かが関係している。育児拒否の性悪な両親の犠牲者としてしか自分を考えることのできない男は、苦しい過去を乗り越えた子供が邪悪な親戚に対して勝利する種の歴史的ロマンを意識的に読む。もう一方では、似たような若者が、主題、焦点、意図が何であったとして、彼の父母への嫌悪の擁護として、小説を読む。彼は、テキストをそのまま読む代わりに、自分自身を照射するテキスト観によって読む。この場合は、著者の意図ではなく、読者の意図が支配的になる。

このような考え方は、ルイスの見解とは全く異なる立場にある。極めて自己破滅的で脆弱な、著者の意図による読み方が、文芸論にとっては相応しくないとしても、世俗的な日常的思考には適っていると、ルイスは考えた。ここで、「コンテンプレイション (contemplation: 観照)」と「エンジョイメント (enjoyment: 享受)」の二種類に分類したルイスの用語に目を向ける必要がある。「エンジョイメント」は、サミュエル・アレキサンダー (Samuel Alexander) の「宇宙と時間と神 (Space, Time and Deity)」からの引用である。ルイスはこの本をキリスト教に改心する直前に読んでいた。彼の世界観に深く影響を及ぼした本であることは、ルイス自身が認めている。「エンジョイメント」という言葉は、プレジャ (快樂) と関係がなく、同じように「コンテンプレイション」は、コンテンプラティブな (黙想) 生活との関連性がない。テーブルを目にした時、テーブルを見るという行為を「エンジョイ (楽しむ)」し、そのテーブルについて「コンテンプレイト (観照)」する。後に、見る事をやめ、見る事そのことを思索するとする、そこで、見る事を観照し、思索をエンジョイする。(喜びのおとずれ 217)

エンジョイメント (享受) は、活動を実行することである。コンテンプレイション (観照) は、行動の目的を理解することである。『ヘロドトスが信頼に値しないと思う』時と同じ感覚で、『思索を思考する (think a thought)』ことはしない。思索 (thought) を思考する時の、『思索 (thought)』は同族目的語である。(一撃加える {strike a blow} の『一撃』が同族目的語であるのと同様である。) (ヘロドトスが当てにならない、という) 思索 (thought) を楽しむ (enjoy)。(217-18) ルイスは、この区別を「思索に欠くことの

できない道具」と考えた。それは、見る者と視覚対象との間に、知る者と知識対象の間に適切な距離を置くことができるからである。テーブルを「見る」ことは、テーブルから距離をおくことを意味する。それを知覚し、それを「外側」の実体として登録する。その一方、テーブルを見ることから、テーブルを見るという行為へと移行する。「目を見るために、目を取り出す」ことは、対象それ自体を失うことである。認識論的には、エンジョイメントとコンテンプレーションは、相互に排他的な行動である。²

ルイスは、「インストロペクション (内省)」に深い疑いを感じた。インストロペクションに基づいたリーディングや批評活動は、信頼のできない欠陥品だと考えた。テキストを読みながら、同時に、リーディング行為の検証を行う危うさの説明を行うルイスの描写は見事だ。

全てのインストロペクションは、ある意味、人を惑わせる。インストロペクションとは、「自分の内側」を覗いて、何が営まれているのかを知ろうとすることである。しかし、その時まで、営まれている全てが、それを見ようと目を向けるまさにその瞬間に、妨げられる。これは困ったことなのだが、インストロペクションが何も生み出さないわけではない。反対に、私たちの通常の活動が中断されることから、残された残滓を確実に見る。残されたものとは、主に精神的イメージと肉体的感覚である。大きな誤解は、沈殿物、痕跡、副産物に過ぎない物を、活動そのものと取り違えるところにある。こうして人は、思考とは語られない言語であり、詩の鑑賞が精神の残像の集積にすぎないと、信じこむようになる。(218-19)

読者がテキストにアプローチし、テキストを読む。その読むことを「エンジョイ (楽しむ)」し、テキストを「コンテンプレイト (観照)」する。テキストが、読者の「エンジョイメント (享受)」の目的になる。しかし、読者の注意が、テキストからリーディング行為に移行した場合、ルイス的表現で言い換えると、テキストのコンテンプレイトから、「リーディング」のコンテンプレイトへ移動が起きると、リーディングの目的であるはずのテキストが視界から消えてしまう。自分のリーディングに専心する読者は、リーディングを内観的に覗いた結果の「残滓」を、テキストそのものと取り違える。

ルイスは、プロセスとしての「リーディング」が認識不足であると言っているわけではない。ルイスは、リーディングのプロセスに注目することが、テキストを読むことと同様ではないという意味での条件を付ける。表面的には、これは、ウイムザット (Wimsatt) とビアズリー (Beardsley) の「アフェクティブ・ファラシイ (感情の誤謬)」を繰り返

して述べているだけのように聞こえる。ウイムザットとピアズリーは、アフェクティブ・ファラシイの定義を、「詩歌とその結果の間の混乱（それが何であるのか、それが何をなすのか）」と考えた。しかし、それは、ルイスの意図と同じではない。（この後、第四章で確認していくが、ルイスは、意味形成における読者の相互の役割を認める。）その反対にルイスは、二つの全く異なる種類の行為を区別しようとする。上記に述べたリーディング（reading-as-such）と、リーディングとは何かに関する検証の区別だ。前者のプロセスは、ある一人の人が別の人との間に持つテキスト・ディスコースの関連性を示す。後者のプロセスは、一人の人が自分自身でリーディングの行為を検証することを意味する。前者は、それと関わりを持つ知識人の外側にオブジェクト（対象）があるが、後者はそうではない。スタンレー・フィッシュ（Stanley Fish）のような読者反応型の批評家は、「楽しみを受けた人々をコンTEMPLイト（観照）」し、批評とリーディングの合体によって、リーディング行為を混乱させる。もし、フィッシュやホランドやブライヒ等の批評家が力説するように、リーディングが「いつも」「すでに」「解釈」であるのなら、ここに疑問が生じる。「解釈とは、何を解釈するのか？」ルイスだったらこのように反応するであろう。読者反応型批評家は、テキストのコンTEMPLイション（観照）とリーディングのコンTEMPLイションを混乱し、テキストを見失っている。「これから『説明して片付ける』ために永遠に始めることはできない。すでにうまく説明して片付けてしまったことに気づくであろう。あなたは、永遠に『見通す』ことはできない。何かを見抜くための肝心な点は、それを最後まで見ていく事である。全てを『見通す』とは、何も見ないことと同じである。」（人間の廃絶 91）

テキストを「解釈」として「説明する」ことが、実はリーディングの「真の姿」に至るまで「見通す」ことになることになると、フィッシュ等の批評家は断言する。フィッシュの場合、既存の共同社会に存在する共通の解釈上のコンセンサスがある。ここで問題なのは、「アフェクティブ・ファラシー」ではなく、リーディング・プロセスの理解とテキストの実際のリーディングを区別する行為の停止だ。つまり、「詩歌と、その影響作用の結果（result）を混同する」のではなく、詩歌そのものを見失うことである。ニュー・クリティシズム（新批評）の用語の中で、（*objet d'art* アート作品を代表する）「詩歌」が、「意味（mean）」と「存在（is）」の両方を表すことができ、詩歌にはその影響作用の結果が時に含まれていると、ルイスは信じた。しかし、その理由は、この「欠くことのできない、思考の道具」の、エンジョイメント（享受）とコンTEMPLイション（観照）の区別にある。読者は、詩歌を識別し、詩歌とその影響作用の結果、つまり客観的な判別と、批評行動による明晰化の結果を区別する立場にいる。

II

ルイスは、彼の親友で同僚の批評家チャールズ・ウィリアムズ (Charles Williams) の用文記事を書いたが、その際ウィリアムズの信用を傷つけた人たちに対抗し、彼の弁護を行った。ルイスは、ウィリアムズの基本的方法に注意を向けた。「ウィリアムズの批評観は、風変わりであるが、彼の前にあるテキストから全て出て来ている。彼の基本的前提は、偉大な詩人は彼が語る言葉どおりの内容と意味を表すと考えた。言葉の簡素な意味こそが唯一の鍵であった。」³ ウィリアムズがテキストと真剣に取り組み、テキストに応答し、それ以外のものには応答しなかったことが、彼の長所であるが、彼の同時代の人たちとは異なる取組み方であった。同様にルイスも、F. R. リーヴィスの作品と「その他のミルトン破壊者」の作品を区別した。ルイスは、次のように指摘する。「あなたは、彼の判断に反対するかもしれない。しかし、彼は、彼の目をオブジェクトに向ける。彼は、何に目を留めているのかを正確にわきまえている。」⁴ ルイスが考える健全な読者と批評家を表す証は、作品 (artifact) そのものを思考の対象とする彼の決断力にある。ところが、テキストへ焦点を向けたルイスが、「ニュー・クリティック (新批評家)」に向かうことはなかった。読者としての読者はテキストに集中すべきだ、とのルイスの主張が、アメリカ新批評主義に一般的に関連されたり、テキストの過激な自主性のようなものと取り違えられるべきではない。

ルイスのアジェンダには、著者の意図や読者の反応からのテキストの分離は含まれていない。「作品の内の……複雑な関係や曖昧性」に対する「意味」の孤立も含まれていない。(エイブラムズ (Abrams), グロッサリー 117) その反対に、彼の関心は「テキストのインテグリティ」に向かう。「インテグリティ」とは、テキストの「実在性 (thereness)」を指すだけでなく、テキストが、リーディングとライティングのプロセスの唯一の構成要素であるという認識を指す。リーディングとライティングだけが、著者と読者を正当に結び付けることができ、読者の間に議論のための、安定した根拠を確立することができる。ルイスは、テキストを文芸論の真の出発点に設置することを強く望む。彼の時代のその他多くの文芸批評は脇へと外れていった。その中には、詩人の個性、テキストの哲学、テキストの受容の歴史等があったが、ルイスはこれら全てに反対する。

テキストを理解する上で、このような関心、懸念は、有益に思われる。ルイスは、これらの道具を拒否したり手放すことはしない批評家であろう。今も変わらず、これらの道具の方が舞台の真ん中に立って邪魔を働き、テキストをオーケストラピットに押しやる。そ

れは、ルイスがここで肯定的に認めるテキストの「自主性」ではないのだが、読者や批評家が反応するための中心的な方法である。ジェリー・ダニエル (Jerry Daniel) は次のように述べている。「ルイスが大切にしているものを、彼の同時代人達は全て無視しているようだ」とルイスは考えた。彼等は、詩歌を批評しているが、詩歌を避けている。というよりむしろ、彼等は、詩歌そのものを批評するのではなく、詩歌に関連する様々な事項を批評した。」(5)

テキストに対するルイスの心配は、「第一のものと第二のもの」に関するルイス・ドクトリンの解説と考えることもできる。「大きな善より小さな善、全体的善に対して部分的善を好むのなら、必ず、犠牲を払って得ようとしたその小さな善や部分的善をも失う結果になる、と。……第二のものを第一に据えることによって、第二のものは得られません。第一のものを第一にすることによってのみ第二のものも手に入るのです。」(被告席に立つ神 280) ⁵

著者に関する情報だけに依存し、典型的パターンや読者の真理を第一に据えることによって、テキストの理解に至ることはできない。このような第二の関心事が第一になる時に、テキストは、テキストを越える事柄、依りどころ、典拠、影響、語彙集の中に雪崩のように埋没してしまう。ルイスのテキストの捉え方、批評家の変化する関心のバランスの取り方の最もすばらしい解説とは、ルイスのエッセー「De Audiendis Poetis (傾聴に値する詩人たち)」の中にある。ルイスの典型的解説法は、ルイス的スタンスと自分で命名した方法に挑戦する現代批評家の発言を引証することから始める。ここでルイスは「Mr. スピアズ (Mr. Speirs)」の言葉を引用する。中世の詩歌を読むために、その詩が作られた時代に戻らなければならないのなら、それは「無理だ」とスピアズは考えた。もしその時代に戻るのであれば、詩を読む時、その人は、詩そのものよりも、詩以外の出来事に注意が向く。表面的にはスピアズは、上記のテキストが全て関心の中心にあるべきと考えるルイスの意見に同意しているように思われる。しかし、ルイスは、それがそれほど簡単な問題ではないと指摘する。「私たちを詩の外に連れ出し、そこに置き去りにする事があれば、それは悲しいことだ、と私は強く思う。しかし、もう一度、その中に入り、その中でさらに目的に合うように、一旦外に出なければならないかもしれない。」(中世ルネッサンス文学研究 I) この文脈の中でルイスは、古い本を読むことについて語る。しかし、スピアズに応答して語る彼の言葉は、どのような本を読む時にも適応可能に思われる。それが、読んだ事のある本であっても、初めての内容であってもどちらでも適っている。

「テキストを第一におく」とは、作品の元々の考え方の中心や本来の聴衆を形成する上で、重要性のある周辺事項を一時的な問題と考える見方である。この事は、特に、我々の

時代の「文化的健忘症」に陥っている「古い本」にあてはまる。それこそ、ルイスの演説「歴史上の時代区分について (De Descriptione Temporum)」の趣旨である。「私がそこで生まれた者として読んだテキストを、あなた方は外国人として読まなければならない。」彼は、翻訳が「必要」なラテン語、フランス語、イタリア語のテキストについて語っているのではなく、国民の文学的遺産をかつて形成していたものが、今はもう使用されることがなく、世に埋もれているものについて語っている。

この「テキスト」の外に出ることこそ、あってはならない重要な点である。「それが書かれた時代とは異なる、マナー、思考、感情が変化している事実を全て無視しながら過去の文学を読む人がいるのなら、それは、最悪に狂った作品となるであろう。」(中世ルネッサンス文学研究 I) その次に、このようなテキストへの適切な反応は部分的には、それを文脈のなかで理解することである。「我々は知りたい。だから、できる限り我々は、自分のために生き抜く所存だ。遠い昔になくなった人々の経験を生きる。この点で詩が近代人に『意味する』、彼等にだけ意味することは、どんなに楽しそうに見えても、レンズの上のシミにすぎない。我々は、レンズを洗浄し、シミを除去しなければならない。そうすれば、真の過去がさらに鮮明に見えてくる。」(2)

別の文脈でルイスは、同じ問題について語っている。「その言葉が作られた時代以後の意味変化、付带的、辞書的意味の変化を少しも考慮せずに古い詩を読む場合、その古い詩の作者が意図したようには我々は読んでいないことになる。」このような読み方の結果、「それは、私の意見では、まだ詩と呼べるかもしれないが、それは、我々の詩であって、作者の作品ではもはやなくなるであろう。」(語の研究 3)

ルイスがニュー・クリティシズム(新批評)のテキストの自立性の強調を拒否していることが、以上の結果から容易に知ることができる。テキストの自立性とは、「完全、充満の原則のことである。適合が発見された内包的意味は、全て、詩に帰することができる。それが意味することの全てを意味していると、言うことができる。」⁶ 同様に、明らかにルイスは、読者反応型批評家に同意することができない。読者反応型批評家は、「古い作者が意図した詩」を無視することが、「彼自身」の詩の構成になると考える。「これを簡単に昔の詩を『リーディング』していると言うなら、我々は自分自身を騙していることになる。我々が『単なる哲学』として、真の詩を回復するあらゆる試みを拒否するのなら、当然、詐欺を擁護していることになる。」ルイスは、しかめつらで次のように結論づける。「作者が意図した詩よりも、翻訳の間違いからでてきた自分なりに解釈した詩のほうを好むと言うのは誰でも自由だが。」(語の研究 3)

「真の詩を回復する」とは、詩へのアプローチをする上でまず第一優先事項になると思

われる。優先的動きがなくては、詩が注目されることがないからである。ルイスと、ニュー・クリティシズムとの間に共通点がほとんどないことに疑いを感じるのなら、ルイスは、その疑いを除去する。ルイスにとっては、著者とテキストがごちゃまぜに混在する隣の部屋に入れられた中で、自分の「作者性 (authorship)」と「詩」が、調査 (inquiry) と議論の目的になっては、リーディングの目的そのものが反対されることになる。文学の読者は、「文学によって、より新しく、より新鮮な喜び、現世のどこにも存在しない旅、へと導かれることを求めるべきである。」「私は、自分の体と自分の国で60年近く生きて来た。今は、それらを超えた世界をかいま見られるのなら、そのどちらにも魅惑されることはない。」(中世ルネッサンス文学研究 3-4)

ルイスは、「外国を旅する二通りの楽しみ方がある」ように、テキストには二通りの読み方があると考える。

ある人は、自分の英国人氣質 (Englishry) をたずさえたまま外国へ行って帰って来る。どこの国に行っても、同じ英国人観光客とのみ交流をする。彼にとっての良いホテルの基準は、イギリスのホテルと同じ様であること。彼は、「現地の人」を風変わりで面白いと考えているので、現地の風土の風変わりさを楽しむ。同じように、ある人は、彼の近代性をたずさえたまま過去の文学を読み、現在の状態が損なわれないようにする。古代と中世の詩のハイライトは、自分の時代の詩との相似性という観点からの読み方である。(中世ルネッサンス文学研究 2-3)

このような読み方をする読者は、必然的に、自分自身の感性を作品に押し付ける。彼にとっての興味と価値とは、自分の時代や文化にとって重要な思考方法や議論の主題に似ているという事実から成り立つ。

ルイスには、これよりもさらに適切な読み方がある。

その土地の食べ物を食べ、その土地のワインを飲む。その土地の生活を経験する。その土地の生活を、旅行者の目ではなく、そこに住んでいる人の目に写るように、その国が見えるようになる。昔の文学を読む時には、詩があなたに与えた現代的感性への最初の印象を超えることができる。詩歌の外側の事を知り、それを他の詩と比較し、あなた自身が、かつての消滅した時代の中に深く浸透する。その土地の人々の目を持って、その詩の中に再入国することができる。…… (中世ルネッサンス文学研究 3)

もちろん、「その作品がそれが作られた時代に意図されたであろう意味が、現代の感情や考えに影響されてそれを読んだ場合の今日の我々が受け取る意味と入れ替わったとしても」、それは「いたしかたない。」(2)しかし、「本当の詩」を見る努力をしないのなら、それは、幻のように、読者の意識の中へ吸い込まれていくであろう。それを「読む事」と、このような読み方に基づく批評的な方法が、ルイスの言葉によると、「全ての中で最悪の方法」を生み出すことになる。

……古いテキストが現代的感性に時にもたらず最初の印象を受け入れ、これを「実践批評」の詳細な方法に適応するのなら、両方の世界から最悪を生み出すことになる。……「人は、そこにはないものを見つけだすことができない」と(中世の詩について、たまたま)語る批評家は、過度に、はなはだしく、楽観的であった。ここでは、他とも同様に、訓練を受けていない目や、性能の悪い装置は、両方の間違いを生み出す。それらは、幻のようなオブジェクトを創造するか、もしくは、実体のあるオブジェクトを見失うことになる。(中世ルネッサンス文学研究 4)

ルイスが「廃棄された宇宙 (The Discarded Image)」を書いたのは、中世文学に不案内の読者に助け手を出そうとしたためだ。「廃棄された宇宙」は「真の詩」の排除を目的としたのではなく、「真の詩」の解説と保存を目指す学問的に適切なモデルである。その本を書いた理由を説明し、ルイスは次のことを認めた。詩に直面する途中に、「その場だけの、特別な研究がしばしば行われるので、」受容的リーディングを損なう悲しい結果が生じる。「受容力に富んだ人々でも、学問がいつの場合でも自分たちを文学から〈外〉に排除する有害物だと認識するようになる。」(廃棄された宇宙 vii) もし読者が「身に付けられる範囲内のまずまずの装備 (完全とは言えないにしても)」を「あらかじめ用意する」ことができるのであるなら、解決策が見つかる可能性があることを、ルイスは指摘した。それを身につけて歩み出せば、その装備が文学の〈中〉に私たちを導き入れてくれるのではないかと、と考える。

目の前に素晴らしい眺望が開けているときに地図ばかり見ているのは、せっかくの景色が与えてくれる「賢明な受容」を破壊する。しかし、地図を調べて悪いことはない。いや、そうしておけばかえって、数多くの展望が開けてくるだろう。そのなかには、勘だけを頼りにしては決して見つける事のなかった展望も含まれている。(廃棄された宇宙 vii)

ルイスが「文脈の絶縁力」と呼ぶこの地図は、テキストの控えめな付加物を表す。このテキストは、歴史的な文脈の中にテキストを置くので、テキストを第一に据えることが可能となり、他に気が散ることを防ぐ。

このような地図製作の必要性は、さらに古い馴染みのないテキストに直面する時に明白になる。現代の散文や詩もまた、その意味を時に著者自身の説明もあるが、それらの意味に行くためのガイド的な、今の時代に適した「地図」の必要性を、ルイスは理解していた。例えば、エリオット (Eliot) の「荒地 (The Waste Land)」には、おびただしい数の脚注と間テキスト分析の拡大があるが、これは、一種の詩の堂々とした例である。ルイスは、非常にもったいぶった、不必要なほど不可解な作品だと思った。⁷ フォーマリストの「曖昧性」の概念は、あるテキストの「記述」から、テキストを創作するためのある種の「処方」へと変化し、文脈が与える普通の、通常の「絶縁力」を当惑させる。「もし曖昧性 (エンプソン教授が言う意味での) が、[文脈の] この力によってバランスをとることが不可能ならば、コミュニケーションがほぼ不可能になる。」ルイスは現代詩の不幸を次のように述べている。

現代詩の中には、語法上の考慮されうる、あらゆる意味が、読者の心中に活動してなければ、完全には理解しかねるよう書かれているようなものがある、ということは私にもわかる。今世紀以前に、このような詩が存在していたかどうか、あるいは、昔のすべての詩がこのような読まれ方をすると誤読されることになるかどうか、こういったことは、ここで議論される必要のない問題である。日常言語において、語の意味が文脈により統制されているということ、この統制された意味が通常は、他の一切の意味を閉め出してくれることは間違いない。(語の研究 11)

多くの現代文学の規定、その曖昧性や計画的な多義性が、読者の理解を脅かしあざむく。それに基づく批評へとせき立てられ、合理的であると認めざるをえなくなったのではないかと、ルイスには思われた。「リーディング」は、「批評」の従属的立場となり、テキストは、著者自ら明白に勧める〈読み込み〉(eisegesis: 自分の思想を織りこんだ解釈)によって分断が起こる。

その結果は、批評に似た一種のリーディングと、文学に似た一種の批評の混合ができあがる。このようなスタンスは、スタンレイ・フィッシュが、今や悪名高い文の内に明白にしたように、次のように否認する。「正しいリーディング」と「正しいテキスト」は

「フォーマリズムのフィクションである。フィクションであるので、制限されているという弱点がある。私のフィクションは、解放だ。それは、正しくあらねばならない（単純に消えていた基準）という義務から私を解放し、私が興味深い存在であることを要求する。（幻のオブジェクトイビティとは全く関係なく答えることのできる基準）」フィッシュは、自分自身の役割が「テキストを回復したり、修復する」のではなく、「テキストを作ることであり、他の人たちの戦略レパートリーを加えて、その作り方を彼等に教えることだ」と考えた。⁸（このクラスにテキストは存在するのか？ 18）

フィッシュの陳述を、ハロルド・ブルームの語った「詩の理論は詩であるべきだ」の横に並べる時、30年前にルイスが同定した批評スタンスの実を発見することができるであろう。

ある事に対して行った真の分析はその物に似ているべきではないと考える。私は、喜劇の真の理論がそれ自体がおかしなものであることを期待しない。このような理論について、最初の瞬間は次のように感じる。「これは、私たちがほしかったものだ。」ある意味では、そうなのです。これは、我々の感情が欲求するものであり、すでに目覚めたムードを延長し強調するための条件なのだ。もう一つの意味は、この条件が目覚め始め、抑制が介入して、この明らかな科学的拘束力によって心地よく追い出されることになる。しかし、それが、別の意味では、「それが、私たちがほしかったもの」であっても、心理学者が言うように、我々の知的欲望を満足させ、我々の経験を理解しようとしたとしても、又は、批評家のように、著者がそれを喚起した時の芸術を診断したとしても、それは、関係のないことだ。（中世ルネッサンス文学研究 17）

ジェラルド・グラフ（Gerald Graff）とルイスは批評活動について同様の危惧感を抱く。グラフは、ルイスを思わせるスタイルで、次のような結論を述べる。ブルーム（Bloom）、ハートマン（Hartman）、ドマン（de Man）、デリダ（Derrida）、フィッシュ（Fish）等の影響力のある批評家は、究極的には「批評は意味（mean）ではなく、存在（be）であるべきだ」との結論を、グラフの研究は示す。その点に関してグラフは次のような指摘をする。「彼等が詩について以前に語った。批評家の間にある恐怖や震えは、確信から来る。批評は、文学のように、それ以外の何ものか『について』ではなく、又、そうであってはいけない。私は、引用符をあえて使用する。強い意見の批評家は全て、批評言語が、さらに言えば、どのような言語でも、その外側にある何かを意味すると考えるほど愚かではないことを示すために、そのような使い方をする。」（「恐怖と震え（Fear and

Trembling)」 470)

この種の批評は、現代という「時代」に現存する文学によって誘発されたように思われるが、間接的には、異なる種類の読者を作った。グラフは、この状況を再び次のように解明した。「読者が文学を誤って解釈することは、おそらく、文学が存在する限り存在する。ごく最近では、この人間的欠陥が規則化され、規則から次に勧めへと変化した。」この時点で、グラフは、次のように指摘する。「曖昧性は、誤まった解釈のなかで発生する。誤訳以外の選択があってもなくとも、又は、そうしたいと望むべきではない場合を除いては、正しい解釈の可能性が、完全に明白とは言えない。」(472) テクストのインテグリティは、傷付き痛めつけられ、危ういものとされてきた。著者の意図の意味を指摘することができない。文芸批評のオブジェクトとしての著者の地位が否定され、「真の詩」が解体される。しかし、テキストの不在が「リーディング」の前兆となり「批評」を妨害することはできない。その空隙は、読者が自分のテキストを挿入し、批評家が自分のコメントを一種の文学に代えることによって、埋められていく。

本当の詩の存在を欠いたリーディングは、読者を他の意見から絶縁し、個人的経験へと分解していくと、ルイスは語る。批評が、事実、根源、影響力のないカタログの場合、一人の読者や読者集団の読み違いの内省的歴史へと変化する。テキストや真の詩や、著者の意図された実体は、ルイスにとっては、唯一の基本である。この基本の元に、リテラシーの健全なモデルを据えることができる。リーディングの目的と批評の目的は、ルイスにとっては、まったく明白な事実である。

真理は、我々が著者を楽しむために批評を必要とするのではなく、我々が批評家を楽しむために著者を必要とするということである。批評は、通常、我々がすでに読んだものに懐古の光を投げかける。批評は、時に、過去のリーディングの過度の強調や否定を修正し、未来の再読を励ます。しかし、長く親しんだ作品に関しては、成熟した活動的読者にとっては、そうとは言えない。もし我々が選択しなければならないのなら、チャーサーについての新しい批評を読むよりも、チャーサーを読むほうが何倍も良い。(批評における実験 123-24)

III

ルイスは、テキストのインテグリティを懸念し、読者をテキストの外に閉め出したり、読者を二次的存在とする全てのリーディング・アプローチに反対する。ルイスは、我々が

テキスト「について」のみ読むのではなく、テキストそのものを読む事を提案する。「あらゆる分野に関しても、古代の書物は専門家によって読まれるべきで、素人は現代の本だけに満足すべきだという、奇妙な考え方が外国にある。」(被告席に立つ神 200) 著者の「偉大さ」に怯んで、脅える「素人」は、著者に関する議論による決着をつけようとする。それに対してルイスは反対する。「しかし、もし専門家だけが知ることができるのであるなら、彼(著者)の偉大さのゆえに、その偉大な人(著者)が、彼の近代的批評家よりもさらに知性豊かな人になる。」(200)⁹

ルイスは、著者が意図したように、読者が著者のテキストにアクセスすることができると思える。ルイスは、あらゆる時代の真理に対する一般的な考え方に対して基本的不信感を抱いているので、批評家の役割を文化的近視眼を読者の視点から排除することであると、考えている。これは、ルイス自身が、そのように努力した種類の批評家である。この批評家は、「その道から抜ける」時期を心得ている人なので、著者の意図したディスコースを理解することができる。「もし、平均的學生がプラトニズムに関して何かを知りたいのであるなら、彼が第一にすべき事は、図書館の棚から『饗宴』の翻訳書を一冊手に取り読む事である。そのことを英文学のチューターをしている時に発見した」とルイスは語る。その學生はむしろ、その10倍の長さの近代の書物を読んで、「主義」や影響についてのみ読むが、それらの本の中で、プラトンが実際に語った言葉について語っているのは、12ページにたった一回くらいだ。ルイスが指摘するように、テキストそのものに向かうほうが明らかに利点がある。「プラトンを直接読むほうが、『実際にプラトンが何を語ったか』を知ることができる。それこそが、批評家が伝えることのできないことだ。中に介入する近代が、理解の助けになるよりも、明晰性への脅威となるかもしれない。」(被告席に立つ神 200)

近代という時代に対してルイスが感じる透明な疑いが彼の批評を彩っていることを認めなければならない。ルイスに関する批評のなかには、彼の事を「彼がいた時代から分離」していると言って責め立てるような内容のものは一つもない。もし「彼の時代が彼から分離していた」と読めるように、わずかでも変更されたものがあるのなら、その訴えに対しておそらく有罪判決を求めたことだろう。ルイスのなかには、20世紀を価値あるものと思えることができない「年代的俗物根性」の逆感覚が多少ある。ルイスは我々に強烈な印象を与えるかもしれない。我々は、自分の時代に魅惑されて、内向的な、歴史とは無関係な態度に向かう傾向のある「時代精神」と共に生きている。しかし、ルイスは、自分の時代を称賛する理由も、さらに同様にすでに明確にされた理由により、20世紀の作品の価値の発見も、明らかにほとんど不可能である。

ルイスの批評作品を読むとわかるが、彼はファンタジーと SF 作品以外、19 世紀以後の文学にはほとんど興味を示していないことがわかる。ルイスの作品には惑星間ロマンス、児童文学のナルニア物語、アレゴリーと神話のフィクション、詩もちろんあるが、ルイスは「まじめな芸術 (serious art)」の現代的基準にほとんど目を向けなかった。有名な批評家の好意の味付けを加えることを拒否した。ルイスは、彼等にきっぱりと背を向けた。¹⁰

ルイスの思考を簡単に説明すると、彼は「恐竜」が現代を眺めるように眺めた。彼の関心や批評態度が時代錯誤的であり、同僚の前に自分の好みをひけらかすことをあえて選択し、意識的に実行しているように思える。ルイスの近代性からの逃避は、ルイスが「進歩」に「追付く」能力と意志に欠けた人物だと思わせる。彼に関する文学のスタイルや流行が彼の趣向とは関係がないのかもしれないが、ルイスは、彼に関する文学のスタイルや流行を無視する。大西洋の両側を配送された何百通もの手紙を調査した結果ルイスの読書が質量とも抜きん出ており、彼が反対するテキストを実は無視しているのではなく、直接テキストそのものについて発言する努力をしてきたと思われる。¹¹ それでもなお、ルイスが近代文学に対して、単なる「趣向」や「流行」に左右されて反対したとの見方が未だに残っているようだが、それに反対する理由がルイスには確実にあった。

ルイスは、自分の前の時代に生きた人々の文脈の内に、自分の時代を考えたように、「全ての年代には、その時代の見解があり」、そして、各々が、それぞれのやり方で、「ある特定の真理を見ることに優れているが、ある特定の失敗も特におかしやすい」ことを理解した。(被告席に立つ神 202) 我々が必要とするのは、「我々の時代の顕著な間違いを正すことのできる書物である。それは、古い書物のことである。」(202)「全ての現代の著者は、私のように、現代性に反対している者でさえ、」現代の視点を共有しているので、読者と作者が自分の時代から離れて、彼等の時代に関する、その時代よりもさらに新しい現代の見地を求めることは、重要である。ルイスは、古い書物を読む時に、「心の中に吹いてくる何世紀におよぶ時代の清らかな海風」の中に、矯正的な何か、健康的な何かを見つけた。

人々は今よりも賢明というわけではなかった。彼等は我々と同じように間違いをおかした。しかし、同じ間違いではない。彼等は、間違いを犯した私たちをおだてたりはしない。彼等の間違いは、今は、公開され、明白なので、我々を危険に落とす事はない。二つの頭は、一つの頭よりも良い。それは、一方の頭が全く誤りないからではなく、両方が共に同じ方向に向かって間違いを犯すことはないからである。確かに、未来の本は、過去の書物と同じ位に、良い矯正物であろう。しかし、我々は、不運なこ

とに、それらに向かって進まない。(被告席に立つ神 202)

「本物の詩」に対するルイスの認識と関心は、テキストのインテグリティに対するルイスの認識の理解を明瞭にする。「詩」そのものを真剣に考えるリテラシーを拒否したために、書物は、その時代性から語る言葉を失った。メッセージの声を消し、情報を分断する今の時代によって飲み込まれてしまった。ルイスにとっての「リーディング」とは、いつも、少なくとも最初は、テキストの背後の表向きの意図と相談する過程に関係する。著者の意図への探求が、第三章の中心テーマである。

注 記

1. 多くの神学者や世俗的批評家は、過去数十年間、この同じ点を、主張してきた。特に以下の批評家である。ジャック・エリュール (Jacques Ellul), 「技術社会 (The Technological Society)」(New York: Vintage, 1964: 上下, 島尾永庚他訳, すぐ書房, 1975, 1976), 「新しいデーモン (The New Demons)」(New York: Warner, 1979); ウォーカー・パーシー (Walker Percy) 「ロスト・イン・ザ・コスモス (Lost in the Cosmos)」(New York: Farrar, 1983); マイケル・ポラニ (Michael Polanyi), 「知ることと、あること (Knowing and Being)」(Chicago: The U of Chicago P, 1969); フランシス・A・シェーファー (Francis A. Schaeffer), 「理性からの逃走 (Escape from Reason)」(Downers Grove, IL: Inter Varsity, 1969: 有賀寿訳, いのちのことば社, 1971)
 2. ルイスと彼の友人オーエン・バーフィールド (Owen Barfield) との間に交わされた書簡に関するライオネル・エイディー (Lionel Adey) の卓越した研究は、バーフィールドの人智学を論破しようと試みたルイスの認識論的見解の記録である。「C. S. ルイス: オーエン・バーフィールドとの大いなる戦い (C. S. Lewis' "Great War" With Owen Barfield)」(ELS Monograph No. 14: U of Victoria, 1978)。エイディーは次のような見解を述べている。

アレキサンダーと同類の魂 (spirit) の持ち主ルイスは、(エンジョイメントとコンテンプレーションの間の) 区別の方法を、道徳的原則へと変化させた。内住の創造性によるアレキサンダーの命題 (matter) が心を生み出すように、ルイスの「魂 (Spirit)」が、命題 (matter) の中に急速に姿を表し、人間の魂が作品の中に現れる。(原文のまま) 再び、著者の存在と文学の鑑賞には、私たちの感情や感性のエンジョイメントと、私たちの外側にあるオブジェクトのコンテンプレーションの間に相互作用が必要とされる。(32)
- エイディーの結論は次のように述べる。
- 「エンジョイされ」「コンテンプレイトされ」ることのどちらかが、よりリアルであると主張しているわけではないが、「サブジェクト的」や「オブジェクト的」であることよりも文学批評家にとって役に立つ場合もある。
3. C. S. ルイス, 「チャールズ・ウォルター・スタンスビー・ウィリアムズ (Charles Walter Stansby Williams)」The Oxford Magazine, 1945年5月24日: 265
 4. C. S. ルイス, 「我らの時代の失樂園 (Paradise Lost in our Time)」, ダグラス・ブッシュによる改訂版, The Oxford Magazine, 1947年2月15日: 216

5. ルイスに関する論文、「第一と第二のこと：C. S. ルイスの神学的批評 (First and Second Things: The Theoretical Criticism of C. S. Lewis)」(Bowling Green State U, 1978)の著者ドロシー・アン・オールセン (Dorothy Anne Olsen) は、このドクトリンが、ルイスの批評活動の基本ベースであると指摘する。
6. これはモンロー・ピアズリー (Monroe Bearsley) の言葉である。アラステア・ファウラー (Alastair Fowler) の「文学的構築の選択 (The Selection of Literary Constructs)」(New Literary History, 1977年7月:44)からの引用である。
7. 参照：ハンフリー・カーペンターはルイスの詩的趣向の特徴化を行った。「ルイスは、T. S. エリオットの詩のみならず、現代アートの動き全般に深い嫌悪を感じていた。『天路退行 (The Pilgrim's Regress)』のヒーローは、1920年代の芸術形態の不快な特徴を表す、ルイスが考えたアレゴリー的人物の『賢き者たち』の真ん中に上陸する。」(インクリングズの会 (The Inklings {Boston: Houghton, 1979}) 48) ルイスのエリオットの詩への嫌悪が、彼らの個人的関係には拡大しなかった。ルイスの死の直前まで、両者は、詩編の新英語聖書版への翻訳を仲良く行っていた。皮肉にも、エリオットは、ルイスによるチャールズ・ウィリアムズ作品賛美に賛同していた。皮肉と言ったのは、特に、ウィリアムズの「不可解な」詩が、ルイスの嫌悪する「モダニズム」に相似しているという点である。それでもなお、仕事に関しては、ルイスは、エリオットと公の場で頻繁に対立した。参照、「ハムレット：プリンス又は詩か (Hamlet: The Prince or the Poem)」(Selected Literary Essays 66-105)、及び「失樂園研究序説 (A Preface to Paradise Lost)」(1-19)等の本を参照。参照：『失樂園序説』/ C. S. ルイス著；大日向幻訳、叢文社、1981. 7, ISBN : 4794700229
8. フィッシュは、それが、「今まで書いたものの中で最も不幸な文である」と嘆いた。(このクラスにテキストは存在するのか？ 174) 最近のフィッシュは、彼の方法が、相対主義になるわけではなく、「解釈共同体」の中にある善悪の標準を指し示すことになると、論じている。
9. これに関してルイスは、自分自身のリーディングの体験から証言する。「それは、我々がそれを拒否しているシステムであっても、システムの劣った要素から偉大なる教師の方へと目を向ける時は満足を感じる経験となる。私は、それを、普通の『存在主義者から』サルトル (M. Sartre) へ、カルビン主義者から綱要 (institutio) へ、『超絶主義者』からエマーソンへ、『ルネッサンス・プラトン主義』からフィッチーノ (Ficino) への変化と考える。反対する人がいるのかもしれないが、(私は、ここに名を上げた全ての作家に心からの反対の意を表明する)しかし、賛成する人もいることの理由を初めて知る。人は、新しい空気を吸い、新しい国から自由になった。そこは、あなたが住むことのできない国かもしれないが、しかし、あなたは、今、なぜ、その土地の人がそこを愛しているのかを知る。」(天と地の位階への「序説」 12-13) ("Preface" to The Hierarchy of Heaven and Earth 12-13)
10. ルイスのエッセー集や出版書籍を適当に選択してみると明らかなように、以下の作家に関する批評がある。チョーサー、スペンサー、シェークスピア、ダン、パニアン、マロリー、アディソン、オーステイン、シェリー、ドライデン、モリス、キプリング、マクドナルド、もちろん、ミルトンも含まれる。ルイスは中世ルネッサンス文学の学者なので、著書の対象が自分の専門分野について主に書いていることが予想されるのだが、ルイスと同時代の批評家や学者(リーブス、エリオット、チャールズ・ウィリアムズ)が持つ興味や出版対象を考慮にいと、20世紀の作家が無視されている事実はいささか驚きだ。
11. ルイスは批評活動に興味不足だったが、それにもかかわらず、散文や詩に起こっている現代の傾向や実験の認識が明らかであった。ルイスの手紙には、自分が批評を書いている本、特に彼がよく知っている本を何度も勧めている。最近特筆すべきことは、ルイスのアーサー・グリヴスへの手紙をま

とめた書簡集が出版されたことだ。アーサーは、ルイスが50年間近い知己の幼なじみであった。書簡集「共に立つ (They Stand Together)」は、1914年から1942年にかけてルイスが何を読んだのか、彼の日々の読書記録を表している。ルイスにキリスト教信仰の普及者のレッテルをはるステレオタイプ化や (ルイス自身は、{キリスト教信仰の}「翻訳者」の言い方のほうを好んだ)、彼の死後アメリカのファンダメンタルなキリスト者に「捕まった」にもかかわらず、ルイスは、現代神学への幅広い知識を示している。ルイスは、バルトマン (Bultmann)、バース (Barth)、マリタン (Maritain)、テイヤール・ド・シャルダン (Teilhard de Chardin) 等を知っていた。参照：C. S. ルイスの手紙 (The Letters of C. S. Lewis) 130, 160, 171；キリスト教的省察 (Christian Reflections) 12-36, 152-66；被告席に立つ神 (God in the Dock) 201；共に立つ (They Stand Together: The Letters of C. S. Lewis to A. Greeves) 404-05；インクリングスの会 (The Inklings) 109-10。

* 「被告席に立つ神」本多峰子翻訳，新教出版社；ISBN：4400520641

第三章

著者の意図と「個性理論の異端性」

人間的競争をする全ての「クリエイティブなアーティストたち」は、能力不足のためにたった一つの新しい原色や、たった一つの新しいディメンションのファンタズム (幻) を召還することができない。多くの人を知っていることと、さらにもう一人ピックウイックさんについて「考える」ことは別のことである。人間や時間等について改めて「考える」ことは、我々の認知とは単純に異なる行動である。(「創造者の御心 (*The Mind of the Maker*)」に関する批評 248)

I

前章で論証したように、ルイスの文学研究は、テキストそのものへの関心である。テキストの重視とは、著者の意図の含意を意味する。ルイスは著者の意図的要素を、『失樂園』序説 (Preface to *Paradise Lost*) の序論の中で次のように強調した。「コルク抜きから大聖堂にいたるまで、およそ技術をもって作られたものを審査する際の第一資格は、その作品が何であるか、どのような意図で作られ、使用方法は何であるかを知る事である。……『失樂園』に関して、読者が第一に知るべきは、ミルトンの著作意図である。」(1) インテグリティのある作品を取り扱うためには、まず第一に、著者の心の中の判別を試みることである。ルイスは、「著者が実際に書いた詩を読む」ためには、自分で創作した詩の代わりに哲学的知恵が必要であると強調する。もし著者の確かな意図に注意を払うのでないならば、異なる種類の詩を読む事になることは、避けがたいであろうし、少なくとも著者が別の詩を書かなかったことに不平を述べることになるとも、断言する。

この立場は、ルイスが自分の時代をミルトンの的に批評したものである。叙事詩は、控えめに言っても人気のある時代ではなく、叙事詩形態を回復するためにはミルトンの復活が必要であるとルイスは判断した。¹ 「種（叙事詩的物語）に関する誤解を、私は自分を含む批評家の誤謬から知った。『失樂園』の欠陥と時に思える特徴は、かえって詩人が最も苦心して書いた点であり、正しく鑑賞されればこの作品特有の喜ばしさに不可欠なものである。」（『失樂園』序説 2）著者の意図の可能性が、著者自身や彼の作品、歴史的文脈等の比較研究の証言によって、その回復が可能であるので、自分自身のリーディング・ストラテジーの型を作ることによって、読者は、テキストのインテグリティ、つまり文学的レスポンスの中心性を守る助けを得ることができる。周辺的問題より著者の意図のほうが欠くことのできない代表的要素であると、ルイスは考えた。ルイスにとっての著者の意図とは、テキストに対する関心と相補的関係を保ち調和する、解釈上の安定した境界線である。

著者の意図の認識によるテキストの確立に苦心したルイスは、哲学的研究方法の批評アプローチに制限を受けることがなく、テキストの多様な方法を自由に使うことができた。ルイスの批評折衷主義は、多様なテキスト、サブジェクト事項、テクニクに対するルイスの解放性の矛盾を表すのではなく、それらを確認するものである。この点の強調が重要だ。現代の批評家は、それ（ルイスの批評折衷主義が多様なテキストを許容し寛大であることの確認）を、テキストと著者の意図のテンティグリティ、すなわち、短絡的リーディングへの関心、機械的な自動プロセス、前もってパッケージ化されたメッセージの単純なディコーディング（暗号解読）と考える。異なるテキストが異なる種類の反応を要求し、読者も批評家のように自分の方法を調節する必要があると、ルイスは主張した。彼は、解釈方法が唯一のみとする考え方、解釈スタンスがリーディングそのものと同一とする考え方を否定する。²

おそらくルイスは、例えば、初期のミルトン研究「罪に驚いて」からスタンレイ・フィッシュに至る方法に感謝を表明したことであろう。³ ミルトンが「失樂園」の中で「実行した」事の中でもとりわけ、読者に自らの罪深さを納得させたことであり、ルイスのリーディング観と全く一致する内容だと、フィッシュは述べた。ルイスも、人が読書をする間、何か「起きる」、それは、情報の単なる処理を超えた何かであると確信する。テキストが読者に対して「行動」を行うかもしれない。読者を説得し、変更し、感動させるかもしれない。その一方、「自己消費型の作品」の文学批評観を持つフィッシュの総合的スタンスは、「アエネイド (The Aeneid)」「ピグマリオン (Pygmalion)」や「華麗なるギャツビー (The Great Gatsby)」のような作品に対して、同様に適合困難、もしくは、全く適合不可能なのかもしれない。文学全体を、一枚岩的に解釈するアプローチ、一つの物

のように考える見方は、様々な色調の灰色から色のないキャンバスへと、自分自身に対する死刑宣告のようだ。

読者には、原作者の意図の似姿が発見可能であり、テキストそのものに直面する適切な方法の選択が可能になる。著者の意図に反対するニュー・クリティシズム（新批評）の批評家は、最善の動機に促されて運動を起こした。彼等は、テキストから分離した原典探しや著者の心理分析及びテキストの反応を確認するために時間を費やす批評家や善意の一群の批評家から、テキストを救い出そうとした。テキストを、自立的だが、ある程度、自筆的な存在としてテキストの概念化を行い、著者の意図や読者の反応から浄化された存在としてテキストの概念化を行ったニュー・クリティシズムは、その作業それ自体に存在感があった。「オーガニック（有機的）」という用語は、ニュー・クリティシズムの文によく現れる。この用語は、著者の詩が彼の子供のようだというアナロジーに対する、彼等の暗黙の了解を示す。父親のイメージを持つその詩は、著者から独立している。彼は、それに対して「責任」を持たない。⁴ 命題的メッセージを包含しないテキストは、「経験」されることになる。パラフレーズ可能な内容へと分析されることはない。その「意味」は、形態と内容のフュージョン（合体）となる。各々が互いに分離不可能になる。このスタンスは、すでに第一章で述べたように、現代文芸論の多元主義を降り落とす。読者の意図やテキストの生来の曖昧性がリーディング・プロセスを支配する。著者は、作品のコントロールを喪失しているように見える。著者は、読者の意図を意味することができない。著者は、テキストが彼のオリジナルの意図から遊離しないことを保証することができない。

このような批評家たちは、詩が「ロゴス（言われたこと）であり、ポイエマ（作られたこと）」であることを忘れてしまったのか、もしくは、無視している現状に対してルイスは発言した。ルイスの最後の大きな批評作品「批評における一つの実験」は、ルイスのテキスト観、テキストと著者や読者との関係についての見解の詳述だ。「作品は、ロゴス的には、物語を告げる、ある情緒を表現する、人に笑いを熱心に勧める、その申し開きをする、それを描写したり、それを咎めたり、あるいはそれを掻き立てたりする。ポイエマとしては、その持つ聴覚に訴える美しさにより、連続的につながる各部分のバランスや、対比や、統一化された多様性などによって、作品は、一個の〈芸術品 (objet d'art)〉、大きな満足を与えるように形を付与された物となる。」(132)

ルイスは、「『失樂園』序説」で次のように語る。

前者の観点（ロゴス）からすれば、（テキスト）は、意見と感情の表現である。後者（ポイエマ）の観点からすると、それは、ある特定の経験を読者に与える語と語の組

み合わせである。この二面性を別の言い方で言うと、あらゆる詩には両親がある、となるであろう。すなわち、母親とは、詩人の内面における経験や思想などの集合体であり、父親とは、詩人が外界で出会う、すでに存在する形式（叙事詩、悲劇、小説など）である。(3)

ルイスはテキストを、「意味し、かつ、存在する」と考えた。(批評における一つの実験 132) しかし、その意味（ロゴス）とその存在モード（ポイエマ）は、「一つの抽象作用により互いに分離され、その作品が優れていればいるほどこの抽象作用がますます激しいものに感じられてくる。」(132) この抽象作用は、テキストの「喜び」であり、歓喜のローカス（座）、興味、啓蒙の源である。ニュー・クリティシズム（新批評）の批評家は、この「喜び」を、形態と内容のフュージョン（合体）の「経験」の中に発見する。心理学的批評家は、テキスト上の「アイデンティティ・テーマ」に、読者反応批評家は、テキスト内に「コミユナル・コンベンション（communal conventions：共有規則）」を認定し充当することに、脱構築的批評家はテキストの自己再帰性（self-relexivity）の発見に「喜び」を見出す。

しかし、ルイスは、このようなリーディングをリダクティブ（還元論）に近いと考える。ルイスは、我々が文学的喜びについてより詳細である必要があると提言する。「何かが喜びであると言われれば、それが復讐であるのか、バター付き焼きパンであるのか、成功であるのか、憧れであるのか、危険からの救出であるのか、それとも立派な掻き傷であるのか、私には分からない。そこで、文学が与える喜びをただ喜びと言ってはならず、それは文学固有の特別の喜びであると言わなければならない。そして、真の作業の全てはこの〈特有の喜び〉を定義することにむけられなければならないだろう。」(133)

ルイスは、それが、単に「喜び」のローカス（座）としてのテキストの「文学性」だ（ポイエマ）という考え方を排除する。「ポイエマの持つ形が私たちに喜びを与えると主張しても、それがたとえ真実であっても、助けとはならない。〈形〉は、それが部分部分が時間的に順序を保って並べられているもの（音楽や文学の場合のよう）に当てはめられる時には一つの比喩でしかないことを、忘れてはならない。ポイエマの持つ形を楽しむというのは、家や花瓶の持つ〈文字どおりの〉形を楽しむこととは大いに異なる。」(133) ポイエマは自動的なものではない。テキストに固有の何かである。それは、著者が意図した何かの結果である。「ポイエマを構成する部分は、それを受け取る私たち自身が形作るものであって、私たちは、著者が規定した順序に従って、また著者が規定した速度に従って、想像力を用いて色々の物を心に描き、想像された感情や思いを心に描くのである。」(133)

「著者によって指示されたこと」が読者の中で起きる。しかし、それは、著者のプロンプティング（激励）がなければ、「起きる」ことはないのではないか。これは、ある段階では、あまりにも明白であり、常識的なことだと言える。つまり、著者は、あるものをページの上に置く。それによって読者は、何がしかの反応をするように促される。しかし、現代批評による著者への攻撃が、リーディング・プロセスに安定と指示の効力となるのなら、このような事柄を明らかにすることに重要性があると言える。ルイスが考える、テキストを書くときの著者の「行動」は、振り付け師に比肩することができる。「ポイエマは、舞踏（のように）、……、巨匠によって作りだされたものであれば、休止と動き、クイックとスロー、やさしい文章と骨の折れる文章など（から成り立つ）。」(134) だが、テキストのポイエマは、テキストのほんの一つの構成要素である。「ロゴスが文学作品になるのは、そのロゴスがポイエマであることによるのみである。逆に言えば、ポイエマがその調和を打ち立てるときの素材となる。想像されたものとか、情緒とか、思考されたものは、ロゴスによって私たちのうちに掻き立てられ、ロゴスへと向けられ、したがってそういうものはロゴスがなければ存在しないものとなる。」(136) テキストのロゴスとポイエマは、共生関係にある。一方が他方に実体をもたらす。しかし、著者の意図の付随概念がなければ、どちらも意味ある存在とはなれないと考えるのが、リーディング・プロセスに対するルイスの理解の方法である。

ニュー・クリティシズムの批評家は、「プロパガンダ（宣伝活動）」化へとつながる恐れから、命題性と著者の意図を軽蔑した。ルイスは、このような危険がテキストのロゴスとポイエマの区別をすることによって、機先を制するか、もしくは、除去されると考える。「厳密な文学的リーディングの特徴は、科学的リーディング、すなわち、情報を得るためのリーディングに対立した立場にあり、ロゴスを信じることや、それを是認する必要がないという点である。」(136-37) ニュー・クリティシズムにとって煩わしい問題とは、テキスト中ではなく、読者のリーディング方法にあることを、ルイスなら指摘するであろう。読者は、あちらこちらのテキストの中に「プロパガンダ」を見つけるが、その源は、厳密に詩の中にはない。ニュー・クリティシズムは、著者の追放によって批評の混乱の回避ができると考えた。詩は、著者と読者の間のコミュニケーションではなく、詩を「経験」にすることによって、訓練されていない者の偽物のリーディングを低く見積もろうとした。これは、テキストの内的一致（*internal congruence*）に訴える方法であるであろう。しかし、ルイスにとっては、このように提供された自主性（*proffered autonomy*）は、状況を明快にするのでもなく、「さらに良い」リーディングへと高めることもなかった。かえって、問題の焦点をさらに周辺へと、さらに役に立たない立場へと変えていった。

ルイスは、ニュー・クリティシズムの「著者の意図」に対する反対運動が、注意を他に移す誤謬であり、逆効果だと考えた。詩と内的一致の「経験」に焦点をあて（その両方がルイスのカテゴリーのポイエマの中に組み入れられている）詩のロゴスを拒否することは、文学作品の善全体をポイエマ的性質の中に所在確認をすることで、その問題から注意を回避しようとする試みだ。「なぜなら、ポイエマが作られたのは、ロゴスに対する様々な興味から来ている。」(137)

私たちはそうすることによって自己存在の拡大を求める。……私たちは、自分自身の目を持つと同様に、他人の目を見たく思い、自分自身の想像力を持って感じたいと思う。私たちは、ライプニッツ的なモナドであることには満足しない。私たちは窓を欲する。ロゴスとしての文字は、一連の窓、いや一連の窓ですらある。優れた作品を読んだ後で感じるものの一つは〈私は外に出られた〉ということである。あるいは、観点を変えれば、〈私はなかに入った〉ということであって、ある他のモナドのカラを打ち破って入り、そのカラの内側はどんな様子であるかを発見したということである。(137-38)

テキストが著者と読者から分離されたものであり、テキストが自分自身や解釈共同体の単なる反映であり、そして、テキストがテキストのためのものであって「現実社会」の何にも対応しないのであるのなら、ルイス的視点から見ると、テキストはその目的をほとんど果たしていない。テキスト性とは、うわべだけのカテゴリーとなり、互いの意識へと昇華される。これは、私がこれまで論証してきたように、まさに多くの現代の批評家が考える結論である。

ルイスは、著者の意図の問題に関する重要な区別を行う。

意図するのは作者で、意味するのは書物なのです。作者の意図は、それが達成されれば、作者の目から見て成功したと思われるものです。もしもすべての読者、あるいは作者にとって願わしいたぐいの読者の大部分がその書物のあるくだりを読んで笑い、作者がそうした結果に満足を感じずるならば、作者の狙いはおかしみである。すなわち、彼は滑稽を意図していたのです。……意味は、これに比べて格段に困難な用語といえます。アレゴリカルな作品について用いられた場合、意味はもっとも単純です。「バラ物語」においては、ばらのつぼみをつみとることは女主人公を快樂の対象とすることを意味していました。意識的な、もしくははっきりした教訓が作品に盛られている

時には、作品の意味は、かなり容易に把握できます。……私たちは困惑を覚えます。というのはもちろん、こうした書物は今いったことのほかにも多くのことを意味するからです。(別世界にて 56)

次の章では、テキストから意味を構築する際の読者の役割をルイスがどう見ているのかを詳細に検討していく。しかしその前に、テキストに対する「著者の意図」と「読者の意図」を区別するルイスの方法は検証に値する。この区別方法は、E. D. ハーシュ (E. D. Hirsch) の「意味 (meaning)」と「意義 (significance)」にほぼ相当する。ルイスの「意図 (intention)」と「意味 (meaning)」が各々に対応している。著者には、著者自身の叙述、歴史的文脈等への対処によって回復可能な「意図された意味」がある。著者の「意図された意味」から離れることによって、ルイスはテキストの「公的意味 (public meanings)」と呼ばれるものを仮定する。実際の読者がテキストから作りだすもの、ハーシュの「意義」に近い考え方だ。しかし作品を「アレゴリカルな意味について性急に下した憶断」から作品を守る決断をする。(別世界にて 57) ルイスは、現代の作品と昔の作品の両方の批評の中に、この触発性の憶断を発見する。向こう見ずなアレゴリー化への嫌悪感を、ルイスとオックスフォードの彼の同僚 J. R. R. トールキンが共有していた。⁵ 不当にアレゴリー化するこの傾向を持つ批評家に対して、ルイスは最初に次のように警告する。「どのような作品であれ、他の人によってアレゴリカルな解釈を加えられないものはない。……そうする理由を明確にあげた後でなければ、どんな作品にしろ、アレゴリーと見なすべきではありません。」(別世界にて 57-58)

ルイスは「書物の意味に関しては、……著者が必ずしもベストの判定者ではないし、完全無欠な判定者ではけっしてない」(57) ことは容認するが、それにもかかわらず、著者の意図は、彼が造り出すテキストの公的意味のチェック&バランス (抑制均衡) だと断言する。批評家の役割は、「医者が人間をいつまでも生かしておくことはできなくても、なるべく生かしておこうと努力する」ように、「そのような解釈を避けとおすことはできないとしても、それを受け入れる時期をなるべく遅らせること」(57) である。

II

著者の意図に書物の意味を解釈し判定するための境界線や測り縄としての役割があるのなら、著者の意図へのルイスの見解と、一般的な (ルイスの目には、言語道断に映る) 著者の意図をねじる作品の分離を、ルイスは重要な概念と考えた。ルイスは、ニ

ユー・クリティシズム (新批評) と同じように、単なる偽装の心理分析や、著者の創造的プロセスとして仮想上再構築された「著者の意図」に反対した。ルイスの見解では、どちらの概念も作品の解釈に大きく貢献することはないと、考えた。両方が読者に誤解を与え、著者のテキストから著者自身へと注意の焦点を移す。結果的に、ルイスは、「文学に関してフロイト流理論とでもいうべきものをもっており、あなた (作者) のインヒビッション (抑制) について何から何までを知っていると称する」「アマチュアの心理研究家」を公然と非難する。全ての批評家が、「全ての事実を知っているという立場に立って、反論するわけにはいきません。アマチュア心理研究家が発見したと言っていることは、作者の意識にのぼっていないはずなものですから。それゆえ、そんなことはないと作者が力説するほどに、批評家の方が正しいに違いないと判断することになってしまうのです。ただ奇妙なことに、作者が批評家のいうことを認めれば認めるで、それもまた批評家が正しいという証拠になります。」(50)

ルイスは著者の意図をテキストにアプローチする時の貴重な要素だと考えるが、リビジョニスト的思考方法の「アマチュア心理研究家」は、著者の意図の類いを断固と無視する。「物語一般の性質からして、なぜ、物語のその箇所でなければならぬのか、彼等は、そうした必然性を夢にも思わないのです。」しかし、ルイスの見方では、「実際のところ作者の心の中には一つの衝動、形成への衝動があります。何かを作り上げ、形づくり、統一し、浮き彫りにし、対照し、パターンを作ろうというその衝動を、アマチュア心理研究家がおよそ一度も考慮にいれたことがないということはきわめて明瞭です。」(51) ルイスは、次のように喜んで認める。「どの本の場合にも無意識から生じるものは、たくさんあるでしょう。」しかし、「自分の書いた本なら、意識的動機が何なのかを理解しているはずです。偶然に正しい結果となることも否定はできませんが。」(51) 著者の心理に向かうこの旅は、著者が造り出す作品との真剣な対決へと変化する。ルイスは、テキストの内側の探索よりも著者の検証を好む人に対して「文句はない」と語る。しかし、一方を他方と取り違えるべきではないことは当然である。

ルイスは、心理分析が文学批評に取って代わることに強力に反対したように、「書物の構成の想像的歴史」の批評をも軽蔑した。「困った事に、批評家の用語のあるもの、〈靈感を受けた〉とか、〈お座なりの〉とか、〈入念な〉とか、〈慣習的な〉といった言葉は、文ができあがるまでの経過を想像する含みをもっている。私がいま問題にしている批評家の悪徳は、そうした言葉の提供する誘惑に屈することだ。ある書物のどこが良く、どこが悪いかをはっきり告げる代わりに、そうした長所短所に導いた経過について、うそっぱちを作り上げるのだ。」(52-53) ここでも、ルイスが、テキストこそ批評反応の焦点であり、

また、リーディングの中心である、と強調していることは明白である。この点を強調しないのなら、リーディング批評は他の何かになる。他の何か興味深いもの、又は、リーディングと批評に値するが、同じ物ではない、他の何か。「直接には知る由もない作者の心境や執筆の進め方について虚構を書くかわりに、目の前の作品そのものにつねにもっぱら注意を集中して批評を書くということは、堅忍不拔の精神を必要とします。」(54)

近代及び現代の批評家が、陰に陽に、自らを著者と立場を交換し、自分の再構築物を実際のテキストと交換する傾向があるなら、「虚構を書くかわりに」というルイスの台詞は、手応えのある言葉だ。この傾向は、ルイスにとってさらに強力な確証となり、オブジェクティビティの損失、又は、否定が、内的なこと (inwardness) の開始、読者に他人との断絶と読者自身の意識の牢獄刑を宣告する。ルイスが反対する批評の類いとリーディング方法は、この断絶を促進し、その徳性を是認しているように思える。文学を読む時に、「ユニーク」「個性的」「オリジナル」なリーディングを促進する多元的スタンスが、著者の意図とテキストを踏み付けて勝利者となることは明かである。20世紀文学と批評に「ユニークさ」や「オリジナリティ」への盲進を目撃したルイスは、これを大きな問題と考えた。

ルイスが考えるオリジナリティへの衝動とは、新しいものが本質的に真実であり、それがその現場の外観の力で昔の真実や概念と取って代わることができるのだという、暗黙の言明を意味する。ルイスは、ミメシス (模倣) がアーティストの機能の一つであることを理解し、主に「ランプ」ではなく「鏡」としての文学を理解するために、前の時代に同意しようとした。⁶ ルイスは、次のように提案する。「著者は自分を、以前存在しなかった美や知恵の存在を産み出すものと考えべきではない。ただ単純に自分は自分のアートによって永遠の『美』と『知恵』の反映を体現しようとしているだけだ、と理解すべきだ。」(キリスト教的省察 7) マーガレット・ハネイ (Margaret Hannay) は、文学に関して次のように述べる。「中世と現代の見解の違いを (次の部分で) 述べるルイスは、明かにパルチザン的だ。」(18) 「オリジナリティに対する我々の要求を彼らが理解していたかは、疑わしい。もしあなたがラヤモン (Layamon) かチョーサー (Chaucer) に『自分独自の全く新しい話をなぜ作らないのか?』と聞いたとする。すると、おそらく彼らは (実質的に) 『もちろん、我々はまだそこまで落ちていない』と答えていたかもしれない。」(廃棄された中世のイメージ 211)

ルイスは、オリジナリティの追求が、オブジェクティビティ (客観性) の喪失の結果生じたナルシズムという両翼に乗って誕生したと考える。「私」が「汝」の代わりに現れ、その結果、「汝」を根絶する。しかし、ルイスにとってはそうはならない。

詩のアート全体の一番高い部分が、一種の王位剥奪へと変化し獲得された。詩人が見るイメージ全体が深く心の中に入り込んだために、詩人は常道から外れなければならず、海は回転し、山は葉を揺らす、光は輝き、天体は公転する。この全てが、詩となるのであり、あなたが書いている物事が、詩になるのではない。(中世ルネッサンス研究 76-77)

ルイスは、アートと同様に批評に関しても「オリジナリティのためのオリジナリティ」を拒絶した。ルイスは、ジョージ・シュタイナー (George Steiner) の著書「悲劇の死 (The Death of Tragedy)」を評し、シュタイナーを高く評価する。「彼は、新奇さを目的に生きるには極度に善良すぎる。語るに値するような、新しさと真実さが何も存在しない場合、……彼は、我々が既に考えたことを十分に語る事ができることに満足している。」⁷ 批評家と読者が、著者のように「常道から外れる」時、テキストが語る。誇大広告の「オリジナリティ」への忠誠ではなく、テキストへの忠誠が、価値の高い批評と満足度の高いリーディングを可能にする真実の基準である。

ルイスは、「年代順の俗物根性」を拒絶し、伝統への尊敬を強調し、そして歴史に無関心なスタンスが読者を剥奪するのだという考えを主張する。その結果、同時代の輩の中には、特に、I. A. リチャーズ (I. A. Richards) に対抗した「ストック反応 (stock response)」の概念を擁護する者もいる。リチャーズは、文学の「有害」を追跡し、以下のような特徴に至った。

I. A. リチャーズ博士が意味するストック反応という用語は、「経験の直接的自由作用」の代用とされる、意図的に組織された態度である。私の考えでは、このような意図的組織は、人間生活の最初の必需品の一つであり、それを補助することが芸術の主要な機能の一つである。恋愛や友情において節操と呼ばれるもの、政治生活における忠誠心、あるいは一般的に志操の堅固といわれるものは、すべて堅実な美德であり、安定した喜びであるが、これらは選ばれた態度を組織し、単なる直接的経験の永遠的流動 (すなわち「直接的自由作用」) に対抗して、その態度を維持することを重用視する。(『失樂園』序説 54-55)

デリダの「グラマトロジーについて」を英語に翻訳したガヤトリ・スピヴァク (Gayatri Spivak) は、このストック反応が「批評的には、明白なドクトリンを意図しない」イデオロギーであると最近述べた。「それは、むしろ、不正確に区切られた、歴史的に決定される概念、前提、慣例である。一方が、リアルな論理、もしくは、強制された論理によって他方を意図する。この論理は、自明の真理やある状況における自然の行動に対する、常識

という名前で通っている。」(30) スピヴァクと他の脱構築主義者は、衰弱と監禁状態にある西洋のリテラシーの残存の全てを文化から一掃する。

ルイスは、ストック反応へのこの攻撃を、「悪いアート」に対する攻撃以上の何かがあると考えた。ストック反応を「竹馬に乗って高く見せようとする惨めな試み」として利用し、その結果やって来る何かであることをルイスは認める。ルイスは、この攻撃を、客観的価値に対する侵略と見た。「事によっては、愛らしいもの、または、嫌悪すべきものと見られていないなら、全く正しく見られていないことがある。」(52)「より細かい区別と、より大きな個別性という方向に進歩する反応のように、求められているごとくに語る」批評家が、「人間が現在所有している以上に、正常で伝統的な反応を必要としているようには」決して語らない。(55)

問題なのは、「大部分の人々の反応が、充分〈ストックした(決まった)〉反応ではなく、」そして、「安全とか幸福とか、人間の尊厳を保つには、経験の作用が自由で直接すぎる」ことだと、ルイスは考える。(55) 脱構築主義者が、「ブルジョワ的」とか、「陳腐な」という言葉を投げつけ却下したことを、「人間の反応の基本的適格性」だとルイスは擁護する。「けっして〈与えられる〉のではなく、苦勞して習得されるが、やすやすと失われてしまうような、訓練された諸習慣の微妙なバランスである。我々の美德と快樂と、人類の存続さえもこの維持に依存しているのである。なぜなら、人間心情は不変ではない。それどころか、一瞬の中にほとんど見分けがつかぬほど変化する。けれども、因果関係の法則は、不変だ。毒物が盛んに用いられるなら、殺す作用をやめることはないのだ。」(56-57) スtock反応に対する攻撃は、著者反応の概念を却下した批評家や読者にとって苦境の増加を意味する。この概念を離れた時、ストック反応の考え方自体が、意味を失う。「ストック反応」自体が、著者を必要とする。「ストック」反応は、テキストの中のこのような反応に故意に訴える著者と、「ストック」への反応能力、つまり「ストック」の識別能力のある読者を、必要とする。

これは、つまり、ルイスが近代文学及び近代文学が導き出した批評を、強情なほどに激しく嫌悪していることを指す。「ストック反応」の価値を、即座に却下し、客観的価値を無視することで、詩人と批評家は、新しい「ストック反応」、つまり、エリオットが名付けた「オブジェクティブ・コレラティブス (objective correlatives: 客観的相関物)」を発見し、「創造」せざるをえない。この「新たな」ストック反応の構成は、不確実性と曖昧性からなり、豊かな創造性と能力へと詩人を解放する代わりに、クリエイティブという衝動に足かせをはめ束縛する。結果は、単なる新奇さと奇抜さを特徴とする、他の時代やオブジェクティビティ (客観性)、人間精神そのものからも切り落とされた詩が生まれる。

ルイスは、「詩人のためにのみ存在する詩という概念、一般の人々が聞くというより立ち聞きする詩という概念は、批評における愚かな新奇である」と、考えた。(54)「独り言という行為に、特に賞賛すべき点は何もない。実際、自分自身こそが聴衆そのものであって、その前でポーズをとったり、最も念入りな幻惑を与えたりするのか、議論の余地のある所である。」(54)

ルイスは「昔の詩」の位置を並列的に置く。昔の詩は、「あるきまったストック反応を絶えず強調した。例えば、恋は甘いとか、死は苦痛であるとか、美德は立派である、そして子供や庭園は喜ばしいという反応を強調することによって、道徳的市民として重要であるのみならず、生物的にも重要な任務を遂行していた。」ルイスが考える〈昔の批評家〉とは、まさしく、このような人である。「彼らが、詩は『楽しませ、教える』と言ったのは、全く正しかった。詩はかつては各々の新しい世代が適切かつ決まったストック反応をまねることを学ぶのでなく、ただまねることによって、それらの反応をすることを学ぶための主要な手段の一つだった。詩がこの任務を放棄して以来、世界の進歩はない。」⁸ (57) 現代のリテラシーは、読者と著者を、彼らの時代への参加者ではなく、時代に囚われた存在として考える。個性、イデオロギー、歴史的状況の外側の殻を除去することが著者のテキストの心に「真に」浸透する方法にルイスは対抗した。ルイスは、これをまるで次のようなことを勧める言葉のように聞こえると述べた。「復讐の慣例という〈下らない事柄〉を取り除いてから『ハムレット』を研究せよとか、不適當な足を取ったムカデや、尖塔のないゴシック建築を研究せよ。」(64)

脱構築主義の批評家は、世界そのものを一種のテキストと考え、我々、我々読者、我々批評家、全ての人間は、感情、コンプレックス（異常心理）、フィクセーション（病的執着）の明確な形のないものの混合物である。感覚それ自体が、差別的な意識であり、幻想である。つまり、進化発展の偶然の「モード（形態）」である。だから、弁別する存在の「私」、テキストと直面する「私」が存在しない。「私」本人が、一種のテキストとなり、自分が直面している相手との区別が不可能になる。批評を意味する通常用語は、自由裁量と偏向を構成要素に含む概念である。脱構築主義的傾向の強い批評が感じる苦悩や明白な不安は、迷路のような混迷状態の世界と文学観を表す。⁹ 人間性をぼんやりした存在へと平準化することは、テキストから個性的特徴を「剥奪」することにはほぼ等しい。ルイスは自分がすむ時代に批判的な目を向ける。読者が、「自分を越える」ために、他の年代や他の信条の人を、自分と同じ時代の人と同様に「抽象化」へと還元してはいけない。（「自分を越える」ことが、文学を読む主な理由の一つであると、ルイスは考える。）「騎士から彼の鎧をはぎ取る代わりに、騎士の鎧を自分で着ればよい。レースをとった廷臣がどんな風に

見えるかを理解する代わりに、彼のレースを実際に身につけた感覚を理解する方が良い。」
「私ならそうしますよ」とルイスが語った。「私は、ルクレティウス (Lucretius) に、あの信条がなければ、彼はどんな気がしただろうか、と言うよりも、私がルクレティウスの信条を持てばどんな気がするだろうか、そちらのほうを知りたい。私自身の中に考えるルクレティウスの方が、ルクレティウスの中に考える C. S. ルイスよりずっと興味深い。」(64) このように、人生と同様にリーディングに関して、ルイスは次のように勧める。「自分の人間性すべてを享受するため、可能な限り人間が通過してきた感情と思考のあらゆる様式を、常に潜在的に自分の中に持ち、時にはそれを現実化すべきである。」(64)

読者は、著者が創造した世界に目覚め、生き、著者が住む世界を同様に知る事が可能である。読者に与えられたテキストに対してより完全により忠実に対応できる立場にいる。著者の意図、著者がストック反応を教えこむこと、著者と著者の意識の不可侵性、これら全てが、ルイスにとってのリーディング・プロセスの必須の要素である。

我々の計画はまるでちがう。「下らない事柄」の中へ飛び込み、信ずるかのごとくに、その世界を見て、想像の中にその立場を保持しながら、結果的にどのような詩が生ずるかを見ること、そうでなければならない。(65)

III

ルイスが探求した思想の中でも作品を創造する際の芸術家の行動という重要な芸術論の追求がまだ残っている。著者の意図をどう理解するのかに関する議論を行い、ルイスや我々の時代における著者の意図の一般的な範疇に区別した後で、著者と彼の文学作品との関係に対するルイスの理解をさらに説明する必要がある。1930年代後半の公開論争は、後に「個性理論の異端性 (The Personal Heresy)」が上梓された。その中でルイスは、E. M. W. ティリヤード (E. M. W. Tillyard) と、詩の本質をめぐる論争を行った。特に、「全ての詩が詩人の心理状態を表すものなのかどうか」をめぐる議論した。(個性理論の異端性 2)

若い頃のルイスは、ピーター・シャッケル (Peter Schakel) が指摘するように、ティリヤードとの論争では最も生氣溢れる客観的姿勢を展開し、次のように力説した。「オブジェクト (対象, 客観) の強調と、著者によって提示されたオブジェクトを吸収する疑似メカニカル・プロセスとしてのリーディングの強調である。著者と読者のパーソナリティー (個性) は、良いリーディングでは解放され、個人的イメージや含みが著者の描く物事や

概念の普遍性を損なうことがなくなる。」(理性 164) 「批評における実験」を書いた頃の成熟期のルイスが、極端なオブジェクト主義の見解をもはや支持しないのはもちろんだが、少なくとも彼の中に、著者の意図への尊敬の根を見つけることができる。それがテキストの、実質的には、サブジェクティブ・リーディング (主観的読解) の特徴である。

論争の発端は、ルイスが「失樂園」を「ミルトンのパーソナリティー (個性) の表現」だと読む批評家の考え方に疑問を呈するエッセーを書いたことから始まった。つまり、「詩を読む時に追求すべき目的は、詩人の魂との何らかのコンタクト (接触) である。」この結果、「ライフ (生涯) とワーク (作品) は、詩人のパーソナリティーという単一の実体を、二つの異なる表現にする。」(個性理論の異端性 1-2) 特にルイスは、ティリヤードの著作「ミルトン」をとりあげる。「『失樂園』の批評家たちで〈問題〉に〈取り組んでいるように見える〉唯一の批評家たちは、〈まさしく〉サタンを弁護する批評家たちであったと言われている。一遍の詩は、心理を重視する批評家たちがいつも重視する〈問題〉だからだ。さらに、彼らの判断の正しさは見たところ、『ミルトンが感じ、もっとも高く評価したものを、彼らがサタンの性格に付与した』という事実に存するものであった。」(2) その反対に、ルイスの論文が主張しているのは、「詩を詩として相応しく読むときに、私たちの前にあるのは、詩人自身の表象とされるものでもなく、また一人の〈人間〉、一個の〈キャラクター (性格)〉、一つの〈パーソナリティー〉の表象でもない場合が多いということだ。」(4)

ルイスは、詩人のパーソナリティーの表象としての詩を否定するが、それは、詩の「インディビジュアリティ (個性)」を否定しているのではなく、又、ある人が作品の中に詩人の「マーク (印)」を見ることを、ある意味疑問に思っているわけでもない。特定の著者の「スタイル」「アプローチ」「ビジョン」に親しんだ後で、人は、この著者の方法論や世界観を作り出していく。ある人は、ワーズワースの作品を知っているので、詩は「ワーズワース風に聞こえる」と言うのかもしれない。ルイスが聞っているのは、詩人の心理の隠された伝記や無意識の表明としての詩の全作品を読むことから生ずる詩論の流れである。

ルイスの議論は、詩人が詩を創作するときの行動は、詩人との出会いへの招きではなく、彼の詩への招待であると、反駁する。詩人がその詩が書けるのは、実は、詩人が、自分自身や自分のパーソナリティーの表現に留意することをやめたからにはほかならない。ルイスが持ち出した例の一つは、ロバート・ヘリック (Robert Herrick) の詩である。「私のジュリアが絹の衣を着て行く時、そのときこそ、その時こそ、彼女の衣のあの液体のような流れが、なんと麗しいかと、私には思われるのだ。」ルイスは、「衣装の特性に対するほとんど女性的とも言える感受性を生来付与されている、色っぽいが可愛らしいユーモラスな

人間性という発想を、この詩から引き出すことはできる」と、認めるが、しかし、ルイスは次のように主張する。「問題は、これが私の詩的な体験の一部として私に提示されているかどうかということである。……問題は、詩人の性格について私が抱く認識が詩についての私の直接体験の一部であるかどうか、もしくは、それがあとで出て来る、非詩的な結果の一つにしかすぎないものであるのではないか、ということである。」(5) ここでルイスの心配は、詩を読むことに関して「詩的である」とは何なのかの確認である。言い換えると、詩を読む時は、何が「進行しているのか」ということである。ルイスの結論は、起きていることが何であれ、それは、詩人のパーソナリティーを理解していることにはつながらない。「詩人というものは、〈自分〉を見てほしいと諸君に要求する人間ではなく、彼は、『あれを見なさい』と言い、それを指差す人間だ。彼の指が示す方向に目を向ければ向けるほど、〈詩人〉を見るのがますますできなくなってくるだろう。」(11)

著者の意図に対するルイスの理解は、ある種の心理学的伝記の調査による再発見のように、著者が「ほんとうに言おうと意図した」ことの表明ではない。ましてや、作品を読むように、詩人のパーソナリティーを理解することでもない。「著者の意図」の概念は、詩人の視点から見ると、詩人の指差す方向に従うことによって、詩人の見ているものを見ようと試みることである。「物事を詩人が見るように見るためには、私は詩人の意識を共有すべきであって、その意識に、目を向けてはならないのである。私は詩人を一つの光景にすべきではなく、詩人を一對の眼鏡に仕立て上げなければならない。……私は詩人を〈享受〉しなければならないのであって、詩人を〈眺める〉対象にしてはならないのである。」(12) もちろん、詩人の「パーソナリティー」や「自己意識」が、彼らの作品の主題の大きな部分を占める、ロマン主義者たちもいる。しかし、このような主題はパーソナリティーの表現手段としての詩の場合を問題にしていない。

「個性理論の異端性」に対するルイスの攻撃は極めて明瞭であり、それゆえにリーディング・プロセスに対するルイスの考え方を理解することができる。それは、読者を再びテキストへと引き戻す。著者の意図によって明白にされてはいるが、自伝的関心による混乱や詩人のパーソナリティーについての思惑によって阻害されることはない。もしテキストがパーソナリティーの単なる表明であり、「詩が、詩人の心の状態にのみ〈関する〉ものであるのなら」、読者は、真のテキストを再び奪われることになる。そのテキストは、著者とは一致しないオブジェクト（対象物）であり、〈超越〉の手段になりえる。テキストが、ある意味、読者と等しいように、著者と等しいテキストは、オブジェクト（対象／客観）とサブジェクト（主体／主観）の結合による文学研究に韻律の乱れと無目的さをもたらす。残された物は、一種の万有在神論（panentheism）の世界である。そこでは、著者、

テキスト、読者が錯覚を起こす関係の中にある。その関係は、伝統的には、「合意によって」、プロセスの種々の要素を表示する。それらの要素は、実際は一つの存在である。個性理論の異端性が論理的に極端な状態に押し込められていない時に、それは、ある種の批評や「専門家」を必然的に要求する、ある種のリーディングを産み出す。テキストは、読者から取り去られた後、熱心に調査をする伝記作者や、作品を「専門的」に解釈するという心理学者に引き渡された。「普通の読者」は、テキストを読む資格を剥奪された。「それは、人間という生き物からもう一つの特権を奪いとり、さらに何かもっと多くを人間の永遠の僕に引き渡す試みである。我々がそれを幸運や不運であると見なそうとも、事実上、一般的知恵や心の健康以上に確かな〈本質的〉批評資格は、存在しないのだ。」ルイスは、これこそ「運命を決する絶対的要求」であると主張する。(個性理論の異端性 116)

このようにルイスは、本質的なリーディングの経験を、著者自身が書いたテキストとの対立の中に置く。読者が、テキストそのものの中で受けとることができる、著者の意図によって暗に導かれるか、もしくは、著者が、別の超テキストの源の中で提供することのできる形態や情報によって内在的に影響を受けていく。他の経験は、どんなに楽しく、かつ充実感があろうとも、リーディングの本質と取り違えられることはない。詩における個性理論の異端性は、詩と、著者のパーソナリティーの混同からおきる。ルイスは、詩論における個性理論の異端性は、読者のパーソナリティーとの混同、もしくは、読者の共同体の中で広く行われている慣例との混同である。ルイスは、両者を、文学、もしくは、文学研究の真の目的に相反するものとして、熱く反対した。理解への読者の貢献に関するルイスの見解が、第四章の焦点である。

注 記

1. マーガレット・ハネイの論文は、ルイスの修復努力の範囲と内容に関して、徹底的に議論している。「修正：スペンサーとミルトンの理解のために C. S. ルイスが果たした貢献」
2. ルイスは、リーディングと批評活動を注意深く区別する。以前から周知のごとく。
ジョージ・シュタイナーは、著書「困難に関して、その他のエッセー (On difficulty and Other Essays)」(New York: Oxford UP, 1978)にあるように、ルイスのエッセー「テキストとコンテキスト (Text and Context)」の二つの活動を平均化に基づいてこの問題を論じている。「『テキスト』は、直接性 (immediacy) から後退、脚注の竹馬に乗って、重要な個人的認識から、後退する。より基本的、より恥知らずの、リーディングの初歩的情報の伝達。」(9)
3. スタンレイ・E・フィッシュ「罪に驚いて (Surprised by Sin: The Reader in Paradise Lost)」(New York: St. Matins, 1967)
4. 参照、ジェラルド・グラフ (Gerald Graff), 「詩的陳述と批評的ドグマ (Poetic Statement and

- Critical Dogma) (Chicago: U of Chicago P, 1970) 87-111. 「クリアンス・ブルックス：新批評組織 (Cleanth Brooks: New Critical Organicism)」の11章で、この「組織的 (Organic)」テキスト観とその考え方が、作品から著者の分離を招くことを、グラフは論じる。
5. トールキンの有名な作品「指輪物語」は、アレゴリー主義の標的にされた。ルイスは、機会をとらえては、「これは政治的アレゴリーであり、指輪は原爆『である』にちがいないと仮定する」批評家たちを揶揄する。(別世界にて：Of Other World 49)
- ルイス学者のチャールズ・ハタル (Charles Huttar) は、「ナルニアのアレゴリー化の異端：答弁 (The Heresy of Allegorizing Nation: A Rejoinder)」(CSL: The Bulletin of the New York C. S. Lewis Society, 11 [Jan. 1980]: 1-3) において、ナルニア物語に関する同様の批判に対してルイスを弁護した。
- * 「別世界にて：エッセー／物語／手紙」中村妙子訳、みすず書房、1991年。
6. 参照, M. H. エイブラムズ (M. H. Abrams), 「鏡とランプ (The Mirror and the Lamp)」(New York: Oxford UP, 1953) 30-70 等諸処に。
- * 「鏡とランプ：ロマン主義理論と批評の伝統」水之江有一訳、研究社出版、1976年。
7. C. S. ルイス (C. S. Lewis), ジョージ・シュタイナー (George Steiner) の著書「悲劇の死 (The Death of Tragedy)」の改訂版, Encounter, 18, (2月, 1962年): 97
8. ルイスは、序文の中にアリストテレスを引用し脚注を付け論じる。「我々は、やり方を學ぼうとすることを実際に実行してみることで、物事のやり方を學ぶ。」(倫理学 II i)
9. この現象に関して、ジェラルド・グラフは、論文「イエールの恐怖と震え (Fear and Trembling at Yale)」(American Scholar, 46 [1977]: 467-78) において、賢明だが、多少冷笑的な分析を再び行った。グラフは次のように語り始める。「我々は、ほとんど学問的文芸批評の実践と、激しい苦難を関連させることはしない。我々は、学者の批評家を、授業と読書と論文書きの人生のために十分な報酬を支払われている人という考え方をしている。……しかし、まじめな文芸批評家が受けなければならない苦痛と不安、危険と苦悩を思い描くことはほとんどない。批評家の中には、リーディングの危険度のランクを、レーシングカーの運転、飛行機のハイジャックに相当すると考える者もいる。第一級の文芸批評家が健康保険を購入できなくなる日もそう遠くない。『不安』は、『危険』『危機』『アンビバレンス』『苦痛』『盲目』『死』と共に、現代批評を表すキーワードの一つである。」(467)

第四章

読者の再生

批評における実験

詩に関する問いは、長い目で見ても二種類のみ。第一は、詩が興味深く、楽しく、魅力的か。第二は、この享樂が楽しみ、行い、存在しようとする他の全てのものに対して、常にそばに寄添う助け手なのか、それとも、反対に邪魔な存在なのか。(「個性理論の異端性」 119-20)

ルイスが折衷主義の批評家であり、ある一つの範疇やシステムの外側に立つ人間であることは、明白である。ルイスは、相互に排他的と思われる多くの異なる視点から戦略を引いて用いる。テキストのインテグリティに対するルイスの関心の払い方は、ニュー・クリティシズム（新批評）的に思える。伝統と神話に対するルイスの理解は、構造主義者の見解に近い。「著者が意図し、本が意味する」というルイスの提言から、彼が読者反応型の批評家だと結論を急ぐ者がいるかもしれない。ルイスはこれらの多様な方法の光の元に見られてきた人物であることからわかるように、彼が多様な解釈理論からテキストを見ることのできる多彩な批評家であることを指し示す。

以上の主題は前章に至る議論からすでに、予測されていると思われる。文学と文芸論の議論に関して、リーディング・プロセスの一つの構成要素を孤立させることで、他の要素を考慮することなく検証することは簡単な作業ではない。第四章の議論の境界線を適切に設置することは依然として可能である。テキストのインテグリティと著者の意図に対するルイスの考え方について、「テキストに取り組む読者の役割をルイスはどのように理解したのか?」と問いかけることができる。この問いをルイス流の聞き方に変えると、「読者は読書をする時に、何をするのか?」と、なる。この問題にこのように焦点を当てる時、ルイスが問わない問いがある。この時点では、私も問いかけない種類の問いである。「リーディングに関連する心理的プロセスとは何であるのか?」という、認識心理学を追求する問いである。ルイスなら、むしろ手続き上の問題を問うであろう。「読者は、どのようにテキストに反応するのか、もしくは、反応すべきなのか?」

ルイスは、少なくとも10年間、読者反応に対する現代批評の追求と文学の解釈に関して先見性のある見解を書いてきた。ルイスは、彼の最後の批評論文「批評における実験」において、彼の過去の作品において暗黙とされたきた見解にシステムテックな検証を行う。「批評における実験」は、リーディングに対するルイスの批評とアプローチの方法に関する一種の総合的な研究論文である。「批評における実験」では、イージー（Iser）とローゼンブラット（Rosenblatt）が発表した現象学的見解に、時に近いリーディング観を発見するであろう。すなわち、ルイスは、読者とは、著者の意図したテキストに対抗することによって「意味を造り出す」存在であり、文学プロセスへの意図的参加者であると、考えた。読者とテキストのインターアクション（関連）が、特別な美的経験を生む。テキストとは、著者のすでに存在する計画の産物であり、インターアクションとは、著者の「原材料」との関係の意味する。

書物の意味とは、それを読むことによって引き起こされる感情、内省、態度の系列、

またその総体である。……理念的に言うと、虚偽のあるいは誤った「意味」とは、最も愚かな感受性に乏しく、偏見に満ちた読者が一回だけ、ざっと目を通した後にその心の中に生じるものである。これに対し、真実の、正しい読書の「意味」とは、最大多数の、最良の読者が繰り返し丁寧に、何世代かにわたって、読んだ後に（ある程度）その書物から感じ取るもので、時代、国籍、気分、明敏さの度合い、先入主、健康状態、気力その他の因子が融合することによって、いっそう豊かなものを生じえない場合には、これは重要な保留事項であるが、それらを、相殺した結果、得られるものといつてよいでしょう。(別世界にて 56-57)

同時に、棚の上のテキストとは、潜在的には文学ではある。誰かがそれを読む時にのみ文学になりえる。「文学の価値が何であるにせよ、いつ、どこで、良い読者が実際に読むのか、こそ問題だ。棚の上の文学は、単に潜在的に文学である。文学的趣味とは、読んでいない時の潜在性にすぎない。どちらの潜在性も、この一時的経験を除いては、実行に移されることはない。」(批評における実験 104) ルイスが鋭く指摘するように、多くの批評が、特に評価の批評が、この実行されない「リーディング」に基づいている。「通常は、人の読むものによって、その人の文学的趣向を判断する。……このプロセスを逆転し、彼らの読み方によって文学を判断することにも利点があるかもしれない。」(104) ルイスの主張の要点は、名声が獲得され、キャンノン (Canon) が作られる方法が、読者のテキストへの反応方法ではなく、批評家の「文学に付随的な活動」(104) への取組み法による。

批評の重要性に対してルイスが投げかけた問いは、ウォルター・スラトフ (Walter Slatoff) が1970年に上梓した「読者へ、尊敬をこめて (With Respect to Readers)」の見解と似ている。「文学作品は、少なくとも読まれるために存在しており、実際に読むべきである。文学を読む時に何が起こるのかを思考する価値があるのだと、主張を始めなければならないことに、私は自分が少し情けなく感じる。」(5) スラトフは、ルイスの認識と同じ意味で、リーディングの経験とは何であるのかを詳細に述べる。「比較的短かく単純な詩や話を読むことは、まず第一に、一つの行動である。それを読み始めると、その作品はテーブルの上のありきたりの、検査を待っているオブジェクト (物) ではなく、むしろ、それは旅や探検の目的地や地域、時には世界全体になる。」スラトフは、リーディング・プロセスのダイナミックな性質を強調する。「リーディングの時、何かの中へ入っていき、それを通り抜けようとする運動の存在を感じる。普段は期待と、緊張と、弛緩を伴う、多様で、複雑な、豊かな精神と感情の状態の連続という運動が自分の中に起こることがわかる。……それほど多くの方法で自分の意識と関わる経験や、何かが自分の中に進行してい

るという感覚を与えてくれる経験はほとんどない。」(6-7)

このように、テキストへの読者の反応は、ルイスにとっては、テキストの機能だけではなく、読者にとっての価値を理解する鍵となる。ルイスは、彼の時代に評価の高い批評家による作品の正典性の前提に疑問を呈する論文「批評の一つの実験」を上梓した。当時評価の高い批評家は、ある主要な批評家が広めた、ある「原則」の一致に基づいて、書物の価値を判断した。ルイスは、批評家が静止的な基準によって書物を判断するのではなく、彼らが招聘するある種のリーディング方法によって判断すべきであると提案する。ルイスは、「文学的読者」と「非文学的読者」、「少数者」と「多数者」という、二種類の読者に区別し、重要な定義を詳しく説明し、実験を開始した。ルイスの分類内容をチャートにすると理解が容易になる。(2-3)

	文学的読者	非文学的読者
1. 再読	優れた書物を読む者は生涯同じ作品を10回、20回、30回、繰り返して読む。	非文学的人間の確かな印は「もうそれを読んだ」ことを言い訳に、その作品を二度と読まない。
2. 行動としてのリーディング	「文学的読者は、読書をしようとして、余暇と静けさをいつも探し求めている。このような注意力の全部を集中して読書をしようとして、誰からも邪魔されない読書の機会が、ほんの2、3日奪われると、こういう人たちは、心が貧しくなったような気持ちを味わう。」	「多数者グループは、リーディングを重んじない。鉄道旅行に出るとか、無理やり強いられて一人住まいをさせられてそのつれづれを慰めたい時や、〈眠気を誘う〉ために読むといったような時のために、とっておかれる。」
3. 初めてのリーディングとの出会い	「……きわめて重要な体験となるので、この種の体験がどのようなものであるかを、他の体験と比べて見ようとすれば、愛、宗教、死別の不幸といった経験をもってくるほかない。」	「小説や物語を読み終えても、何も起こってないように思える。」
4. リーディングに対する態度	「彼らは、気に入った詩の一行や一節を一人でいると繰り返し咀嚼している。……彼らは、書物について、しばしば、長い時間をかけて仲間同士で話しつづける。」	「非文学的人間は、めったに、リーディングについて考えたり、話すこともしない。」

ルイスは、自分を文学的読者の範疇に入れた上で、次の結論を述べる。「多数者が、冷静な態度で十分に明確な発言をすると仮定する。彼らは、私たち少数者のことを、不適當な作品を好むからではなく、いやしくも書物のことでこんなに大騒ぎをすと言って攻めてくることは、ほぼ間違いない。だが実は、私たちは、そういう人々から見ればどうでもよいものを、自分の幸福に欠くべからざるものとして扱っているだけのことである。」(3)

ルイスが二つのグループに分けたのは、誤った方法と誤読のあらゆる可能性から、文学的読者を放免する意図によるのではない。むしろ、批評界の知識人が誤った範疇と「高尚な」リーディングを行うために二者の相違をしばしば利用するという事実に向け

ためである。ルイスは両者の違いを次のように解明する。ある批評家たちはリーディングから一種の宗教的信念を作り出しているが、ルイスは彼らを「不寝番派」と呼んでいる。ルイスは、「不寝番派」の持つ傾向に対して不快感を表す。「彼らにとっての批評とは、社会的かつ倫理的な衛生手段である。」(124) マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) は、詩が宗教的目的の代用の務めを果たすと考えるが、彼の教えに従う「不寝番派」は、書物の「悪い趣味」の程度をさらに落としていく「無知な大衆」であると判断し、彼らを浄める手段としての「不寝番派」の批評活動を考えた。ルイスは、彼らとは何の関係もない。ルイスは、アートを宗教に持ち上げたり、詩人を祭司としてあがめるような、アーノルドが表明した方法に特に反対する。「さらに多くの人間は、詩というものが、我々の人生を解明し、我々を慰め、我々を支えるために、詩に向かわなければならないことを発見するであろう。詩がなくては、我々の科学が不完全に見えるであろう。宗教や哲学が我々と共に過ぎ去る。」(489) I. A. リチャーズが広めた詩に関する同様の見解に対抗するために、ルイスは、「治療」力や「超自然」力を詩に認める立場を否定する。「この偉大な無神論者(すなわち、リチャーズ)は、効果的かつ満足する生き方を求める人間の力を改良するために心理的な調節を行う方法は詩的趣味の中に存在するが、その反対の悪い趣味は無駄に終わることを見出した。この価値理論は、純粹に心理的機能であり、詩歌に一種の救済論的機能を与える結果になる。そこが、リチャーズ博士が信じている天国への唯一の鍵がある場である。」(キリスト教的省察 12)

このようにルイスは、普通の、非文学的読者の弁護をする。非文学的読者は、文学的読者のソフィストケーションには決して到達しないが、それにもかかわらず、文学的読者の弱点や欠点の一部を回避している。一つには、非文学的読者は、文学的読者がよく犯しがちな間違い、「アート(芸術)とライフ(人生)」を混同する間違いはおかさない。映画に行く「普通の人間」は、映画作品と「知識」を混同することはない。「普通の人は、彼の非文学性のお陰で、両方を混同する間違いから救われる。彼は、映画がほんの一時的な楽しみであって、重要なことなどではないと思っている。彼は、アートがそれ以上の何かを与えてくれるものだとは、決して夢にも思わない。」(批評における一つの実験 76) その一方、「文学的」人間なら、悲劇に「価値があり」、目撃し、読む、価値があるという信念を抱く。それが、主に、悲劇的「見解」「感覚」「人生の哲学」と呼ばれる何かを伝えるからである。(77)

この点が、ルイスが検証する問題の核心になる。文学的読者でも、非文学的読者でも、文学を「受容」する代わりに、文学を「利用」し始めると、どちらも、「悪いリーディング」に陥る。

いかなる分野の芸術作品でも、それは〈受け入れられる〉か、さもなければ〈利用される〉かのどちらかである。〈受け入れる〉場合、私たちは自分の感覚や想像力や他の能力を、芸術家が作り出したパターンに応じて働かせる。〈利用する〉ときは、作品を私たち自身の活動のための手助けとして扱う。……〈利用すること〉が〈受け入れる事〉より劣っているのは、芸術は、受け入れられるよりも利用されれば、それはそれだけ私たちの人生をたんに容易にし、明るくし、その荷を軽くし、また緩和するものになり、人生には何も加えてくれないからである。(88)

書物は、〈利用すること〉と〈受け入れる事〉の両方を確かに促す。冒険好きな読者は、同じテキストから両方を実行する。しかし、ルイスは、書物が一般に促す種類のリーディングに基づいた判断を求めるべきだと、主張する。

その作品がもう一つ別の方法で読まれている事がどうしても見出されないならば、その作品を劣っているものと一応考えても、支障のない立場を与えられていることになる。他方、本文が二段組に印刷され、カバーにはどぎつい下手な絵が描かれた小さな安本が生涯の喜びであって、その作品を一回のみならず、二回も読んだ事があり、その作品のなかの一行でも変えられると、ちゃんとそれに気づいて、異議を唱えるような読者が一人でもいれば、私たち自身がその作品に大したものほとんど見つけなくても、また私たちの友人や同僚たちがその作品をいかに軽蔑しようとも、私たちはこの作品を先ほど言った境界線の外に置くようなことはあえてしないのである。(108)

批評家としてのルイスには、テキストへ反応するこのような「実験」が問題に満ちていることが見える。読者のなかには、宗教的価値のみを目的に書物を読んで来た人や、反対に、性的欲望を満足させることを目的に読書をしてきた人もいるからである。このように、「書物を台無しにするのは、悪いリーディングの存在が原因でなく、良いリーディングの欠如のゆえである。」(113)

ルイスは、一冊の本の価値が、単に、そのポイエマ（作られたもの）か、ロゴス（語られた言葉）かによって決定されるのではなく、その書物が産み出すある種のリーディングが決定要因になると考えるので、評価の批評は不可能に近くなる。彼は、評価の批評が消え去る可能性を悲観していないようだ。彼の時代を席卷した評価の批評の過剰状態は、「全ての重要な連結関係（読者とテキストとの出会い）」が、自然に発生し、自発的に発展

することを妨げていた。ルイスは、批評に対するモラトリアムを呼びかけ、テキストに対するさらに個性的な反応を促す。「はっきり申して、この国の青年たちは、基本的な文学体験がもはや可能でなくなる程度にまで、批評という豪雨によってずぶ濡れにされ、批評の光に目眩めき、批評という悪魔によっていじめ抜かれている有り様である。」(129)

この「基本的な文学体験」は、リーディングに対するルイスの考え方の中心的概念であり、現代の読者反応理論の中心でもある。しかし、ルイスが読者反応理論を語る時、読者が自分で作り上げたテキストではなく、著者によって意図されたテキストが引き起こす反応について語る。ルイスにとってのリーディングとは、著者が読者に期待する役割を読者が演ずることができる範囲の中で読者の同意に基づく、読者と著者との間の契約である。

II

ルイスがここで語る内容を理解する一番良い方法は、ルイスの代表的な批評の一部を検証することである。ルイスの作品の大半が〈矯正〉を目的としている。ルイスはこれを「リハビリテーション (復権)」と呼んでいるが、そうと知ったとして、今となっては驚きを感じない。¹ 多くの点で、ルイスのリハビリテーションは、テキストの公的な「再リーディング」に関している。このリーディングは、現在は人気を失ってしまった方法か、おそらく、元来人気がなかった方法だ。ルイスの初期の書物「愛のアレゴリー (The Allegory of Love)」は、アレゴリーに馴染みのない読者、その主題に適格ではない読者に対して、アレゴリーを分かりやすく解説した試みである。マーガレット・ハネイのルイスに関する論文は、スペンサーとミルトンに関してルイスが行ったリハビリテーション的業績の詳細な研究である。ハネイの結論は、「スペンサーに関するルイスの研究が、スペンサーの詩の『肉』の再評価となる。彼は、スペンサーのモラルアレゴリーを真剣に研究し、イコノグラフィ的研究の方法を『フェリー・クイーン』に最初に応用した研究者の一人である。」ルイスは、ミルトンにも「リハビリテーション」を行った。「ルイスは、ある時期、ミルトンの擁護家として、『失樂園』を異端視する人に反抗すべく一人立ち向かった。ギリシャ人の教父作家たちの中にミルトンに関する問題のドクトリンの前例の存在を発見した学者がいたとする。その存在が昨今発見されたために、ルイスの作品がその地位を奪われたことをルイス本人が知ったとしても、その事実を喜んだことであろう。」(ii) ルイスは、20世紀文学には推薦できるものはほとんどないことを発見し、20世紀より前の多くの文学が誤読、もしくは、読まれていないことを知り、それらにもっと注意や名声を向けることによって、もっと価値のある作品にリハビリテーション的作業を行った。各著者や

作品に個別的な、小規模なリハビリテーションの例が、ルイスの著作「廃棄された宇宙像 (The Discarded Image)」である。その一方、彼の著作「16世紀の英文学」は、16世紀全体の政治、社会、宗教、文学の各雰囲気を同化する試みである。

リハビリテーション (復権) 作業は、ルイスだけに特有の業積ではないのは当然である。〈修復〉は、学問の世界では豊かに行われているが、短編ストーリーの批評家チャールズ・メイ (Charles May) の言葉によると、過剰と言える。「高い評価を受けていない書物の救出を願う、普通的手法を選ぶ批評家は、高い評価を受けている批評の範疇に任せる。もし、その作品が、人相も目立たず、手足も切り落とされた、最悪に荒っぽいかっこをした『適格』者であるのなら、それは、範疇にあてはまるので、価値があると宣言される。特に難かしいケースでは、その作品は、判別不可能なトルソに変形されるだけでなく、プロクルステスの寝台 (Procrustean bed: 融通のきかない画一的方法) にはめられる。」(19) メイは、このケースを過剰に書き立てている。しかし、彼が描く姿は、ルイスのような洞察力を持つ批評家には特に良く見かける構図に見える。ルイスは、文学と対抗する時に、趣向と判断の現存の基準への同意を拒否する。スペンサーやミルトン、シェークスピアやシェリーに関するルイスの作品は良く知られている。しかし、キップリング (Kipling) や H・ライダー・ハガード (H. Rider Haggard) などの詩人や作家に関するルイスの小作品は、ほとんど注目を受けていない。読者反応に対するルイスの関心の高さや、忘れ去られた作品や著者を活性化し再紹介するルイスの方法と、彼の文学観の究極的目的は、何よりも、一種の〈修復〉が適している。ルイスの「実験」が実行されていることを例証するために、ジョージ・マクドナルド (George MacDonald) とウィリアム・モリス (William Morris) の二人の作家に私は誰よりも注目する。

ジョージ・マクドナルドとウィリアム・モリスは、現代の基準では高い地位を与えられた作家ではない。しかし、ルイスは、欠点を埋め合わせるに十分な性質と実際に関連性のある働きを両者に見出し、評価と認識の価値があると感じた。マクドナルドとモリスは、「大衆文学」という不名誉なカテゴリーの中に一般的に入れられている。彼らの作品は、同時代の人々に非常に広く読まれたにもかかわらず、今日の文学史では副次的な存在に置かれている。彼らは現代ではなぜ広く読まれなくなったのか？なぜ批評家は、彼らを見捨てるのか？この疑問に答えることが、〈修復〉戦略のルイスの役目である。第一に、彼らの人気そのものが彼らに歯向かう一撃になったと、ルイスは反論する。ある批評的アプローチによると、人気を得ることは純文学にとっては吊いの鐘になる。このような批評界の動向に対するルイスの予言は的を得ている。

新しい種類の読者と批評家の増殖が見える。彼らにとっての良い文学とは、喜びではなく業績である。彼らは、取得した趣向の元、他の何か後ろ向きに引っ張る力、それに抵抗することにメリットを感じる。このような人々は、悪い本、非常に良い本が中にはあるという言い方に満足はしない。彼らは、中傷、無視、排斥される運命にあるが、時には（彼らが具合の悪い時や、疲れている時）楽しむこともできる「教養の低い」アートに特別な枠つけを行う。人気があるものは、常に悪にちがいないと確定する。人間の趣向は、自然のままでは、悪いものであり、改良や成長が必要とするだけでなく、真の転換が必要だと考える。彼らにとっての良い批評家が、神学者によると「二度生まれた批評家」になるからだ。彼らは、生まれ変わり、〈原趣向 (Original Taste)〉から、洗われた人間である。(リハビリテーション 114)

ルイスが命名した「原趣向」という用語は、ルイスの〈修復〉戦略の理解と批評スタンスを理解する時の重要な概念である。文学的趣向を洗練することは可能であるが、同時に簡単に破壊も招く。学童期の少年がチョコムース用のピュアチョコレートに対する子供のころの渴望を後で単純に捨ててしまうように、チョコレートに対する元々の愛を単純に保ち続けているだけなのかもしれない。読者としてのルイスは、モリス、マクドナルドや、他のビクトリア朝の代表的作家、H・ライダー・ハガード (H. Rider Haggard) やデイビット・リンゼイ (David Lindsay) に夢中になり、喜びを感じた。批評や文芸史の策略を知るずっと以前から、ルイスは、彼らに没頭していた。これらの作家の作品の中に、永遠に残る喜びの性質を発見した。ルイスは、後にこの性質をゼーンズヒト (Sehnsucht, 憧れ) というドイツ語で、簡単に訳すと「ノスタルジア」という意味の言葉で表現した。しかし、現代的言い方では、「ロマン主義」のほうが理解しやすい。

コービン・S・カーネル (Corbin S. Carnell) はロマン主義を「多くの種を持つ天才」と呼んだが、この言葉は、ルイスを奮起させた「ロマン主義的気質の主な性質」を効果的に説明する。

- (1) 理性よりも感情の強調、頭に対して心の強調
- (2) 有限の中に無限を
- (3) 心のあまり意識していないレベルの解放、夢中になって夢みること
- (4) 驚異の感覚のリバイバル
- (5) 曖昧な熱望

ルイスの言葉によると、このモードは「遙か彼方の国への願望」である。この「慰めることのできない憧れ」に対して我々は「ノスタルジー、ロマン主義、春のめざめという名称」によって「恨みを晴らす」。(栄光の重み 6) それを隠そうとするけれども、それができないことを、ルイスは示す。「隠せないのは自分の経験がたえずそれを、ほのめかすからで、ある人の名前が口にされた時の恋人のように、私たちは正体をさらしてしまうのです。……(私たちが願い求めているものの良きイメージだが)物自体ではないのです。それは、わたくしたちが見出すことのなかった花の香りであり、耳にすることのなかった楽の音、一度も訪れたことなどない国からの便りなのです。」(栄光の重み 7) ルイスは、このゼーンズヒト(憧れ)をマクドナルドとモリスの作品の中に見た。ゼーンズヒトは、他者たることへの趣向のほうが創造性の低い文学や「真面目な」文学を超えて勝ることを教える。それは、人間の心との直接的意志の伝達が、理性を超えたテキスト性から分離して存在するように見える。

ルイスが、厳粛なカルビン主義者のマクドナルドや熱心な異邦人のモリスなどの異質の作家の中にこのゼーンズヒトなる性質を発見することができたのは、批評分析におけるルイスの一貫性と客観性に対する敬意の証である。リーディング経験の初期のころ、祝福された改心を受ける前の若き無神論者のルイスは、友人のアーサー・グリヴス(Arthur Greeves)宛てに手紙を書いた。「私は、今週、偉大なる文学的体験をした。さらに新たな作家が私たちのサークル、仲間に加わることを知った。私は、『世界の終わりの井戸』を初めて読んで以来、これほど楽しい読書をしたことがない。実に、私の新しい『発見』が、マロリーやモリスと同じくらいすばらしいと思う。その書物とは、ジョージ・マクドナルドの『妖精ロマンス』の『ファンタステス—成年男女のための妖精物語』である。」(共に立つ：C. S. ルイスからアーサー・グリヴスへの手紙 92)

エイミー・クルーズ(Amy Cruse)の「ビクトリア朝作家とリーディング」の口絵の中に、奇妙な写真がある。そこには、ウィルキー・コリンズ(Wilkie Collins)、アンソニー・トロロープ(Anthony Trollope)、W. M. サッカレー(W. M. Tackeray)、トーマス・カーライル(Thomas Carlyle)、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)の著名な作家たちの中に、ジョージ・マクドナルド(George MacDonald)が写っている。² 現代の学生なら「マクドナルドとは誰なのか?」と疑問に思うだろうが、マクドナルドは当時のベストセラーの作家だった。ゆえにこのような問いはルイスの時代の人々にとって思いもよらないことだ。リチャード・レイ(Richard Reis)は、次のように語る。「マクドナルドの小説は何十万部もイギリスとアメリカ両国で売れた。彼の講演は人気があり、多くの聴衆を集めた。彼の詩は、少なくとも彼の名前は桂冠詩人の考慮の対象に昇った事もある。」マ

クドナルドを敬ったのは、普通の読者ではなかった。「彼の書物は、市場で成功をおさめた普通の人気作家の一般的流行だったのではなく、適格な批評家によって真面目に受け取られず、正義と憐れみと共に忘れさられた点が注目に値する。その当時のマクドナルドは、英国と米国の文学界と宗教界の指導者の中でも中心的な人たちから尊重を受けた。そして、彼は、テニソン (Tennyson)、キングスレイ (Kingsley)、ホームズ (Homes)、トウエイン (Twain)、ロングフェロー (Longfellow) 等の作家たち御一行の仲間として知られていた。」(17-18) しかし、今世紀のマクドナルドの擁護者は数少なく、主に G. K. チェスタトン (G. K. Chesterton)、W. H. オーデン (W. H. Auden)、ルイス (Lewis) などがいる。それに関する批評研究が二種類ある。一つは、上記のトウエイン・シリーズに関するレイ研究と、他方は、ロバート・リー・ウルフ (Robert Lee Wolff) によるマクドナルドのフィクションについての心理分析の解釈である。

チェスタトン、オーデン、ルイスの全員が出した〈好意的批評 (appreciation)〉と〈修復 (reclamations)〉には、共通性が見られる。彼らは、ビクトリア朝作家の世界では明らかに人気のない、マクドナルドの全人生の業績の特徴と作品を賞賛し推薦する。夢見るような創造性や神話のような創造性が、マクドナルドの大人のためのファンタジー、「リリス (Lilith)」と「ファンタステス (Phantastes)」、マクドナルドの最も有名なフェアリー・テールズ、「プリンセスとゴブリン (The Princess and the Goblin)」と「プリンセスとカーディー (The Prince and Curdie)」に見る事ができるが、それこそがビクトリア朝の読者にとっては呪いそのものであった。マクドナルドの多くの読者が好んだのは、これらの作品ではなく、全巻 29 冊のいつも変わらない「リアルな」小説だった。皮肉にも、今世紀マクドナルドに与えられた賞賛のわずかな要素が、自らの作品によって葬られる結末となった。

ルイスは、マクドナルドを 20 世紀の読者に再紹介しようと奮闘し、結果的に二重の使命を担う。第一に、文学界の「大衆小説」に対する生来の偏見を克服すること、第二に、マクドナルドの神話形成の創造性が、マクドナルドの時代に責任を有しているが、その時代の偏見からマクドナルドを奪還することである。ルイスは、マクドナルドの伝記を解説し、ジョージ・マクドナルドの「ファンタステスとリリス」(一冊の本として出版) を紹介する。ルイスは、マクドナルドがスコットランド長老派教会に属する父親から見えない影響を受けているのだという考え方の払拭に努め、反フロイド的スタンスの速やかな明確化をはかる。彼は、他の作家の「解放話」とマクドナルドの場合を区別し、彼の育ち方や教育から顕著な憤りの存在はないことに注目する。(ファンタステスとリリスの「紹介」6) ここで、ルイスは、マクドナルドの作品とその他のビクトリア朝小説の周辺にあるス

テレオタイプを最初から区別しようとする。ビクトリア朝の小説は、宗教教育や抑制された性的願望に対抗するための、軽く偽装した反抗だと考えられている。³

このように語り始めた後、ルイスは、武装解除の宣言を含むマクドナルドの作品へと直行する。「文学の定義を言葉を媒介とするアートとするのなら、マクドナルドには一番上の場所はない。おそらく、二番目の場所もない。」(8) この慌ただしく驚くべき告白の後、批評家たちは、マクドナルドを二流、三流の作家として表面上長い間無視してきた人々の手をもてあそぶ。ルイスの戦略は部分的には、近代の批評家に欠乏しているビクトリア朝の英国を承認することである。このようにして、ルイスは、マクドナルドの際立った特徴を照射することができる。ルイスは、チェスタトンのように驚異のパラドックスの達人である。マクドナルドの散文を「特別目立たない」、「説教壇の悪い伝統」や「非国教徒の饒舌」(8) で満ちたものとして片づけた後、「しかし、これは、文芸批評家のために、彼を処理したわけではない」(9) と、断言した。マクドナルドが作家として偉大なのは、逆説的だが、彼の文学ではなく、彼の神話にある。「ほとんどの神話は有史前に作られた。意識的に、個人によって作られたのではないという感覚を私は持っている。しかし、時にカフカ (Kafka) やノバルス (Novalis) のような天才が近代社会に出現する。マクドナルドは、私が知るなかでもこの種の最も偉大な天才である。」(10)

ルイスは、「マクドナルドを文学の天才という呼称を与えるだけで満足することはできない」だけでなく、「他のどのような分野の芸術にも適」さないと認める。(10) それに代わる新しい範疇としての「神話形成芸術」を作ることによって、ルイスが信じる「できるだけの喜び、そして、(長期の面識において) 最高に偉大な詩人の作品と同じ知恵と力」を伝える事ができる。(10) 忘れてもいいような仕事に公認基準 (accepted criteria) を強要するような偽りの学者とは違い、ルイスは全く新しい翼の建築を提案する。異なる種類の芸術業績の基準の中に余地を発見することを提案する。この業績が何であるのかは、多少不明瞭のままである。しかし、それが何であれ、ロマンティックな創造力に属する。テキストそのものとは区別することのできる神話の速やかな受容と関連する。これらの「本体」、マクドナルドによって「神話的」に伝達された、これらの超テキストの何かが、単なる「理性」とは異なる方法論的原則によって理解されている。「詩における言葉とは体である。『テーマ』や『内容』は魂である。しかし、神話においては、想像された出来事が体であり、表現不可能な何かが魂である。言葉、パントマイム、映画、絵画シリーズは洋服ですらない。まして電話はなおさら超えられない。」(10)

ルイスは、マクドナルドの散文の文体上の弱点に注意を払う。そのような方法によってルイスは、マクドナルドの業績をさらに劇的に強調しようとする。マクドナルドの業績は、

「言葉のアートにおける大きな劣等性と共存する事ができる。」それは「言語との結合が、単に外的な、ある意味、偶発的であることがわかる」からである。(10)「マクドナルドの作品が私に実際的に成したことは、私の創造力を改宗し洗礼を授けたことである」(11)と言うのがルイスにとって精一杯の努力であり、これ以上にマクドナルドに関する経験を説明するためのもっと良いメタファー（隠喩）を考へることができない。ルイスは、テキストの背後や、テキストを超えて見るので、形式主義の文学研究のキャンソンの大半に違反している。直接的には、マクドナルドのフィクシヨソが読者に課す要求を詳細に極限まで述べる。「それは、すでに感じたことを表現する言葉を超えている。かつてない、今まで予測もしたことのない感情を、我々の中に引き起こす。それは、あたかも、我々が意識の通常モードを抜け出し、『我々の誕生に約東されていなかった喜びを所有していた』かのようにであった。」(10)しかし、ルイスの読者とマクドナルドの潜在的読者は、テキストから離れた読み方を決して勧められることはない。反応の中心的目的としての、考慮の対象テキストに対するルイスの関心の大きさは、マクドナルドの散文の集中的で率直なリーディングでは言わず語らず暗示されている。

ルイスは、マクドナルドの〈修復〉の際に、陰に陽にあることを成し遂げた。1) ルイスは、伝統的な批評家の武装解除を行うために、マクドナルドの弱点に関する伝統的批評家の意見に同意する。2) ルイスはマクドナルドの（伝えられている）弱点を取り出し、それを自分の有利な方向に変える。マクドナルドのスタイルには弱点があるが、それにもかかわらずルイスの方法は、マクドナルドの独創的世界と豊かな神話表現というフィクシヨソに伴う達成感を向上させる。3) ルイスは、ある一つの作品を除外しようとするキャンソソの考へ方に異議を唱える。キャンソソそれ自体が、作品の個性的な特徴を内包するほどの度量がない。4) 彼は、キャンソソの再公式をするために懸命の努力を行った。それが、文体上の公式の基準、〈テキストとは何か〉を分析するための基準と言うだけではなく、〈テキストは何を行うのか〉を決める基準を含んでいる。

ルイスは、「大衆受けする」本が良い文学であるわけではない、とおおっぴらに批判した批評界の教条的態度を攻撃した。このルイスの攻撃は、ウィリアム・モリスに関するルイスの研究方法の要素の一つである。「文学の中で最も厳しい理論でさえ、頑固に陽気な作家を永遠に抑圧することはできない。」(文学エッセー選集 219) もしある人がマクドナルドの復権を行うルイスについて、ルイスは実はすでにマクドナルドのキリスト教の世界観を受け入れているのだから、ルイスがマクドナルドに反応するのはあまりにも偏向的で不自然であると、言ったとする。もしそうなら、ルイスがモリスのことを「我々の時代の最も非宗教的詩人」と呼んだが、そのモリスに対するルイスの反応を見るだけで、我々は何

らかの洞察を得ることができる。ルイスは、モリスの中に同じ神話形成の創造性を見出した。それは、各々異なる理由ではあるが、彼がマクドナルドの中にみつけたのと同じ喜びである。ルイスは、弱点をしぶしぶ認める代わりに、彼のエッセーでは最初から攻撃的である。モリスの想定される文体的間違い、つまり、「無知」や「プリアーリ（都市行政官）独断論」（219）の間違いの中世趣味をくどくどと論じた批評家を巧みに回避した。モリスは、批評家の目からは盛りを過ぎた作家だったので、彼を標榜する者に逆ねじをくわせることによって、徐々に弁護を進めた。

ルイスは、例えば、モリスの表現方法への攻撃を、実際は、モリスの「ロマン主義」ではなく、彼の「古典主義」に対する攻撃だと指摘する。モリスの文体は、「一貫して、現代の散文の文体から離れている。簡素の方向へ。……それは、比較できないほどに、簡素で、さらに明確である。どのような『自然な』文体でも、可能性があるが、『おもしろくない終わり方』、レトリックの注意深い拒否、うわべと飾りが、必須である。」(220) テキストの徹底的に詳細なリーディングによって、ルイスは、モリスの文体と中身が、「ロマン主義の大半とは明白に異なり、反ロマン主義的批評には反応を示さない」ことを実証する。(222) モリスが拒絶されていくことは、伝統的なロマン主義への反抗といった、決まり文句で片付けられることではなく、安いパロディーや安っぽい借り物を越えるものが、彼の中に起こっていると、ルイスは力説する。

ルイスは、モリスに対する単なる中世趣味の批判に対抗し、「彼の中世趣味は、一種の偶然である」と、モリスを弁護する。(223) モリスは、生命の自然地域 (*anime naturaliter pagana*) としての中世暗黒時代から、その「暗示」を選び取った。歴史的には不正確だったかもしれないが、彼の想像の世界の基盤となる。「無意識的に小説が支配的な19世紀批評は、自然な設定の中に分析対象の人物を設置しない作品を憤り深く誉めたたえた。」(223) そのために、モリスは、マクドナルドと同様、完全に想像的な作品に対する偏見の犠牲になる。ルイスは、次のように結論する。「モリスを隅に追いやることは不可能であろう。不可能であることを、我々は希望する。彼の世界は、創造された世界だからだ。私たちは、この創造された世界と我々が住む社会が知的に感情的に関連性を持つことを求める。」(224)

モリスとマクドナルドを〈修復〉したルイスのレトリックスタンスの違いは注目に値する。マクドナルドは、わずかにだが批評の注目を受けた。彼のプロットが想像力に欠如し、彼の散文スタイルが凡庸であることが特に批判された。ルイスは、これらの批評の力を認めはするが、彼らの意見を容認することによって、マクドナルドへの関心を、今まで無視されてきた作品のある一面に向ける事ができた。しかし、ルイスは、モリスという作家を、

非常に多くの関心を受けていたにもかかわらず、全く誤った理由により考慮の対象から外された人物という見方をしている。ルイスのアプローチは、モリスを聖者として認めさせることや、「無名時代に、偉大な作家が受けた誤解を与えるようなレッテル」(219) に関してではなく、モリスの評価が高まるのなら、彼を現実の姿のまま、議論の対象にすることができると考えた。反モリス的批評家の偽りの前提を明確化した後に、ルイスは、文学的基準の中にモリスの位置の可能性を探る実質的な証拠へと向かうことができた。その場所は、ルイスがマクドナルドのために提案した場所とはかなり異なっている。

モリスは、異邦人であるという事実にもかかわらず、キリスト者の芸術家のように、不滅の存在への致命的な願望に存在する緊張感の一部を実際的に明確にすることができる。実際のところ、キリスト者の芸術家と全く同様ではないのは当然である。さらに、モリスは、彼の想像的な作品の中で、さらにもっと説得力をもって、成し遂げる事ができる。おそらく、他のもっとリアリスティックなアプローチをとる人よりも。「二つのムード」の間の「均衡」と非道徳性への情熱、このような願望が完全に無実ではないという感覚が、モリスの中で決着が付いていない部分だ。「彼は単純に緊張を与える。」(文学エッセー選集 225) モリスの「緊張」とは、単なる世紀末のペシミズムから生まれたのではなく、不可知論的「ストイック・ロマン主義」を源とする。「彼は、みずからの世界を打ちたたいて単純化された形へと変えることはしない。」(226) モリスのロマンスは、「一時的存在に関する現実的、不変のトラブル」を無視し拒否する現実逃避を反映しているのではなく、「日常生活と、健康と地域の保存」のような、答えることのできない疑問に直面した時に、追求することのできる残された唯一の価値観との直面を表す。ルイスは、モリスの中に、彼を現実逃避者と決めつける批評家に対抗し、見事な堅固さと感性の深さ、つまり、彼を空論主義の現実主義者から遠ざける「現実性」を見出す。モリスは、「一種のロマン主義に内在する毒、そのダンディズムとサブジェクト性、その憐れみに満ちたスローガン『私は他人より小さい』(au moins je suis autre)」(227) を通して見る。モリスは、「全てが堅固」(228) であるために、「重要な政治的問題」に背を向けたと考える、これらの批評家からのあざけりにも耐えることができた。モリスが会話の話題にのぼらないように見えるとするなら、それは、彼が、どのような決断にも身を委ねなかったからである。「モリスのなかには、結論はなかった。」(229)

ルイスは、モリスを闘争陣営の間の取持ちや好戦的キリスト者と確信に満ちた物質主義者の間の一種の仲介者と考え、その結論をエッセーの中で次のように述べる。モリスは「全哲学的宗教の源、自然の徳性と自然の欲望の中にあるジレンマを明晰に述べる」ので、ルイスは、モリスのスポークスマンの価値を検討する。「彼は、その疑問を単純に述べる

だけで満足している。」「否定に対する白状していない偏見はない (no unacknowledged bias to the negative)」ので、自然主義的世界観に関する彼の言葉は、「化学的に純粋」である。(230) この純粋性によりキリスト者は、モリスを預言者として受け入れる。預言者は、神の存在しない宇宙を検証し、コレヘトと共に「全ては空」と宣言する。その反対に、異邦人は、彼の中に神の啓示や出現とは関係なく、人間の知識と人間の憧れの限界を目撃する。モリスに関する結論をルイスは次のように述べる。「モリスの欠けたところに、あらゆる種類の精妙さ、繊細さ、崇高さを列挙することができるが、彼の裏側の意味を探ることはほぼ不可能である。」(231)

モリスを検証するルイスの能力は、マクドナルド研究同様、印象深い。ルイスには、「否定に対する白状していない偏見はない (no unacknowledged bias to the negative)」からである。これは、現代の批評では珍しいスタンスである。このルイスの能力が垣間見えるのが、気質や芸術的能力そして世界観が異なる二人の作家の〈復権〉を目指し、ルイスが手腕を発揮したこの時である。ルイスの見解では、この二人の作者を硬直した規範的伝統のもとでは受容不可能である。マクドナルドは基本的に「非文学的」な芸術の賜物に恵まれていて、モリスの表層的に見える「現実逃避」的作品には、自然主義的世界観の深淵で効果的提示が隠されている。モリスは、ある意味では、彼の行っている事にあまりにも巧妙すぎる。ルイスは、控えめな表現、パラドックス、詳細なリーディング、徹底的に個人的な反応を通して、彼の同時代の読者がこの二人の作者を「読む事のできる」存在へと変え、両作者をテキストそのものに立ち返らせた。

この二人の作家の〈復権〉のために、ルイスは、さらに明快な説明や検証に値する、ある特定の手法やレトリックを指摘する。第一に、ルイスが問題の作品や作家にアプローチする時の最新の批評教義は、常に少し離れたところにある。マクドナルドのケースでは、ルイスは、ウルフ (Wolff) によるマクドナルドの「金の鍵 (The Golden Key)」研究のように、心理分析によるフィクションの解説を行おうとする批評家を即刻却下する。モリスの場合、ルイスは批評界の反発というさらに直接的遭遇を通して一つ一つ対処していった。第二に、その作者を何らかの方法で無視し抑制した強力な正説 (orthodoxy) を指名し孤立させることによって、それにとって代わるパラダイムの概略をルイスは述べ始める。新たなパラダイムはルイスが検証する作家の特別な業績を説明する。ルイスは支配的なパラダイムへの変換には興味がない。問題の作家の不的確さ、能力の欠如を証明するときに、このパラダイムを使う。折衷主義の批評家のルイスは、そのような制度を信頼しない。批評家はある種の安定を与えるが、しかし、批評方法が文学鑑賞とリーディングの楽しさという批評の目的を過小評価しないように、継続的な検証と改訂を受けなければならない。

ルイスは、後者への関心、つまり楽しいリーディングを特に意識している。最終的分析において、一冊の本に付けられた「大人」「現代」「困難」「複雑」といったラベルが、その書物の価値を意味しない。究極的にその本が喜びをもって読まれるのでないのなら、「技術的」、「現実的」であるとか、「空想的」であろうとなかろうと、(主題は、問題ではない)、どんなに多くの批評行動もそれを、価値あるものにすることはできない。ルイスの〈修復〉の中に発見できるものとは、拒否されたテキストのために「働く」特異で風変わりな方法ではなく、むしろ、基本的な批評スタンスである。つまり、全ての支配的な正統性に疑いを持つことと、どのようなジャンル、手段、形態であってもフィクションの受容への解放性があることである。ルイスの信念は、批評は人間のためにあるのであり、人間が批評のために存在しているわけではない。どのようなパラダイムやアプローチであっても、これを忘れるなら、究極的にはあらゆる書物のリーディングを過小評価することになる。批評作品の成功とは、それ自体が喜ばしく楽しいものであるが、しかし、それは控えめな姿勢をとるべきであり、究極的には読者を原文のテキストへ引き戻すことが使命であるべきだ。

III

ルイスの「実験」では、読者をテキストへ戻すことが、あらかじめ計画されている。研究者は「大衆」小説に厳しい批評をする傾向にあるが、大衆小説の重荷を取除くことも、あらかじめ計画されている。文学の学問的研究では、趣向の化石化が行われて来た。ある特定の著者とテキストを無視し、埋葬する批評的アプローチを正統化しようとする。ルイスが明確に目指した批評姿勢は、一種の〈逆・脱構築〉と呼ばれているものである。〈存在〉に対する強い主張へとテキストをシフトする代わりに、ルイスは、そのプロセスを逆転させ、中心的な神話やテーマをテキストの中に据え、テキストが読者の想像力を捉えるようにする。ルイスの〈逆・脱構築〉は、読者を解放し、読者がテキストの「主要な経験」を追求することができるようにする。ルイスは、読者に、アприオリのカテゴリー化の拒否を行うことを要求する。ルイスは、著者と読者を即座に退席させる、アприオリの反応への拒否を促進することによって、「良いリーディング」の成長を期待する。「良いリーディング」とは、最終的に彼の作品を通して反響するテーマ「自己を越える (Self-transcendence)」ためのルイス的方法である。

したがって、正しい読み方は、感情面、道徳面、また知性面での活動の、本質的には

そのいずれでもないが、しかし、それは、これら三つと共通するものを持っている。人を愛するとき、私たちは自己から逃れて互いの存在のなかに入り込む。道徳的な領域では、正義の行為や慈悲の行為は、私たち自身の存在を相手の場のなかに置かせ、このように、他の存在と張り合いがちな私たち自身の個性を超えさせてくれることにもなる。いかなるものでも理解しようとするとき、私たちは、私たち自身にとって事実であるようなものは拒否し、客観的に事実であるものを受け入れようとする。各人の第一に感じる衝動は、自己を維持し、自己を拡大することである。第二に感じる衝動は、自己から逃れ、自己の持つ偏狭さを是正し、自己の孤独を癒すことである。(批評における一つの実験 138)

ルイスのリーディングの目的は、「自己の存在の拡大」に向かう。ただし、それが、ルイスの用語で言うと、「自己中心的な城建設 (egoistic castle-building)」に転落しないように、という条件つきである。自己中心的な城建設のリーディングを産み出す書物は、ルイスにとっては、明らかに質の劣る書物になる。「批評における一つの実験」の結論において、読者プロセスが産み出す概念をルイスが明確に定義している。

文学体験は、個性の持つ特権の基盤を切り崩すことなく、個性の持つ傷を癒してくれる。この傷を癒してくれる情緒は文学以外にもそれこそ多くあるが、しかし、それらは、この特権を台無しにする。こういう情緒のなかでは、私たちの独立した自己は下から掘り崩され、私たちは、この個性のさらに下にある別の個性のなかへと沈み込んでしまうことになる。ところが、優れた文学を読む時、私は一千人の人間になる。しかし、同時に、私自身であり続ける。ギリシャの詩に描かれている夜空のように、私は、無数の目を持って見る。しかし、見るのは依然として私なのである。神への崇拜や、人間への愛や、徳の行いにおいてと同じように、文学において私は自分自身を越える。しかも、このように自己存在を越える時ほど、私が私自身であるときはないのである。(批評における一つの実験 140-41)

ルイスは、ニュー・クリティシズムの内容の貧困さ、脱構築主義的批評家の独我論、スタンレー・フィッシュのような読者反応理論家の放縦性を拒否し、リーディング・プロセスの三要素間にバランスを計ろうとする。一筋の力強い主張がルイスの概念を貫ぬいている。その声が、リーディングとは自己存在を越える行動であると訴える。このようにして、テキストは、安定を保ち続け、著者の意図は、尊重されなければならない、読者は、訓練を

受け、文学の「有益さ」を超えてその「受容」の段階にまで行かなければならない。ルイスの「実験」は、批評計画の要素としての〈読者＝リーディングをしている間の読者〉を回復する。〈いかに〉読者が読むかは、〈何〉を読んでいるのかと、ほぼ同じように重要である。次章において、リテラシーの構成要素に関するルイスの理解を総合的に扱い、現代の批評論へのバランスを回復する上で、彼が果たす役割を提案する。

注 記

1. ルイスは、1939年版エッセー集の「Rehabilitations」の序文を次のように書いた。

人は自分が愛しているものを攻撃されるまでは、賞賛する方向に心動くことはまずない。最初の六作品は、この部分から作品名がつけられたが、各々大小の差や色々な程度の違いはあるが、全てがこのように挑発された。最初の二作品は、ロマン主義への大衆的嫌悪や拒否に対抗し、ロマン主義の詩人を弁護する。第三冊目や四冊目は、ある批評に対抗して、オックスフォードの英文学の現在のカリキュラムを弁護する。第五冊目は、多くの大衆的書物の部分的弁護である。このような書物が、「現実の人生」と同様に、より真面目な文学を楽しむ力を増加したと、私は信じる。しかし、それは、むしろ、現代教育の危険な傾向に対抗するために行った、私心のない文学的喜びの擁護である。私は、全ての楽しい情景が、黒板の壁と「証明書」によって閉鎖されるのではと危惧する。第六冊目は、擁護というよりも攻撃の書物である。しかし、もし私が、アングロサクソンの詩に時に表現される侮辱によって刺激されることがなかったのなら、恐らくそれを書いたりしなかった。
2. リチャード・H・ライス (Richard H. Reis) の「ジョージ・マクドナルド (George MacDonald)」(New York: Twayne, 1972) 17における引用。この記述は、H. Greville MacDonald の「ジョージ・マクドナルドとその妻 (George MacDonald and His Wife)」(London: Allen, 1924) 353にもある。
3. すでに指摘したように、ルイスは、詩歌に作者の心理や個性の顕示があると考える批評のあり方を特に嫌悪する。それは、ルイスの見解では、ルイスの作品を含む文学作品の解釈を歪め、不自然なものにする。参照、ルイスの「心理分析と文芸批評 (Psycho-Analysis and Literary Criticism)」(文学エッセー選集 (Selected Literary Essays) 286-300) と、「現代神学と聖書批評 (Modern Theology and Biblical Criticism)」

第五章

リテラシーの認識論を求めて：

統合

心の進歩を求めて読む詩に、心の向上はない。真の楽しみとは、自発性であると同時に強制的なものである。地の果てを見てはいけない。(「世界の最後の夜」 34-35)

I

本研究は、最初に、現代のリテラシーの不確定な状態と現代批評と理論の間の混乱を指摘した。本小論の論旨は、これら緊急の問題、特にリーディングに対して、バランスと展望のあるアプローチを C. S. ルイスが提供してきた点にある。最後に、この結論の章において、著者、テキスト、読者間の関係に対するルイスの理解を総合し、リテラシーの確かな認識論に対するルイスの貢献を検証していく。

すでに検討したように、批評とは、テキストのリーディングと理解の周辺にあると、以前は考えられていたが、現在は認識論的な迷宮的課題である。書かれたテキストに対するルイス的アプローチの最も注目すべき点とは、それが全く注目されていないという見方ができる点である。プロセスに関するルイスの見解が、現代批評理論の過激な特徴から免れていることは驚くべきことだ。西洋リテラシーのルイスの弁護は、20世紀の前半では実は不必要であった。彼のスタンスが、現代批評のある流れと比較すると、反動的で単純すぎるくらいがあるとすれば、それは、おそらく、彼の〈修復〉が批評方法だけでなく基本的価値や見方に関連するが、現代人はそのことを曖昧にし、ある場合は、廃絶してきた。

これまで述べて来たように、ルイスは、「人間の廃絶」や「歴史上の時代区分について (De Descriptione Temporum)」で述べたように、有害な外側の影響力によって心を惑わされない場合、明確に思考し人間らしい行動をとる男女の、生まれながらの能力に大きな価値を置いた。典型的近代教育に対するルイスの態度は、ルイスの小説「いまわしき砦の戦い」の主人公、マーク・スタドックの記述を見ると明らかである。

彼の教育は、実際に見たものよりも読んだり書いたもののほうが、ずっと現実的に感じさせる奇妙な効果を持っていた。すなわち農業労働者に関する統計資料こそ実体であって、生身の溝掃除人、農夫、農夫の下働きは、すべてその影のようなものにすぎなかった。マークは自分でも気づいていたのだが、仕事の中で「男」や「女」のような言葉を使うことに大きな抵抗を感じていた。「職業集団」「要素」「階級」「母集団」について書くほうを好んだ。なぜなら、マークは、見えぬものの超現実性を、神秘家におとらず固く信じていたのである。(いまわしき砦の戦い 87)¹

現代教育の人間の抽象化傾向については、ルイスも同意見だ。学生を内向きに、具体的な実体の「外側の世界」の拒絶へと向ける。このように、他の人の心、時間、世代の存在

と重要性が縮小化する傾向にある。

反対に、ルイスは、真の教育とは「学生を偏狭さから引き上げるべきものだと、考えた。つまり、学生を『観察者』にし、全てが可能でなくとも『時間と存在』の多くを見て観察者にする。学生は、幼くとも、良い先生（それだけに、相互に意見の合わなくとも）教師によって、過去が現実となった過去に出会うために連れ出される。彼自身の年齢と階級の狭さから連れ出され、もっと公の世界へと連れて行かれる。……文学には、一般化とスローガンの横暴からの解放がある。」（「英語の運命は死か？」121）リテラシーに対するルイスの概念と弁護が何の意味もないのなら、それは、自分自身の時間（time）が、単に過ぎ去る「一つの時間（period）」として見る必要性の目撃者、つまり自分自身の皮膚を離れて他の人の肌と共有する価値の目撃者となる。ルイスがリーディングに対してナイーブでマジカルな見方しかできないと言っているのではない。また、人間が何とか「当然に文法的」つまり「洞察力のある読者」であると信じていると、言っているわけでもない。ルイスはリテラシーの活動、リーディングとライティングを、20世紀における解放に単に必要なプロセスと考えた。

この解放を成し遂げるためには、ルイスは、テキスト本体がリーディング・プロセスの中心でなければならないと信じた。しかし、それを書いた著者、それを読む読者のどちらかを排除したり無視する目的のためではない。むしろ、ルイスは、テキストをリーディングの真の焦点に据えることによって、他の要素との関係を議論するためのオブジェクティビティ（客観性）と堅固な基礎を保持する。この堅固さによって、読者は「一般化とスローガンの横暴から」解放される。著者や読者、実体のない社会力（social forces）をリテラシーの中心に始めるのなら、明白な相対主義が忍び込み、真実の可能性を台無しにする。テキストのライティングとテキストのリーディングは、自己が真実を見ようとする努力を妨げる主観的判断を制限し克服するために必要な、ルイスの基本的な二つの方法である。

II

「我々の時代のリテラシーの理論と実践に関する、このモデルが意味するものとは何なのか」という疑問が残る。リテラシーの健全な認識論へのルイスの貢献を図にし、平凡に見える作文教育から説明を始める。リテラシーへのルイスのモデルが、作文指導への啓発されたアプローチをどのように教えてくれるかを、少しの間考えてみていただきたい。ルイスは、他の頭脳明晰な作家のように簡潔な一種の「アドバイス」を与えることができる。このアドバイスは、典型的作文のハンドブックには「ヒント」や「チップ（役立つ情報）」

のリストが満載である。例えば、あるアメリカ人の生徒が作文の助言を求めてルイスに手紙を書いてきた。ルイスは返事に次のリストを書いて送ってきた。

- (1) ラジオのスイッチを切ってください。
- (2) 良い本を全部できるだけ読む。雑誌の類いは全て避ける。
- (3) 目ではなく、常に耳で書き（そして読む）、声を出して読むか、言葉で語られているかのように、自分が書いている文を全て耳で聞くべきである。もしそれが耳で聞いて美しい音に聞こえないのなら、もう一度書き直す。
- (4) 書いている内容が事実であっても想像上のことであっても、自分が面白いと思うことについて書く。他のことは書かない。（注：これは、あなたが書く事だけに興味を持っているのなら、いつまでたっても作家にはなれない、という意味である。書くべきものは何ももっていないからである。）
- (5) 最大の苦勞を払って、明晰であることに努める。最初のスタート時点で、書き手は自分が何を言いたいのか、その意味を知っているけれども読者はそうではない。著者がたった一つのことであっても間違った言葉の選択をしたがために、読者が全くの誤解に陥ることになる。
- (6) ほんの少しの作業を諦めたとしても、それを捨ててはいけない。（もしそれが希望がないほどに悪くないのなら）それを引き出しにしまって下さい。後で役にたつ事もあるかもしれない。私の最高の仕事の多くを自分が最高と思っているが、実はそれはずっと昔に始めたものだが、その後に諦めてとってあったものの結果なのだ。
- (7) タイプライターは使わない。騒音が、あなたのリズム感を破壊する。そのリズム感を養うために、何年もの訓練が必要なのだ。
- (8) 自分が使う全ての言葉の意味（一つの意味、もしくは、複数）を自分で、しっかり把握していることが大事だ。

(C. S. ルイスの手紙 291-92)

このリストの(1)と(7)は風変わりだが、それらを除くと、これは今日の最も良いライティングのハンドブック（指導書）に一般的に見られる熱心な勧めの言葉である。しかし、健全な作文教育へのルイスの貢献の可能性は、実践的で役にたつ言葉の作成、それ自体は確かに役だつのだが、それを超えて拡大する。ルイスは、昨今人気のあるリテラシーへの「プロセス」化よりもずっと前に、ライティングが「自発的に作り上げる」ための方法、

最近の人気のある語彙によると「問題解決」の方法があることを認めた。² ルイスは、ライティングを自分を知るための手段と考えた。それを、単なる「溢れ出た感性」を「表現する」行動とは考えなかった。ルイスはライティングの宿題の一つを学生のつもりになってやってみた。それは、学生にネクタイの結び方やハサミの定義を言葉で説明させることでその学生の「基本的」英語運用能力を計ることを意図したテストだ。書かれた言語の実用的機能に焦点をおく教師は「遠くへ迷ってしまう」、「綿密に言うと、言語がほとんどなしえないこと決して上手になしえないことだが、複雑な具体的形と運動について我々に教えるからである。」ルイスは我々に次の事を思い出させる。「実生活では自主的に、この目的のために言語を使用することは決してない。我々は、図表を描いたり、パントマイムのジェスチャーを行う。この審査官が実践する演習は、『初級』の言語学的能力テストとは言えない。サーカスの曲芸乗馬の中でも最も困難な技が、初級の乗馬のテストとは言えないのと同様である。」(語の研究 313) 作文が、単なる方法論という見方がされてきたが、もちろん、それは、ある程度は、鉛筆を正しく持ち、アルファベットを記憶するなどに関わることである。知識の習得ではなく学習方法が、究極的には学校のカリキュラムの力を失った部分だ。上記でルイスが風刺したような宿題はあまりにもありふれているが、ライティングとしてのライティングが、人間の人生の、ダイナミックなプロセスとして概念化され、それが単に選択の道具として概念化されるのでないなら、相対的に特に害のない作業となるであろう。

ルイスのライティングとは、授権プロセスである。他人だけでなく、自分自身とのコミュニケーションの手段である。ディスコースの最初の聴衆が常に自分自身である。自分自身とのコミュニケーションは、作文のテキストだけでなく、そのテキストを使用する教室においても十分に明白な真実であるが、多くは看過され過ぎだ。現代の作文教育の下敷きになっている暗黙の仮定の多くは、書き手としての作家が、読者としての自分自身を排除している。債務不履行の作文教育は、すでに我々が検討してきたニュー・クリティシズムのもう一つの遺産に思える。暗黙に少なくとも、ニュー・クリティシズムは、解釈モードと平行的な作文教育を促進し、プロセスそれ自体から分離したライティングのプロダクト(product)へ注意を向ける。このような教育スタンスがもたらした結果、多くの作家が意図の重要性を忘れてしまった。彼らは「ライティング」を行っていることは理解するようになるが、「リーディング」(ある意図をもって読まれる対象)を書いている、すなわち彼らのテキストの意図を誰かが見分けてくれることを意図して書くことの意味がわからなくなっている。³

新米の作家は、「何らかの言葉を自分自身から抽出」し、紙の上に載せるだけで、この

上もない幸せを感じる。自分が書いたものを、自分が良く理解できるのは当然である。文の形態、意図、語彙はすべて自分の選択だからだ。リンダ・フラワー (Linda Flower) によると、このように作られたものは、「作家が、自分に向かって、自分のために書いた表現なので、これは、作家自身の思考活動の記録になる。」(19) しかし、この自己コミュニケーションは、著者以外の読者に対しては、完全には少なくとも接近不可能になる。著者は、読者の役割の中に十分に自分自身を置く事ができないので、テキストの不確定な状態(付随の概念上のギャップ、その非文法性、機能的問題等)を見ることができない。

ルイスはリテラシーを次のように理解している。ライティング修行中の作家は、自分の作り出すテキストのオブジェクト状態を理解しなければならない。自分のテキストを理解するために、リーディングのテキストに持ち込むことのできる意図を「持つ」だけでなく、その意図をテキストのなかに具体化しなければならない。他の読者もそれを認識するために、著者が理解することを理解する。ルイスは、次のように作家に助言を与える。「読者が知りたい内容が語られていない。この事実は簡単に忘れられている。絵の全体像が、あなたの頭の中ではあまりにも明白なので、それが、読者の中では同じように見えてはいないということを忘れている。」(C. S. ルイスの手紙 292) 書き手が注意して見なければならぬのは、テキストが存在論的に書き手から離れた存在なので、書き手以外の読者が書き手の言葉をどう納得するのか、書き手の明白な注意をテキストが喚起するようにしなければならない。

ライティングをダイナミックで超絶的な活動にするために、作家は、自分のテキストを自分から分離したものであることを認識し、そのことを学んでいかなければならない。ルイス流に言うと、自分を「著者と人間」という二人の人物にとらえ直さなければならない。

作者の心の中に、ふつふつと沸き起こってくるのが、……物語の素材だ。私の場合は、必ず心の映像で始まる。この酵母に(韻文、散文、ショートストーリー、小説、演劇、等)の形式への願望がなくては、酵母のままである。酵母と形式の二つがぴったり合うと、著者としての衝動が堅固なものになる。……〈作者〉がこの状態のままである時、〈人間〉としての作者は、全く異なる視点から、その作品を批判しなければならない。作者は、この衝動を満足させることが、彼が望んでいることや、彼がそうすべきこと、人間としてかくあるべきだと思っている、他のすべてのことにはたして適合するものかどうか、と自問することになる。ひょっとすると、全体が、浮ついて、つまらなすぎるので、それに費やされるであろう時間と労力を正当化しないかもしれない。(〈人間〉の視点から、〈作家〉の視点ではない)。たぶん、それは、それを仕上げてみ

ると、非教育的であるかもしれない。……として〈作家〉の衝動は願望であり（それは、かゆい所を書きたいという気持ちに似ている。）もちろん、他の願望のように、全人的見地から批判される必要がある。（別世界にて 36）

ルイスは、独創的な作家かつ学者として、彼自身の文脈の中から語る。しかし、作家に対する彼の概念化は、批評家として、又、彼自身の作品の違いのわかる読者として学校で教えられている類いのライティングの授業と同じ様に应用することができる。〈作家〉は、アイデアを思い付く。そのアイデアを、紙の上に何らかの形体で書き付ける。しかし、それで、作業が全て完了するわけではない。〈人間〉は、その作品を手にし、その作品の目的、明晰性、結束作用に対して判断をくだす。第二の要素が、校正者としての作家、又は、男女としての〈作家〉である。その第二の要素が、作文教育においてしばしば抜け落ちている点を復活し採用しなければならない。自己中心と自己表現のベースから、作者は上に昇り、外側志向の公に認知されたスタンスへと入らなければならない。作者の意図がテキストの解釈に情報を与える助けをするように、聴衆への作者の認知、読者のレトリック的境界が、作者に結束性のあるテキストを作る方法を与えるであろう。「個性異端」に関するルイスの批評を土台に、改訂プロセス（process of revision）の定義を、リンダ・フラワーの「作者主体の散文（Writer-Based Prose）」から「読者主体の散文（Reader-Based Prose）」への移行運動と考えることができる。すなわち、ルイスのこの批評が「詩」や書かれたテキストの理解を「邪魔しない」ための戦略的土台として有効である。⁴ 最初は作者だった者が、自ら読者としての立場からテキストに目をむける。そこで、読者は、作者が見たものを見ることになる。それは、作者その人ではなく、又、作者を写したものでもない。作者、テキスト、読者の役割を明確だが補完的なものにすることが、ディスコースのライティングとリーディングの安定化を目指したルイスの方策である。

ルイスの批評理論をライティングの教育に適応することは、主題から外れているように思えるが、実際、これらの新しいリテラシーは、現代の作文理論と作文教育にまで浸透を始めた。カリキュラムの「基礎」的部分にも、脱構築的理論や読者反応理論の弱体化がさらに進み、その特徴の影響を免れることはなかった。コンポジッション（composition）の批評家の中にも、言語が「心理」や現実をとらえる証言者だという幻想から脱却した目で自分の仕事を考える者がでてきた。教師が生徒のリテラシーを促進するための力や助けとなっていない、単に、明晰性、経済性、洗練性に平凡な関心を払う文化的エリートへと、生徒の奴隷化を進めているだけだという声が、ますます聞こえてくる。

新しいリテラシー・システムのライティング指導の目的は、作者が自分自身の外側で発

見た真理の世界とは異なる世界、作家が自ら創造した「真理」の世界を認識しそこに居住するための準備である。マイケル・フィッシャー (Michael Fischer) は、伝統主義者をこのように批判する。「リアリティーは、文学的ディスコースの『フリープレー』に先行し制限する『超絶的シニフィエ』ではない。それは、むしろ、それ自体が一種のテキスト、又は、言葉の発見であり領域である。」(740) 第一章で述べたように、ライティングにこのような立場をとる人々は、認識論的に真理を作り出すのが言語だと考える排他的かつ過激な批評家との間に共通の根拠を見つける。彼らは、テキストが世界に関して真に語るができないと考え、究極的には、世界それ自体が、名のない社会勢力という腹話術を通して形成された単なるもう一つのテキストだと考える。

ルイスなら、これらの見解をグノーシス思想への後退であると見なすであろう。グノーシス思想とは、ごまかしや間違いから人類を守るのではなく、かえって知識や信念の存在論的な状態にダメージを与え、その間違いに保証を与える。フィッシャー等の批評家はこのような認識をするために、そのような考え方が、いかに文化的条件から抜け出し、それに名前を付け、それを拒否するのかを説明することができない。彼らが生育、条件、適合するものでなく別のものをどのように信じるようになるのか、彼らは説得力のある説明をすることができない。絶対主義の告発に対応するために、批評家は論理や真理の(彼の外側の)標準への彼の信頼を裏切らなければならない。論理や真理は、影響を与えるが、首尾一貫した独我論者を除けば誰からも巧みな抵抗を受けることはない。

リテラシーに関するルイスのモデルは、言語が一つ以上の方法で認識論的に機能することの認識と、リテラシーの認識学におけるこれらの流れに関連した混乱と姿勢の緩和にある。しかし、言語が認識論的に機能するという立場、つまり、真実を「創造する」ための方法としての言語が機能するだけでなく、分類学的、管理的、発見的方法(これが最も重要)における人間のディスコースというルイスの前提から考える立場の者もいる。もっと安定した立場からこれらの機能を考えるために、言語とテキスト性が人間のディスコースとの関係においてどのように機能するのかを、検証しなければならない。

言語は、知識を知り表現するためのただ一つの方法であるが、究極的には感性を働かせ、自己をそれ自体と共に、他人に対しても明白な用語で表現することができ、意識が知覚を識別し達成する手段である。人間社会におけるライティングの展開、すなわち、テキスト性の発展が、知識の取得、知覚、表現を可能にした。テキスト性の到来によって、我々は自己を知るようになった。内的対話を通して、自分自身の発話の声を聞くだけでなく、自分の考えを視覚的シンボルによる再表現によって知るようになった。〈分類学としての言語 (Language as taxonomic)〉は、概念に名称を与え、ディスコースの枠、構造、型を備

える。さらに、この〈分類学としての言語〉は、人間の言語によって何を知るべきか、その内容の形成、支配、表現をするためのモデルを提供し、書き言葉による〈真実の記録 (recording of truth)〉が可能になる。

このようにテキスト性は、意味の探索と分類を行うための、疑問 (inquiry)、審美的距離 (distance)、心の分析的変転 (analytical turn of mind) をもたらす。ライティングは、スピーチ (談話) よりも劇的な方法で自己の超越を可能にする。知識から個人的記憶とテキストを分離することによって、作家は自分自身に対しても第三者になりえる。このように、リーディングは、自己内省と自己超越を招く活動となり、別の自己や知性とのより深い遭遇を可能にする。しかしテキストが作り出す審美的距離があるために、テキストのリーディングは、複雑さと曖昧さに満ちた他人との関係に似てなくもない。〈管理の言語 (Language as managerial)〉とは、コミュニケーターの目的と聴衆に適合する文体用式を選択をすることができるように、聴衆分析の用式を提供し、他の種類の疑問によって発見された知識を効果的に表現する方法による、ディスコースのサポートを指す。書き言葉は、すでに知られた真実の向上を可能にする。

テキストのリーディングは、人間関係の形成に似ている。そこには必ず、曖昧さ、矛盾、不一致に満ちた様々な経験が溢れている。テキストが完全に明瞭では決してありえないことから、リーディングの同時性と通時性両方の問題が起こるが、どちらも人間的問題ではない。マイケル・ポラニ (Michael Polanyi) が述べるように、我々は語る言葉以上の知識を常に持っている。ウォルター・オング (Walter Ong) も同様に考える。「(人間) は、我々が人間を説明しようとするときの言葉以上にもっと簡素な存在だ。私自身を含む、私が知っている全てをどんなに多く説明しようとしても、あなたがたは、私であるとはどういう感じがするのか、それを知ることはできない。私自身は自分自身に対してより簡素で明晰である。説明は単に水の流れを濁す。」(183) 〈認識としての言語 (language as epistemic)〉の使用は、作家が世界に関する彼のモデルを言葉で明らかにすることを可能にする。世界とその関係に意味と目的を与えるフレームワークを明らかにするフィクションとプロットを創造する。しかし、言語は、〈認識的 (epistemic)〉だけでなく、〈発見的 (heuristic)〉でもある。言語は、作者が世界に関する自分のモデルをモデルとして認識することを可能にし、自分の世界が世界であると認識することを可能にする。さらに、言語は、作者がそれを明確に説明し、その自説を曲げず、それを〈評価〉し、日々作者に影響を与える、押し流されることのない現実に対抗してまでも、それを検証することができるようにする。

現代の文学論や作文論の新しいリテラシー観が、人間性の深みと複雑性を個人の人間意

識の概念や、その概念の誇張、急速な自律化に融合させた。各個人の持つ（あるいは、文化社会による）世界経験が全く完全でユニークなために、クロス・ジェンダーやクロス・カルチャー的コミュニケーションのディスコースが致命的な傷を負ったと考えるようになった。トーマス・クーン (Thomas Kuhn) 等のパラダイム主義者の人気や、人間思想システムの測定基準の不可能性 (incommensurability) に関するウォーフ (Whorf) 神話の流行が、世界に関して何が本当に真実なのかを知る発見能力への我々の信頼性にとって代わった。結果的に、彼らは、経験と知識の極限状態を巡る真実を発見し、語り、書くための能力に対して談話者が信頼を損なうように促した。

私が本論文においてルイスの作品から解説した四重の言語機能 (分類的, 管理的, 認識的, 発見的) は、スピーチと書かれたテキストによるコミュニケーションの目的が、自己が自己を越え、他の人の心が真実の追求を可能にすることを目指す。最終的にリテラシーは、一つの逃れの手段を手助けする。ルイスはこれを「絶え間ない自叙伝」と呼ぶ。しかし、ルイスによるリテラシーのモデルは、ナイーブなリアリズムではない。リテラシーは、不確定で偶発的なリアリティー性を認識する。その本質への探求が時にリテラシーに変化を与えることを認める。同時に、リテラシーとは、先験のリアリティーではあるが、それに対する我々の観察とは無関係のリアリティーの存在を肯定的に仮定する。オブジェクトを、シンボルとの一対一の相似関係にあると考えるが、正統的には拒否されている〈わら人形のように当てにならないオブジェクト主義 (strawman objectivism)〉と、そのゴールとしては真実があるが、その一方、人間には自明の知識を得る能力があるという主張を否定する〈ルイスの柔軟オブジェクト主義 (mitigated objectivism)〉を注意深く区別しなければならない。

哲学者ジーン・ブロッカー (Gene Blocker) が述べるように、「我々が人間的視点の『限界』を認めると、思想と行動による世界を完全に作り出すことができるようになるのが、客観的リアリティーの概念である。」(236) 我々の構成概念が捕まえ損ねた客観的リアリティーに言及するために、リアリティーの構成概念を構成概念として認識する。人は、人間的視点の限界を認めるかもしれない。しかし、真実を価値あるものだが、到達不可能なゴールではないと認識しているかもしれない。人は、何かを真実に知るためには全てを知る必要はない。

III

最後に、現代の文芸批評と文学批評家におけるルイスの位置とは何であろうか？ こ

の問いに回答するために、レトリック史の大家ダグラス・エーニンガー (Douglas Ehninger) がレトリック論を分析時に使用した分類方法の検討は有益である。エーニンガーは、レトリックを歴史的に見た時の歴史上の時代を全体的に特色づけるためのレトリック、すなわち、レトリックのシステムを考えることが有益だと述べた。エーニンガーは、これらの区別を次のように行う。基本的に、レトリックには三つの「時代」がある。1) レトリックが基本的に「文法的」な古典期、2) 18世紀以後の、主に「心理学的」ポスト古典期、3) おおまかに1930年以後の基本的に「社会学的」時代。(49-57)

古典期では、レトリック学者が自己意識的に分類的であると、エーニンガーは語る。分類、区分、命名をすることで、学者らは、教育の促進のための区別、分類を探究した。しかしながら、避けがたいことだが、「古典的作家は、前もって加工された材料や様々な用式の表現に依存せざるをえない。公式やいつもの決まりきったできごとにも思わず従っている。このような降伏 (reduction) に生来の能力を持たない事柄にも従う。」(51) 古典期のレトリック学者が分類学に焦点をおいたのに対して、18世紀の「新しい」レトリック学者は、コミュニケーション・アクト (コミュニケーション行動) とリスナー・リーダー (聞き手と読み手) の心の間に関係に焦点をあてた。(52) 18世紀のレトリック学者の方法が人工的なのは、彼らの基準が「理論のみ」であり、「仮定に基づく」方法であり、ディスコースの社会的側面が忘れられているからだ、とエーニンガーは語る。(53) 現代におけるレトリックは、多くの特別に結んだ興味を鎖を組織化する。しかし、これらの全ての鎖が、レトリックを人間関係を促進させるための道具と見る彼らの考え方が底流にはある、という事実の中に統一性を見出す。(53) この社会学的焦点は、究極的には「伝達の歯車」の強調である。(54) エーニンガーは、この社会学的見解を、レトリックの概念化であると批判する。それは、「レトリックのインテグリティを、限界のある学問分野にして、脅かすかもしれない、又は、そのキャラクターを人間的サブジェクトとして保証するこれらの関係を台無しにするかもしれない。」(55) レトリックは極端を避けなければならない、とエーニンガーは語る。それは、このような疑わしい追求を「洋服のレトリック」として仮定する、結果ではなく手段に対して、排他的焦点をあてる。(54)

ここで注目すべき点は、レトリック理論のある特定の側面に、各時代が他を否定してまでも、焦点をあてる傾向があることだ。完璧を主張するレトリックが、同時に、文法的、心理的、社会学的側面にもある。どのような論理的レトリックやリテラシーの理論でも、ディスコースの構成要素 (作家、テキスト、読者、及びこれらの要素が機能する世界) の間にあるせい弱なバランスを叙述する。これこそが、C. S. ルイスが作品を通して証言するバランスであり、私が述べてきたバランスである。ルイスは、ディスコース理論そのも

のを明確に論じることはなかったが、彼の全作品（神学、フィクション、批評）において明白なのは、ディスコースと文学に対して、バランスのとれたアプローチである。これらの文法的、心理的、社会学的なディメンションを当然の前提としていた。

このようなスタンスは、現代では時代遅れのように思える。何か強制的、不自然な感じがする。バランスと均衡の可能性を受け入れる思想家や批評家はほとんどいないからである。自由の名において、リテラシーはその意味を約束する客観的標準から解放された。その結果、ルイスが「オリジナル」の貢献者として、レトリックや文学界の中で大きな名声を得ることにはならないが、彼の著作や論文を、年代的、思想的、（ルイス本人は却下している）「俗物根性」から解放された人々は、喜びと啓発心を持って読み続けるであろう。ルイスの「リーディングのレトリック」は、現代社会において、誤った考えに固執する物や、実を結ばないが、多くの物を中和する解毒剤として存在している。

書かれたテキストが映す、もしくは、捉える「真実」や「リアリティー」がどのようなものであっても、ルイスは、究極的には、「実際の生活」がライティングやリーディングを超えたものからできていることを知っていた。客観的な世界は、個人が世界に实际的に参加し活動するときに、完全に理解されることになった。言葉を聞く者ではなく、言葉を実践する者が祝福を受ける。ランサム、ルイスの宇宙三部作の主人公は、自分自身の心のフィールドの回りをくねくね曲がりながら、「考え」「議論」するだけでなく、実際に行動しなければならないことを、ペレランドラで発見する。彼の悪魔的敵対者と容赦ない言葉の闘いの後で、最後に彼は実際に相手の体にげんこつをくらす。それは、両者が存在する客観的世界に「起こった」行動である。

このように、ルイスは、テキスト性を、つまり、リーディングとライティングの活動を実際の社会への存在の副次的存在と見なす。リテラシーとは、自己内省と自己超越を可能にするだけでなく、それは、他の人々との人間関係の世界への参加を促す。リテラシーの大きな利点は、人が、原著者の文字どおりの存在がなくても、別の魂や心に出合えることである。リーディングの目的が、自己を超え他の人の心にあふれることであるのなら、文学的追求とは、テキストを読者の前に解き明かすことの付属品と見なされる。読者が自分の意識をテキストの上に置くことを歓迎するのではなく、それに抵抗するための手助けを与える。このように、読者は、作者が喚起した世界を経験することができる。ここに、リテラシーに対するルイスのアプローチの統合がある。

〈作者〉は、言語からテキストを作り出す。人種、ジェンダー、階級などの要素に影響を受けた彼の歴史的な時代の文化的文脈からテキストを作り出す。彼のテキスト

は、成功した場合は、作者の意図を反映する。つまり、テキストを構築する時の作者の計画や目的を反映する。作者が対象とする聞き手は、表面上の目的や作者の元来の概念の焦点を見極めることで、それに意味を持った反応ができなければならない。たとえば、作者が、意図的にこのような決断を可能とするテキスト性の伝統的しきたりを損なったとしても、そうしなければならない。いったん、テキストが作者を去る時、それは、作者が意図する以上の（又は、以下の）不注意に（意図的でない）意味を指すことになるのかもしれない。作者の願望や期待以上（又は、以下）を意味することになるのかもしれない。これは、つまり、作者のテキストとは、時に、意図以上の、又は、意図以下の重要性のある存在になりうる。そういう意味で、作者の創造とは異なる読み方をされる可能性がある。

〈読者〉は、リーディングの最中に、確認、疑問、無視された自分自身の期待や見解をテキストに持ち込むことによって、テキストを意図的な表現や作者の心のコミュニケーション的に読む。読者の仕事は、まず最初に、作者が実際に書いたテキストを読んで反応することであり、読者が自らの工夫から作り出したものではない。テキストとは、ロゴス（言われたもの）とポイエマ（つくられたもの）の両方がある。読者は、必ずしも、暗黙の世界観を受け入れることなく、テキストの形や形体に好意的に反応し、それが、うまく作られた作品であると信じなくても、テキストの認知されたメッセージや意図を賞賛できる。

テキストは、作者や読者の意識から離れた客観的実体として存在する。それは、受容者に喜び、教育、感動を与えるものである。しかし、テキストを理解し、反応するための、読者による究極の方法は、テキストそのものによって語られている。作者の意図によって情報が提供される。それは、一つの画一的解釈方法によってではない。テキストの「公の意味 (public meaning)」とは、あるいは、重要性とは、時代や文化によって変化するのかもしれないが、しかし、テキストのオリジナルの存在論的意味は、安定している。歴史的、哲学的研究によって回復可能である。

人は、自分の言語、時代性、ジェンダー、文化的遺産の刻印が認識に与える影響から完全に逃れる事ができないが、その一方、文学的な追求は、その人が偽りを取り去るための助けになる。真理と知識の方向を探る助けとなる。このスタンスの背後にある語られていない前提とは、ライティングによって作者は自分を超え、リーディングによって読者も自分を越えるという同じ経験をする。各々が社会、歴史における自分の場所をよりよく理解することができるようになる。リーディングがもたらす解放的影響に関するルイスの説明

は、これ以上改善する余地がありえない。

自分だけに満足する者は、つまり、完全に自分自身になりきっていない者は、牢獄にいることと同じだ。私の両目は、私にとって十分ではない。私は他人の目を通して見る。リアリティーは、多くの目を通して見たとしても十分ではない。私は、他人が、発明したものを見るだろう。全ての人間の目でさえも、十分ではない。私は、動物が本を書く事ができないことを残念に思う。ネズミやハチは現在何に直面しているのかを知ることができたら嬉しい。それが、犬が運ぶ情報や感情に満たされた臭覚の世界を私が感じ取ることができるとしたら、どんなに素晴らしいことか。(批評における一つの実験 140)

ルイスのキリスト教信仰が彼の文学に与えた影響はそれほど多くは語られていない。ルイスは彼の見解の中心を何世紀もの間人類が共通に有してきた点に元をたどっているが、キリスト教のインパクトはかなり大きいと言える。ルイスのあらゆる批評態度は、常に必然的、存在論的、目的論的、終末論的である。彼の必然的文学論に関して、批評家は人間との関係をテキストだけでなく、究極的な事柄（存在の根拠、意味の座、超越の可能性）との関係から定義する。キリスト者であるルイスにとって文学的な追求とは、明白にそうとわかることはまれではあるが、ある意味、絶えずキリスト教の弁証学を意味する。ルイスが、リーディングとライティングを偏向主義や独我論から救うためにここに存在するとしたら、彼の場合は、究極的には、〈超越的シニフィエ (transcendental signified)〉に基づくことになる。それは、ユダヤキリスト教の伝統が我々に与える三位一体の神、かつて存在し、今も存在する、偉大なるお方、人間の歴史から離れて時を超えて存在するお方、しかし、一度人間の歴史の中に介入し、それに意味を与え、それに、贖いをもたらしたお方を、我々に提示する。

フレデリック・ビュークナー (Frederick Buechner) は、ルイスからの賛同を受けること間違いないであろう。これは、西洋のリテラシーの弁護と祝賀への雄弁なるエピローグになるであろう。

五十年前に書かれた言葉、百年前、千年前に書かれた言葉が、書かれた時と同じ力をもってやって来る。私たちのために、私たちの中へとやって来て、私たちの中をもっと生き生きとさせる。それは、言葉の最後の神秘であり、最後の力であると思う。時間と空間という巨大な距離を超えてきた言葉が、再生の力を失う事は決してない。

それらの言葉が高徳と高潔さを語る時、我々を完全に人間とする条件である真実と霊の優美に我々を近付ける時、リーディングは礼典になる。図書館は神殿のように聖なる場所になる。図書館の中に所蔵されている言葉を通して、神のことが再び肉体となり、私たちの間に住われる。私たちのなかで恵みと真実に満ちあふれる。(181)

注 記

1. 参照、「常識的人間 (common man)」の特徴をルイスは「いまわしき砦の戦い：サルカンドラ」(99-100) の対話で次のように述べる。

愚かな者よ。騙されやすいのは教育を受けた人々だ。我々にとって扱いにくいのは、その他の人々だ。新聞の記事を信じる労働者がいると思うのかね。労働者は、新聞は全て政治的宣伝だと思っているので、見出しの記事は全て飛ばして読んでいるよ。彼が新聞を買うのは、サッカーの試合の結果や、窓から落ちた女の子やメイフラワー街のアパートで発見された死体の小さな記事を読むためさ。だから、彼は問題なのだ。我々は彼を再教育しなければならない。しかし、高級週刊誌を読む教育を受けた人々は、再教育が必要ではない。彼らはもうすでに大丈夫だ。彼らは何でも信じてしまう。

2. コンポジッション (作文) 教育の最近の理論と実践の簡単な歴史、特に「プロダクト」中心の教育から「プロセス」中心の教育方法へのシフトについては、拙著「作文教育へのタグミームの貢献 (The Tagmemic Contribution to Composition Teaching)」(Manhattan, KS: Kansas State U, 1979) : 4-24 と、ジャネット・エミグ (Janet Emig) の研究論文二冊、「12年生の作文プロセス (The Composing Process of Twelfth Graders)」(Urbana, IL: NCTE, 1971) と「発見モードのライティング (Writing as a Mode of Discovery)」(College Composition and Communication 28 {1977}: 122-28) がある。
3. 参照、バリー・M・クロール (Barry M. Kroll), 「作家と読者の補完的役割 (Writer and Reader as Complimentary Roles)」(ERIC, 1977) 17 (ED 150 568) と、ミーナ・ショネシー (Mina Shaughnessy), 「間違いと期待 (Errors and Expectations)」(New York: Oxford UP, 1977), chapters 1-4
4. リンダ・フラワー (Linda Flower), 「作者中心の文：ライティングの問題解決への認識論的基礎 (Writer-based Prose: A Cognitive Basis for Problems in Writing)」(College English 41 {1979}: 19-37)

引用文献

A - 1. C. S. ルイスの作品

1. 「人間の廃絶 (Abolition of Man)」New York: Macmillan, 1973
2. 「あつかましい何かの後で (After Priggery-What)」The Spectator 7 Dec. 1945 : 536
3. 「愛とアレゴリー (The Allegory of Love)」Oxford: Oxford UP, 1973
4. 「アーサー王に関する未完詩集 (Arthurian Torso)」Grand Rapids: Eerdmans, 1974
5. 「子どものための本 (Books for Children)」Times Literary Supplement 28 Nov. 1958: 689
6. 「チャールズ・ウィリアムズ (Charles Walter Stansby Williams: 1886-1945)」The Oxford Magazine 1945年5月24日 : 265

7. 「キリスト教的省察 (Christian Reflections)」 ウォルター・フーパー編集, New York: Harcourt, 1977
8. 「暗黒塔とその他のエッセー (The Dark Tower and Other Stories)」 ウォルター・フーパー編集, New York: Harcourt, 1977
9. 「言葉の死 (The Death of Words)」 The Spectator 1944年9月22日: 261
10. 「権力の廃位 (the Dethronement of Power)」 J. R. R. トールキン著「二つの塔」と「指輪物語」の改訂版, Time and Tide 1955年10月22日: 1373-74
11. 「廃棄された宇宙像—中世・ルネッサンスへのプロレゴメナ (The Discarded Image)」 Cambridge: Cambridge UP, 1974
12. 「16世紀の英文学 (English Literature in the Sixteenth Century)」 London: Oxford UP, 1973
13. 「チャールズ・ウィリアムズ献呈論文集 (Essays Presented to Charles Williams)」 C. S. ルイス編集, Grand Rapids: Eerdmans, 1966
14. 「批評における一つの実験 (An Experiment in Criticism)」 Cambridge: Cambridge UP, 1969
15. 「シダの種と象 (Fern-Seed and Elephants)」 Glasgow: Collins/Fountain Books, 1977
16. 「四つの愛 (The Four Loves)」 New York: Harcourt, 1960
17. 「本物のテキスト (The Genuine Text)」 Times Literary Supplement 1955年5月2日: 288
18. 「ジョージ・マクドナルド, アンソロジー (George MacDonald, Anthology)」 C. S. ルイス編集, New York: MacMillan, 1973
19. 「被告席に立つ神 (God in the Dock)」 ウォルター・フーパー編集, Grand Rapids: Eerdmans, 1970
20. 「神の帰還 (The Gods Return to Earth)」 J. R. R. トールキン著「指輪の仲間たち」の改訂版, Time and Tide, 1954年8月14日: 1082-83
21. 「天国と地獄の離婚 (The Great Divorce)」 New York: MacMillan, 1973
22. 「悲しみを見つめて (A Grief Observed)」 London: Faber, 1973
23. 「快樂論 (Hedonics)」 Time and Tide, 1945年6月16日: 494
24. 「ファンタステスとリリスへの序 (introduction: Phantastes and Lillith)」 ジョージ・マクドナルド作, Grand Rapids: Eerdmans, 1964
25. 「英語は破滅か? (Is English Doomed?)」 The Pectator, 1945年2月11日: 121
26. 「王の書 (The King's Quair)」 Times Literary Supplement, 1929年4月18日: 315
27. 「さいごの戦い (the Last Battle)」 New York: MacMillan, 1973
28. 「C. S. ルイス書簡集 (Letters of C. S. Lewis)」 W. H. ルイス編集, New York: Harcourt, 1966
29. 「あるアメリカ婦人への手紙 (Letters to an American Lady)」 クライド・S・キルビー編集, Grand Rapids: Eerdmans, 1967
30. 「神と人間との対話—マルカムへの手紙 (Letters to Malcolm: Chiefly on Prayer)」 New York: Harcourt, 1964
31. 「キリスト教の神髄 (Mere Christianity)」 New York: MacMillan, 1954
32. 「目覚めている精神の輝き (A Mind Awake)」 クライド・S・キルビー編集, New York: Harcourt, 1969
33. 「偉大なる奇跡 (Miracles: A Preliminary Study)」 Glasgow: Collins, 1974
34. 「物語詩 (Narrative Poems)」 ウォルター・フーパー編集, New York: Harcourt, 1972
35. 「道に関するメモ (Notes on the Way)」 Time and Tide, 1942年6月27日: 519-20
36. 「道に関するメモ (Notes on the Way)」 Time and Tide, 1943年9月4日: 717

37. 「道に関するメモ (Notes on the Way)」 Time and Tide, 1946年6月1日: 510-11
38. 「道に関するメモ (Notes on the Way)」 Time and Tide, 1946年11月9日: 1070-71
39. 「別世界にて: エッセー/物語/手紙 (Of Other World)」 ウォルター・フーパー編集, New York: Harcourt, 1966
40. 「ヴィーナスへの旅: ペレランドラ金星編 (Perelandra)」 New York: Macmillan, 1973
41. 「個性理論の異端性 (The Personal Heresy with E. M. Tillyard)」 London: Oxford UP, 1939
42. 「天路退行 (The Pilgrim's Regress)」 Grand Rapids: Eerdmans, 1974
43. 「詩 (Poems)」 ウォルター・フーパー編集, New York: Harcourt, 1977
44. 「詩と解説 (Poetry and Exegesis)」 ハロルド・ブルーム作「幻想の友 (The Visionary Company)」の改訂, Encounter 20 (1963年6月): 74-76
45. 「D. E. ハーディング作, 天国と地球のヒエラーキーへの序文 (Preface. The Hierarchy of Heaven and Earth, by D. E. Harding)」 London: Faber, 1952
46. 「『失樂園』序説 (A Preface to Paradise Lost)」 London: Oxford UP, 1974
47. 「個人的不和 (Private Bates)」 The Spectator, 1944年12月29日: 596
48. 「痛みの問題 (The Problem of Pain)」 New York: Macmillan, 1973
49. 「上品さと哲学 (Prudery and Philology)」 The Spectator, 1955年1月21日: 63
50. 「詩編を考える (Reflections on the Psalms)」 New York: Harcourt, 1958
51. 「修復 (Rehabilitations)」 London: Oxford UP, 1939
52. 「ジョージ・シュタイナー著『悲劇の死』の改訂 (Rev. of The Death of Tragedy, by George Steiner)」 Encounter 18 (1962年2月): 97-101
53. 「ドロシー・L・セイヤーズ著『造り主の心』の改訂 (Rev. of The Mind of the Maker, by Dorothy L. Sayers)」 Theology 43 (1941年10月): 248-49
54. 「ダグラス・ブッシュ著『我等の時代の失樂園』の改訂 (Rev. of Paradise Lost in Our Time, by Douglas Bush)」 The Oxford Magazine, 1947年2月13日: 216
55. 「悪魔の手紙 (The Screwtape Letters)」 New York: Macmillan, 1967
56. 「悪魔の演説 (Screwtape Proposes a Toast)」 Glasgow: Collins/Fontana Books, 1974
57. 「C. S. ルイス文学批評選集 (Selected Literary Essays)」 ウォルター・フーパー編集, Cambridge: Cambridge UP, 1969
58. 「スペンサーの人生像 (Spenser's Image)」 アラステア・ファウラー編集, Cambridge: Cambridge UP, 1967
59. 「中世・ルネッサンス文学研究 (Studies in Medieval and Renaissance Literature)」 ウォルター・フーパー編集, Cambridge: Cambridge UP, 1979
60. 「語の研究 (Studies in Words)」 Cambridge: Cambridge UP, 1979
61. 「喜びのおとずれ (Surprised by Joy)」 New York: Harcourt, 1955
62. 「いまわしき砦の戦い: サルカンドラ地球編 (That Hideous Strength)」 New York: Macmillan, 1973
63. 「共に立つ (They Stand Together)」 ウォルター・フーパー編集, New York: Macmillan, 1979
64. 「愛はあまりにも若く: プシュケーとその姉 (Till We Have Faces)」 Grand Rapids: Eerdmans, 1972
65. 「朝びらき丸 東の海へ (The Voyage of the Dawn Treader)」 New York: Macmillan, 1973
66. 「栄光の重み (The Weight of Glory)」 ウォルター・フーパー編集, New York: Macmillan, 1980
67. 「世界の最後の夜 (The World's Last Night)」 New York: Harcourt, 1960

A-2. 上記 C. S. ルイスの作品：日本語出版物

3. 「愛とアレゴリー」玉泉八州男訳, 筑摩書房, 1972
8. 「暗黒塔」野間真理訳, 「幻像文学」第12号所収, 1985
11. 「廃棄された宇宙像—中世・ルネッサンスへのプロレゴメナ」山形和美他翻訳, 八坂書房, 2003
14. 「批評における一つの実験」山形和美訳, 評論社, 1963
16. 「四つの愛」蛭沼寿雄訳, 信教出版社, 1977
19. 「被告席に立つ神」本多峰子訳, 信教出版社, 1998
21. 「天国と地獄の離婚」柳生直行訳, みくに書店, 1966
22. 「悲しみを見つめて」西村徹訳, 信教出版社, 1973
24. 「ファンタステスとリリスへの序」
「ファンタステス」蜂谷昭雄訳, ちくま文庫, 1999/「リリス」荒俣宏訳, 筑摩書房, 1986
27. 「さいごの戦い」瀬田貞二訳, 岩波書店, 1986
30. 「神と人間との対話—マルカムへの手紙」竹野一雄訳, 信教出版社, 1995
31. 「キリスト教の神髄」柳生直行訳, 信教出版社, 1977
32. 「目覚めている精神の輝き」中村妙子訳, 信教出版社, 1982
33. 「偉大なる奇跡」本多峰子訳, 信教出版社, 1998
39. 「別世界にて：エッセー／物語／手紙」中村妙子訳, みすず書房, 1991
40. 「ヴィーナスへの旅：ペレランドラ金星編」中村妙子訳, 原書房, 2001
41. 「個性理論の異端性」山形和美訳, すぐ書房, 1997
46. 「『失樂園』序説」大日方玄訳, 叢文社, 1981
48. 「痛みの問題」中村妙子訳, 信教出版社, 改訂, 2004
50. 「詩編を考える」西村徹訳, 信教出版社, 新装, 2000
55. 「悪魔の手紙」森安綾, 蜂谷昭雄訳, 信教出版社, 新装, 1994
60. 「語の研究：ヨーロッパにおける観念の歴史」本田錦一郎他訳, 文理, 1974
61. 「喜びのおとずれ」早乙女忠, 中村邦生訳, 富山房, 1994
62. 「いまわしき砦の戦い：サルカンドラ地球編」中村妙子訳, 原書房, 新装, 2002
64. 「愛はあまりにも若く：プシュケーとその姉」中村妙子訳, みすず書房, 1994
65. 「朝びらき丸 東の海へ」瀬田貞二, 岩波書店, 新装, 2000
66. 「栄光の重み」西村徹, 信教出版社, 新装, 2004

B-1. 第二次資料

1. エイブラムズ, M. H. (Abrams, M. H.) 「脱構築的天使 (The Deconstructive Angel)」Critical Inquiry 3 (1977): 425-38
_____ 「文学用語集 (A Glossary of Literary Terms)」New York: Holt, 1981
_____ 「テキストの扱い方 (How to Do Things With Texts)」Partisan Review 46 (1979): 566-88
_____ 「鏡とランプ (The Mirror and the Lamp)」London: Oxford UP, 1971
2. アデュー, ライオネル (Adey, Lionel) 「C. S. ルイスとオーエン・バーフィールドとの『大戦争』 (C. S. Lewis's "Great War" with Owen Barfield)」ELS Monograph No. 14 Victoria, B. C.: U of Victoria, 1978
3. アーノルド, マシュー (Arnold, Matthew) 「詩の研究 (The Study of Poetry)」Criticism: The Foundation of Modern Literary Judgment, Mark Schorer 他編集, New York: Harcourt, 1958 : 489-50
4. アトキンズ, G・ダグラス (Atkins, G. Douglas), マイケル・L・ジョンソン (Michael L. Johnson)

- 編集「別々のライティングとリーディング (Writing and Reading Differently)」Lawrence, KS: UP of Kansas, 1985
5. オーデン, W・H (Auden, W. H.), 「ジョージ・マクドナルド」前言と後書, エドワード・メンデルソン選訳, New York: Vintage, 1974, 268-273
 6. ボーグランデ, ロバート (Beaugrande, Robert) 「テキスト, ディスコース, プロセス—多様なテキスト学へ向けて (Text, Discourse and Process: Toward a Multidisciplinary Science of Texts)」Norwood, NJ: Ablex, 1980
 7. ビバースルース, ジョン (Beverly, John) 「C. S. ルイスと合理的宗教探索 (C. S. Lewis and the Search for Rational Religion)」Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1985
 8. ビッター, ロイド・F (Bitzer, Lloyd F.) 「レトリックとパブリックナレッジ (Rhetoric and Public Knowledge)」 「レトリック, 哲学, 文学: 探検」ドン・ブックス (Don Bruks) 編集, Wes Lafayette, IN: Prudur UP, 1978, 67-93
 9. ブレイチ, デイビット (Bleich, David) 「文学への反応研究における教育と研究のアイデンティティ (The Identity of Pedagogy and Research in the Study of Response to Literature)」College English, 42 (1980): 360-66
_____ 「リーディングとフィーリング (Reading and Feeling)」Urbana: NCTE, 1975
_____ 「批評解釈のサブジェクティブな性質 (The Subjective Character of Critical Interpretation)」College English 36 (1975): 739-55
 10. ブロッカー, ジーン (Blocker, Gene) 「現実への回帰 (Back to Reality)」Metaphilosophy 5 (1974): 232-41
 11. ブルーム, ハロルド (Bloom, Harold) 「カバールヤと批評 (Kabbalah and Criticism)」New York: Seabury, 1975
 12. ブース, ウェイン・C (Booth, Wayne C.) 「批評的理解 (Critical Understanding: The Powers and Limits of Pluralism)」Chicago: The U of Chicago P, 1979
_____ 「典型の保存 (Preserving the Exemplar)」Critical Inquiry 3 (1977): 407-23
_____ 「フィクションのレトリック (The Rhetoric of Fiction)」Chicago: U of Chicago P, 1961
 13. ブラドック, リチャード (Braddock, Richard) 他「作文の研究 (Research in Written Composition)」Urbana: NCTE, 1963
 14. ブルックス, クレンズ (Brooks, Cleanth) とロバート・ペン・ウォーレン (Robert Penn Warren) 「詩の理解 (Understanding Poetry)」New York: Holt, 1938
 15. ビュークナー, フレデリック (Buechner, Frederick) 「思いでという名の部屋 (A Room Called Remember)」San Francisco: Harper, 1984
 16. ケイン, ウィリアムズ・E (Cain, William E.) 「アメリカの脱構築: ヒルズミラーの最新の文芸批評 (Deconstruction in America: The Recent Literary Criticism of J. Hillis Miller)」College English 41 (1979): 357-82
 17. カマラ, ロバート・C (Camara, Robert C.) 「ニューヨーク・タイムズ対 C. S. ルイス (The New York Times Versus C. S. Lewis)」National Review 31 (1979): 1306-09
 18. カーネル, コービン・S (Carnell, Corbin S.) 「現実の明るい影: C. S. ルイスと使いやすい知能人 (Bright Shadow of Reality: C. S. Lewis and the Feeling Intellect)」Grand Rapids: Eerdmans, 1974
 19. カーペンター, ハンフリー (Carpenter, Humphrey) 「インクリングス (The Inklings)」Boston: Houghton, 1979

20. シャボア, C・バリー (Chabot, C. Barry) 「リーディングの三つの研究 (Three Studies of Readings)」デイビット・ブレイチ著「リーディングとフィーリング」, エレノア・J・ギブソン著「リーディングの心理 (The Psychology of Reading)」, ジェフリー・ハートマンの「リーディングの運命 (The Fate of Reading)」の改訂, *College English* 37 (1975): 426-30
21. チェスタトン, G・K (Chesterton, G. K.) 「正統とは何か (Orthodoxy)」New York: Double day, 1963
22. クリストファー, ジョー・R (Christopher, Joe R.) とジョン・K・オストリング (Joan K. Ostling) 編集「C. S. ルイス: 注釈付チェックリスト (C. S. Lewis: An Annotated Checklist)」Kent, OH: Kent State UP, n.d.
23. コモ, ジェームズ・T (Como, James T.) 「ルイス的文脈の拡大 (Broadening the Lewisian Contest)」*CSL: The Bulletin of the New York C. S. Lewis Society* 12 (1981年1月): 11-15
 _____ 編集「朝食卓のC. S. ルイス (C. S. Lewis at the Breakfast Table)」New York: Macmillan, 1979
24. クローリー, シャロン (Crowley, Sharon) 「ゴルギアスと書記法研究について (Of Gorgias and Grammatology)」*College Composition and Communication* 30 (1979): 279-84
25. カラー, ジョナサン (Culler, Jonathan) 「ディコンストラクション (On Deconstruction: Theory and Criticism After Structuralism)」Ithaca, NY: Cornell UP, 1982
 _____ 「構造主義詩論 (Structuralist Poetics)」Ithaca, NY: Cornell UP, 1975
26. ダニエル, ジェリー (Daniel, Jerry) 「パイナップルの味: 文芸批評のベース (The Taste of the Pineapple: A Basis for Literary Criticism)」*CSL: The Bulletin of the New York C. S. Lewis Society* 11 (1980年6月): 1-10
27. ド・マン, ポール (de Man, Paul) 「盲目と視力 (Blindness and Insight: Essays in the Rhetoric of Contemporary Criticism)」New York: Oxford UP, 1971
28. デリダ, ジャック (Derrida, Jacques) 「書記法について (Of Grammatology)」G. C. スピヴァク訳, Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1976
 _____ 「スピーチと現象 (Speech and Phenomena)」デイビット・B・アリソン訳, Evanston, IL: Northwestern UP, 1973
 _____ 「人文科学におけるディスコースの構造, サイン, プレイ (Structure, Sign and Play in the Discourse of the Human Science)」リチャード・マックセイ及びユージニオ・ドナト編集, Baltimore: Johns Hopkins UP, 1970: 247-72
 _____ 「エクリチュールと差異 (Writing and Difference)」アラン・バス訳, Chicago: U of Chicago P, 1978
29. ダクロット, オズワルド (Ducrot, Oswald) とツベタン・トドロフ (Tzvetan Todorov) 「言語の科学の百科事典 (Encyclopedia Dictionary of the Science of Language)」Baltimore: Johns Hopkins UP, 1979
30. エドワーズ, ブルース Jr. (Edwards, Bruce Jr.) 「鑑賞の過剰について (On the Excesses of Appreciation)」*CSL: The Bulletin of the New York C. S. Lewis Society* 11 (1980年1月): 3
 _____ 「作文指導への文法素論的貢献 (The Tagmemic Contribution to Composition Teaching)」Manhattan: Kansas State UP, 1979
31. エリュール, ジャック (Ellul, Jacques) 「技術社会 (The Technological Society)」New York: Vintage, 1964
32. フィッシャー, マイケル (Fischer, Michael) 「なゼリアリズムはそれほどナイーブなのか: ロマ

- ン主義, プロ意識, 現代批評論 (Why Realism Seems So Naive: Romanticism, Professionalism and Contemporary Critical Theory)』College English 40 (1979): 740-50
33. フィッシュ, スタンレイ (Fish, Stanley) 「このクラスにはテキストは存在するのか? (Is There a Text in This Class?)」Cambridge: Harvard UP, 1980
_____ 「自己消費型作品 (Self-Consuming Artifacts)」Berkeley: U of California P, 1974
_____ 「罪に驚いて (Surprised by Sin: The Reader in Paradise Lost)」New York: St. Martin's, 1967
34. フラワー, リンダ (Flower, Linda) 「作者中心の散文 (Writer-Based Prose: A Cognitive Basis for Problems in Writing)」College English 41 (1979): 19-37
35. フォード, ポール・F (Ford, Paul F.) 「ナルニアの仲間 (Companion to Narnia)」San Francisco: Harper, 1972
36. フーコー, ミッシェル (Foucault, Michel) 「知の考古学 (The Archaeology of Knowledge)」New York: Harper, 1972
_____ 「物事の秩序 (The Order of Things)」New York: Vintage, 1973
37. ファウラー, アラステア (Fowler, Alastair) 「文学的構築の選択 (The Selection of Literary Constructs)」New Literary History 7 (1975): 39-56
38. フライ, ノースロプ (Frye, Northrope) 「批評の解剖 (Anatomy of Criticism)」Princeton: Princeton UP, 1957
_____ 「頑固な構造 (The Stubborn Structure)」Ithaca, NY: Cornell UP, 1970
39. ギブ, ジョスリン (Gibb, Jocelyn) 編集『C. S. ルイスの光 (Light on C. S. Lewis)』New York: Harcourt, 1965
40. ギルバート, ダグラス (Gilbert, Douglas) とクライド・S・キルビー (Clyde S. Kilby) 「C. S. ルイス: 彼の世界のイメージ (C. S. Lewis: Images of His World)」Grand Rapids: Eerdmans, 1973
41. ゴールドスミス, アーノルド・L (Goldsmith, Arnold L.) 「アメリカ文芸批評 (American Literary Criticism: 1905-1965)」Vol. III, Boston: Twayne, 1979
42. グラーフ, ジェラルド (Graff, Gerald) 「イエールの恐怖と振動 (Fear and Trembling at Yale)」American Scholar 46 (1977): 467-78
_____ 「文学対そのもの (Literature Against Itself)」Chicago: U of Chicago P, 1979
_____ 「詩的叙述と批評的ドグマ (Poetic Statement and Critical Dogma)」Chicago: U of Chicago P, 1980
_____ 「誰が批評を殺したのか? (Who Killed Criticism?)」American Scholar 49 (1980): 337-55
43. グラーフ, ハーベイ (Graff, Harvey) 「リテラシー史の内省 (Reflections on the History of Literacy: Overview, Critique, and Proposals)」Humanities in Society 4 (1981): 303-34
44. グリーン, ロジャー・ランスリン (Green, Roger Lancelyn) とウォルター・フーパー (Walter Hooper) 「C. S. ルイス: 伝記 (C. S. Lewis: A Biography)」New York: Harcourt, 1974
45. グリムズ, ジョセフ・E (Grimes, Joseph E.) 「ディスコースの糸 (The Thread of Discourse)」The Hague: Mouton, 1975
46. ハロラン, マイケル (Halloran, Michael) 「レトリックの果て, 古典と現代 (On the End of Rhetoric, Classical and Modern)」College English 36 (1975): 622-31
47. ハネイ, マーガレット・P (Hannay, Margaret P.) 「修復: スペンサーとミルトンの理解のために C. S. ルイスの果たした貢献 (Rehabilitations: C. S. Lewis's Contribution to Understanding of Spenser and Milton)」論文, State U of New York at Albany, 1976
48. ハートマン, ジェフリー (Hartman, Geoffrey) 編集「脱構築と批評」New York: Seabury, 1979

49. ホークス, テレンス (Hawks, Terence) 「構造主義と意味論 (Structuralism and Semiotics)」
Berkeley: U of California P, 1977
50. ハーシュ, E・D・Jr. (Hirsch, E. D. Jr.) 「解釈の目的 (The Aims of Interpretation)」Chicago: U of
Chicago P, 1977
_____ 「作文の哲学 (The Philosophy of Composition)」Chicago: U of Chicago P, 1979
_____ 「解釈の有効性 (Validity in Interpretation)」New Haven: Yale UP, 1979
51. ホランド, ノーマン (Holland, Norman) 「五人の読者のリーディング (Five Readers Reading)」
New York: Yale UP, 1976
_____ 「交流批評 (Transactive Criticism: Re-Creation Through Identity)」Criticism 18 (1976): 334-52
_____ 「交流教育 (Transactive Teaching: Cordelia's Death)」College English 39 (1977): 276-85
_____ 「統一アイデンティティ・テキスト・セルフ (Unity Identity Text Self)」Reader-Response Criticism,
ジェーン・P・トンプキンス (Jane P. Tompkins) 編集, Baltimore: Johns Hopkins UP, 1981, 118-33
52. ホーマー, ポール・L (Holmer, Paul L.) 「C. S. ルイス: 信仰と思想の形成 (C. S. Lewis: The Shape
of His Faith and Thought)」New York: Harper, 1976
53. フック, J・N (Hook, J. N.) 「大学英文科 (College English Departments: We May Be Present at
Their Birth)」College English 40 (1978): 269-73
54. ハワード, トーマス (Howard, Thomas) 「C. S. ルイスの業績 (The Achievement of C. S. Lewis)」
Wheaton, IL: Harold Shaw, 1980
55. ハタル, チャールズ・A (Huttr, Charles A.) 「ナルニアのアレゴリー化の異端性 (The Heresy of
Allegorizing Narnia)」CSL: The Bulletin of the New York C. S. Lewis Society 11 (1980年1月): 1-3
56. ハイNZ, サミュエル (Hynes, Samuel), チャド・ウォルシュ (Chad Walsh) 著 「C. S. ルイスの
文学的遺産 (The Literary Legacy of C. S. Lewis)」の改訂, ジェームズ・T・コモ (James T. Como) 編
「朝食卓のC. S. ルイス (C. S. Lewis at the Breakfast Table)」The New York Times Book Review 84
(1979年7月8日): 3+
57. イーザー, ウルフガング (Iser, Wolfgang) 「リーディング行動 (The Act of Reading)」Baltimore:
The Johns Hopkins UP, 1980
_____ 「含意された読者 (The Implied Reader)」Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1980
_____ 「散文作品の不確定性と読者反応 (Indeterminacy and the Reader's Response in Prose Fiction)」
Aspects of Narrative, J・ヒルズ・ミラー (J. Hillis Miller) 編集, New York: Columbia UP, 1971: 1-45
_____ 「リーディング・プロセス (The Reading Process: A Phenomenological Approach)」New Literary
History 3 (1972): 279-99
58. ジェームソン, フレデリック (Jameson, Frederic) 「言語の牢獄 (The Prison-House of Language)」
Princeton: Princeton UP, 1972
59. ジョンソン, バーバラ (Johnson, Barbara) 「内なる差異 (The Critical Difference: Essays in the
Contemporary Rhetoric of Reading)」Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980
60. キーフ, キャロリン (Keefe, Carolyn) 編集 「C. S. ルイス: 語り手と教師 (C. S. Lewis: Speaker
and Teacher)」Grand Rapids: Eerdmans, 1974
61. キルビー, クライド・S (Kilby, Clyde S.) 「C. S. ルイスのキリスト教社会 (The Christian World of
C. S. Lewis)」Grand Rapids: Eerdmans, 1972
62. キネアヴィー, ジェームズ・L (Kinneavy, James L.) 「ディスコース論 (A Theory of Discourse)」
New York: Norton, 1971

63. クリフト, ピーター (Kreeft, Peter) 「C. S. ルイス, 批評エッセー (C. S. Lewis, a Critical Essay)」
Grand Rapids: Eerdmans, 1969
64. クーン, トーマス・S (Kuhn, Thomas S.) 「科学的改革の構造 (The Structure of Scientific
Revolutions)」 Chicago: U of Chicago P, 1970
65. ラッシュ, クリストファー (Lasch, Christopher) 「ナルシズムの文化 (The Culture of Narcissism)」
New York: Warner, 1979
66. ライチ, ビンセント (Leitch, Vincent) 「脱構築的批評 (Deconstructive Criticism)」 New York:
Columbia UP, 1983
67. レントリッキア, フランク (Lentricchia, Frank) 「ニュー・クリティシズム以後の批評理論 (After
the New Criticism)」 Chicago: U of Chicago P, 1980
68. リンズクーク, キャサリン (Lindskoog, Kathryn) 「C. S. ルイス: 単なるキリスト者 (C. S. Lewis:
Mere Christian)」 Downers Grove: Inter Varsity, 1981
_____ 「おとぎの国のユダヤのライオン (The Lion of Judah in Never-Never Land)」 Grand Rapids: Eerdmans,
1973
69. マクドナルド, ジョージ (MacDonald, George) 「ファンタステスとリリス (Phantastes and
Lillith)」 C. S. ルイス編, Grand Rapids: Eerdmans, 1964
70. マクドナルド, グラヴィル (MacDonald, Greville) 「ジョージ・マクドナルドと彼の妻 (George
MacDonald and His Wife)」 London: Allen, 1924
71. メイロー, ステイブン (Mailloux, Steven) 「文芸批評と作文 (Literary Criticism and
Composition)」 College Composition and Communication 29 (1978): 267-71
_____ 「読者反応批評? (Reader-Response Criticism?)」 Genre 10 (1977): 413-31
72. メイ, チャールズ・E (May, Charles E.) 「火をおこす (To Build a Fire)」 Studies in Short Fiction
15 (1976): 19-24
73. メイランダー, ギルバート (Meilaender, Gilbert) 「他人趣向 (The Taste for the Other)」 Grand
Rapids: Eerdmans, 1978
74. ミラー, J・ヒリス (Miller, J. Hillis) 「コンポジッションとディコンポジッション (Composition
and Decomposition)」 Composition and Literature: Bridging the Gap, ウィニフレット・ホーナー
(Winifred Horner) 編, Chicago: U of Chicago P, 1983: 38-57
_____ 「脱構築者を脱構築する (Deconstructing the Deconstructors)」 ジョゼフ・リデル著 「逆さの鐘
(The Inverted Bell)」 の改訂, Diacritics (Summer 1975): 24-31
_____ 「現代のレトリック研究の機能 (The Function of Rhetorical Study at the Present Time)」 The State
of the Discipline, a special issue of the ADE Bulletin 62 (1979年9~11月): 12-15
_____ 「プルーラリズムⅢの限界: ホストとしての批評家 (The Limits of Pluralism III: The Critic as
Host)」 Critical Inquiry 3 (1977): 239-47
_____ 「『ステイブンス』ロックと治療としての批評, II ("Stevens" Rock and Criticism as Cure, II)」
Georgia Review 30 (1976): 330-48
75. ノット, キャサリン (Nott, Kathleen) 「皇帝の服 (The Emperor's Clothes)」 Bloomington: Indiana
UP, 1958
76. オールセン, ドロシー (Olsen, Dorothy) 「一番目と二番目の事 (First and Second Things: The
Theoretical Criticism of C. S. Lewis)」 講演, Bowling Green State U, 1978
77. オング, ウォルター (Ong, Walter) 「リーディング, テクノロジー, 人間意識 (Reading,

- Technology and Human Consciousness)」Literacy as a Human Problem, ジェームズ・レイモンド編, U of Alabama P, 1982, 170-99
78. ペックハム, モース (Peckham, Morse) 「プルーラリズムの無限 (The Infinitude of Pluralism)」Critical Inquiry 3 (1977): 803-16
79. パーシー, ウォーカー (Percy, Walker) 「宇宙迷子 (Lost in the Cosmos)」New York: Farrar, 1983
 _____ 「瓶の中のメッセージ (The Message in the Bottle)」New York: Noonday P, 1975
80. パイク, ケネス・L (Pike, Kenneth L.) 「人間行動の構造の統一論に関する言語 (Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior)」The Hague: Mouton, 1967
81. ポラニ, マイケル (Polanyi, Michael) 「知識と存在 (Knowing and Being)」Chicago: U of Chicago P, 1975
82. ランサム, ジョン・クロー (Ransom, John Crowe) 「探し回る: エッセー集 1941-1970 (Beating the Bushes: Selected Essays 1941-1970)」New York: New Directions Publishing, 1972
 _____ 「新批評 (The New Criticism)」Norfolk, CT: New Directions Publishing, 1941
83. ライヒェルト, ジョン (Reichert, John) 「文学の意味 (Making Sense of Literature)」Chicago: U of Chicago P, 1977
84. ライス, リチャード・H (Reis, Richard H.) 「ジョージ・マクドナルド (George MacDonald)」New York: Norton, 1926
85. リチャーズ, I・A (Richards, I. A.) 「文芸批評の原則 (Principles of Literary Criticism)」New York: Harcourt, 1928
 _____ 「科学と詩 (Science and Poetry)」New York: Harcourt, 1926
86. ローゼンブラット, ルイーゼ・M (Rosenblatt, Louise M.) 「文学の探検 (Literature as Exploration)」New York: Noble and Noble, 1976
 _____ 「読者, テキスト, 詩 (The Reader, the Text, the Poem)」Carbondale: Southern Illinois UP, 1978
87. サドラー, グレン・E (Sadler, Glenn E.) 「ジョージ・マクドナルドの素晴らしい想像力 (The Fantastic Imagination In George MacDonald)」Imagination and the Spirit, チャールズ・ハッター編, Grand Rapids: Eerdmans, 1971: 215-27
88. シェーファー, フランセス・A (Schaeffer, Frances A.) 「理性からの逃走 (Escape From Reason)」Downers Groves, IL: Inter Varsity, 1969
89. シャッケル, ピーター・J (Schakel, Peter J.) 「形態への憧れ (The Longing for a Form)」Grand Rapids: Baker, 1977
 _____ 「C. S. ルイスの理性と想像力 (Reason and Imagination in C. S. Lewis)」Grand Rapids: Eerdmans, 1984
90. サール, ジョン・R (Searle, John R.) 「言語行動 (Speech Acts)」Cambridge: Cambridge UP, 1976
91. シャピロ, カール (Shapiro, Karl) 「外側の批評家 (The Critic Outside)」American Scholar 50 (1981): 197-210
92. ショネシー, ミーナ (Shaughnessy, Mina) 「間違いと期待 (Errors and Expectations)」New York: Oxford UP, 1979
93. スキナー, B・F (Skinner, B. F.) 「自由と尊厳の彼方 (Beyond Freedom and Dignity)」New York: Knoph, 1971
94. スラトフ, ウォルター (Slatoff, Walter) 「読者へ, 尊敬をこめて (With Respect to Readers)」Ithaca, NY: Cornell UP, 1970

95. スピヴァク, ガーヤットリー・チャクラヴォルティ (Spivak, Gayatri Chakravorty) 「世界を読む: 1980年代の文学研究 (Reading the World: Literary Studies in the 1980s)」 Reading and Writing Differently, G・ダグラス・アトキンズとマイケル・L・ジョンソン編, Lawrence: UP of Kansas, 1985: 27-37
96. シュタイナー, ジョージ (Steiner, George) 「バベルの後 (After Babel)」 Oxford: Oxford UP, 1975
_____ 「困難について, その他のエッセー (On Difficulty and Other Essays)」 Oxford: Oxford UP, 1978
97. トンプキンス, ジェーン・P (Tompkins, Jane P.) 編 「読者反応型批評 (Reader-Response Criticism)」 Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980
98. ウェイン, ジョン (Wain, John) 「C. S. ルイス (C. S. Lewis)」 Encounter 22 (1964年5月): 51 +
99. ウォルシュ, チャド (Walsh, Chad) 「C. S. ルイスの文学遺産 (The Literary Legacy of C. S. Lewis)」 New York: Harcourt, 1979
100. ホワイト, ユージン・E (White, Eugene E.) 編 「変遷のレトリック (Rhetoric in Transition: Studies in the Nature and Uses of Rhetoric)」 University Park: Pennsylvania State UP, 1980
101. ウィリアムズ, ドナルド・T (Williams, Donald T.) 「『非正統的』ルイス詳察 (A Closer Look at the 'Unorthodox' Lewis)」 Christianity Today 23 (1979年12月21日): 24-27
102. ウィムザット, W. K. (Wimsatt, W. K.) 「言語のイコン (The Verbal Icon)」 Lexington: U of Kentucky P, 1954
103. ウルフ, ロバート・L (Wolf, Robert L.) 「黄金の鍵: ジョージ・マクドナルドのフィクション研究 (The Golden Key: A Study of the Fiction of George MacDonald)」 New Haven: Yale UP, 1961

B-2. 第二次資料翻訳

1. M・H・エイブラムズ 「鏡とランプ: ロマン主義理論と批評の伝統」 水之江有一訳, 研究社出版, 1976
21. チェスタトン, G・K 「正統とは何か」 安西徹雄訳, 春秋社, 1995
28. デリダ, ジャック 「エクリチュールと差異」 若桑毅訳, 法政大学出版局, 1977
36. フーコー, ミッシェル 「知の考古学」 中村雄二郎訳, 河出書房新社, 1995
38. フライ, ノースロブ 「批評の解剖」 海老名宏他訳, 法政大学出版局, 1980
67. レントリッキア, フランク 「ニュー・クリティシズム以後の批評理論」 村山淳彦, 福士久夫訳, 未来社, 1993
69. マクドナルド, ジョージ 「ファンタステス」 蜂谷昭雄訳, ちくま文庫, 1999/「リリス」 荒俣宏訳, 筑摩書房, 1986
85. リチャーズ, I・A 「文芸批評の原則」 岩崎宗治訳, 八潮出版社, 1970
_____ 「科学と詩」 岩崎宗治訳, 八潮出版社, 1978

翻訳者あとがき

本訳書は、札幌大学総合論業第19号に掲載のイントロダクションと第一章に引き続いて、オハイオ州立大学教授 Bruce L. Edwards, Jr. 著「A Rhetoric of Reading: C. S. Lewis's Defense of Western Literacy (1986)」の二章から五章の翻訳です。日本語翻訳への許可をいただけたことを感謝申し上げます。引用文献 (A-1./B-1.) の日本語翻訳があるものは (A-2./B-2.) に掲載しました。引用文献の番号は、原文にはありませんが、情報の簡潔さを求めて翻訳者の判断で記載いたしました。本書の翻訳に当たって訳者がとった方針は、著者の意を体した翻訳は自明の理であります。実際にはそんなに簡単

なことではありませんでした。本書のような、著者と訳者の学識の間にどう力んでも絶対に埋めがたい大きな溝がある場合、事実上は不可能と言えます。そこで訳者が心がけたことは、言い換えが多くて目障りであっても、あえて原文尊重の立場から、できる限り残しました。出典の作品名や人名その他の訳名は、できるだけ馴染みのある表記法をとるように心がけました。できる限り努力をしたつもりですが、思わぬ誤訳、大方の御叱正、御教示を賜れば幸いです。札幌大学総合論叢第19号に掲載のイントロダクションと第一章の訳業に、元札幌大学教授宇波彰先生から懇切な御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表します。